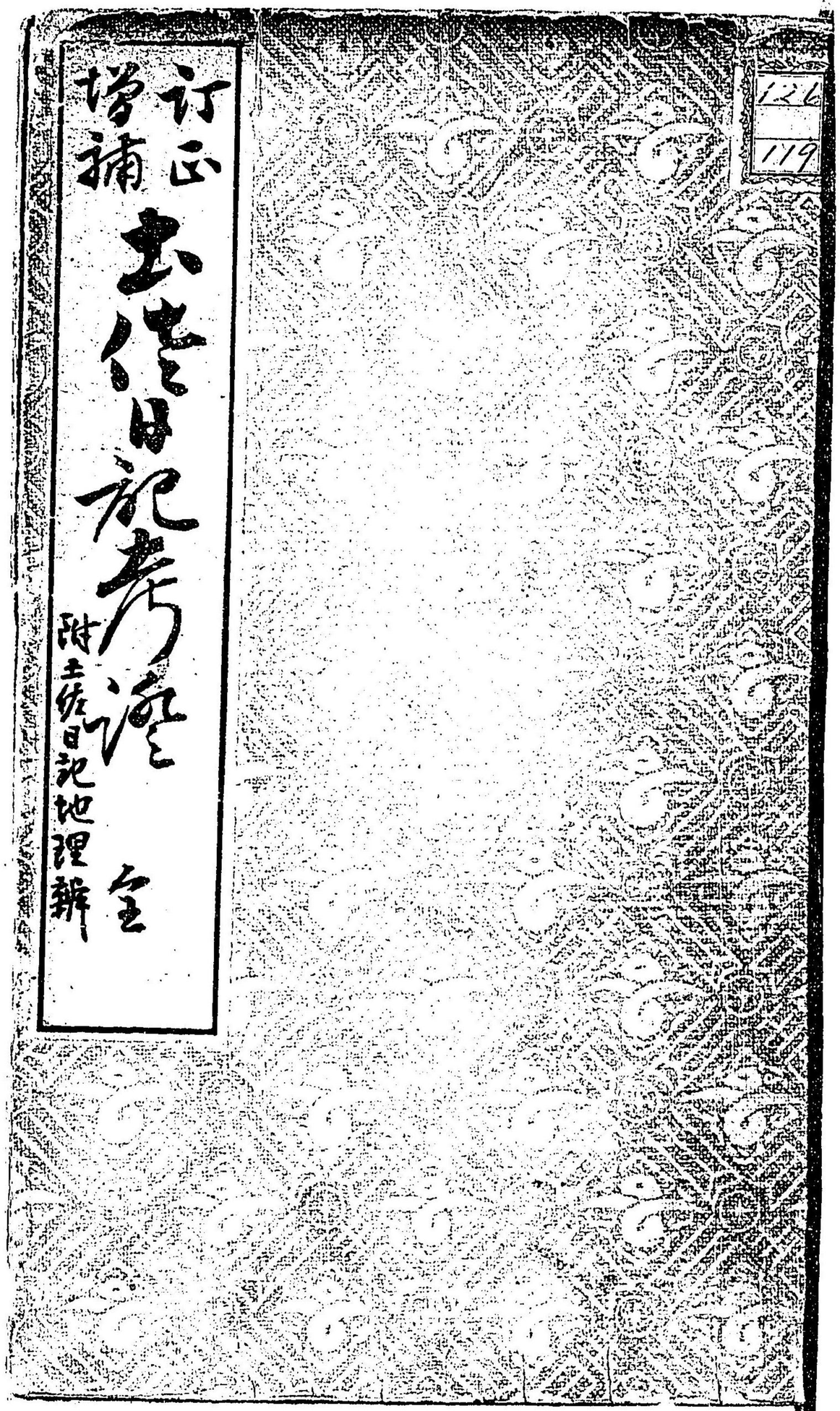


126
119

095860-000-9

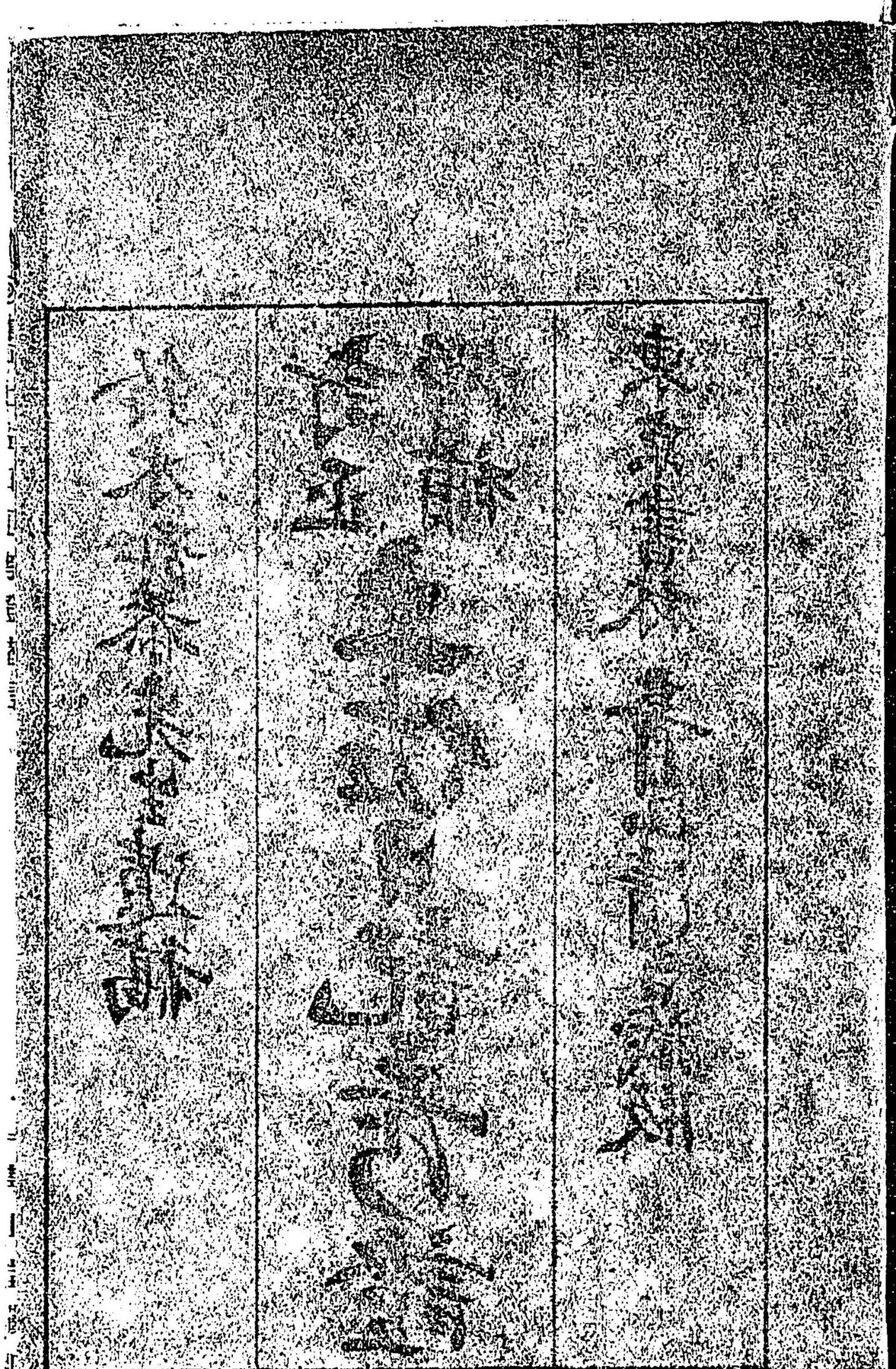
126-119

土佐日記考証（訂正増補）

鈴木　弘恭／訂正増補

M31

DBR-0071



○仲山高陽小傳

高陽本姓ハ春宗我部名ハ子和通稱ヲ清右衛門トイヒキ高陽ハ其ノ號ナリ又松石齋トモ號シキ土佐ノ人ナリ性英敏ニシテ幼ヨリ書畫ヲ好ミ書ハ關鳳岡ニ學ビ畫ハ彭華川ヲ師トシテ尤人物ニ長ジタリトイヘドモ沈南蘋ヲ摹セリシガ後ニハ自一家ノ風ヲナシタリトゾ其ノ友ニハ戸部原山岩井玉洲アリ何レモ當世ノ名手ナリキ父理右衛門勝久ハ商業ヲ營ミ高知ノ西堺町ニ住みて阿波屋トイヒ兄忠七元守ハ神道ヲ專トシテ靜流ノ薙刀及小鼓ヲ能クセリ理右衛門嘗テ堺町ニ一新路ヲ開キ大ニソノ繁榮ヲ圖らんとせしかど官許サゞリテほゞなくも思フ所ヲ果サずつひニ世ヲなキ人となれり忠七等痛ク之ヲ悲みて數年ノ後やうやく其ノ遺志ヲ全うしたり高陽若クシテ富永惟安ニつき儒學ヲ修めたる傍詩賦ニ心ヲ寄せて頗長じたりしかバ即七律ヲ賦して新街ノ成れるヲ喜ビ先人ノ國ヲ念フ心ノ厚かりしヲ感したり思想熱實語句亦之ニ適ひて大ニ其ノ德ヲ慕ヒしむるニ足るソノ後堺町漸盛なり忠七等店ヲ北ニ開きて唐物書籍等ヲ鬻き東ニ門ヲ建てゝ貴賓雅客ノ出入ニ供したりしかバこれより訪フ人殊ニ多く鎗ヲ擔ふる從者ヲ召しつれたるさゝへ日々門外ニ絶えざりきとゾ皆忠七高陽等ノ門人なる

鈴木知雄先生遺稿

訂正増補土佐日記考證

附土佐日記地理攷

東京書林 青山清藏版

訂正増補

土佐日記考證

緒言

この日記は、日記といふ日記の中にも、になくめでたくて、はやくよりいみしう世にもてはやされしことは今さらにいふべくもあらず。その注釋ごもさへ、くさ〴〵あれごも、岸本翁の考證をぞ、すぐれてよろしとはいふべき。されごろの本文にことなる所は、かたはらにしるされたるがれほければ、初學の徒の、いづれをよしともさだめかぬるが、あかぬこゝちせらるれば、こたびろのよしあしをかうがへさだめて、いさゝかにてもよしとれぼゆるを本文として、不用をけづり、且二三の異本をもて訂正を加へ、さて舊注に漏れたる所、あるはあやまれるふしのあるは、わが師黒川

訂正増補 土佐日記考證

緒言

この日記は、日記といふ日記の中にも、になくめでたくて、はやくよりいみしう世にもてはやされしことは今さらにいふべくもあらず。その注釋どもさへ、くさ〴〵あれども、岸本翁の考證をぞ、すぐれてよろしとはいふべき。されどその本文にことなる所は、かたはらにしるされたるがほければ、初學の徒の、いづれをよしともさだめかぬるが、あかぬこゝちせらるれば、こたびその よしあしをかうがへさだめて、いさゝかにてもよしとおぼゆるを本文として、不用をけづり、且二三の異本をもて訂正を加へ、さて舊注に漏れたる所、あるはあやまれるふしのあるは、わが師黒川

訂正土佐日記考證者言 一二 青山堂藏版

眞賴翁の考、および愚考をもて、これを増補したり。よて訂正増補の文字を冠らせたれど、大かたはもとのまゝをうしなはざらむことを旨として、舊名をさへに存しおきて、訂正増補土佐日記考證とはほせつ。さてかくはものしつれども、余もとより淺學寡聞なれば、なほ漏れたることも誤れるふしもありぬべく、はた今やうの活版なれば、例の口をしき誤植も出來ぬべし。ろは見む人よく注意したまへねかし。

明治二十九年八月

鈴木弘恭

凡例

一この考證は、定家卿自筆本、爲家卿自筆本、烏丸資慶卿自筆本、妙壽院本、古寫本三本、聞書、見聞抄、附注、扶桑拾葉集本、群書類從本、寛永本、首書、土佐日記注、打聞等によりてかゝれたれば、今その現存せるは、本書につきて挍合し、又別勘、古寫本一本、黒川眞頼挍合本、挍異首書本、讀本などの如きも參考に加へ、又師説幷に愚考をも交へて、訂正増補しつれば、即その所に、何書云、何某云、とかき記しぬ。

一點注に「訂」或は「増」とあるは、余が愚考臆説もあれども、諸本によりていふ所には、悉くその書名の略號を擧げたり。定家卿自筆本を定本、附注本を附本といふが如し。又他人の説はその人名を擧げつ。

一本書中、書名の略號を用ゐたる符號は、左の如し。

定本　定家卿自筆本
妙本　妙壽院本
附本　附注本
爲本　爲家卿自筆本
一本　古寫本
抄本　土佐日記抄

扶本　扶桑拾葉集本
黒本　黒川真頼校合本
讀本　土佐日記讀本
群本　群書類從本
別本　土佐日記別抄

一考證原書の注の例は、本文を引たる所には、その前後一字を欠字し、又標注は、その標目を擧げずして、一様に書きつゞけたれど、さてはいさゝか紛らはしきやうなれば、今改めて、注の本文には、首に●を冠らせ、標注には、一々標目を擧げたり。又原標注は、その書名の異なるごとに、皆別行にまたれど、同一のことにかゝるものは、一字づゝ欠字して續けたり。又標注の分注は、割書せず。（）を以て圍み、例令ば、館（和名多知）の如くせり。又訂正増補の本文の首には、○を冠らせ、右傍に――を添へて、見やすからしめつ。

一土佐より京まで歸り上らるゝ國々の地理につきては、先輩の考說どもと、余が嘗てものせる航路略圖とを巻末に添へて、讀者の便に供す。

土佐守の任云々　甘之集云、延長八年土佐の國にくだりて、承平五年京にのぼりて、左のおとゞのしら川におはします御ともに、歌よませたまひける、もゝくさの花のかげまでうつしつゝおもひかはらぬしら川のみづ、

そも〳〵この日記は、貫之のぬし延長八年土佐守の任にあたりて、かの國にくだられしが、任はてゝ、承平四年十二月廿一日舟出して、京にかへりのぼられし旅の日記なりけり。今の世の人は、日記としいへば、旅の日記のみなるやうにおもふめれど、すべて日記といふものは、日々の事をしるせるをもていへる名なれば、旅の日記をのみいへるにはあらず。今いふ家々の記錄といふものを、ふるくは日記とのみいへり。されば旅の日記をわけていはんには、路次記、あるは旅日記などこういはめ。さて家々の記錄といへるものは。みな男のしるすわざにして、しかも漢字もてしるせれば、女のわざならず。されば男もすなる日記といふものを、女もして見んとて、とはことわれるなり。そをいま假名もてしるせるは、めゝしきわざなれば、わざと女のかけるさまにいひなしてかゝれつるにこそ。

更科日記　孝標の女の作なり、孝標は、菅原公六世の孫なりといへり、

十六夜日記　[増]一巻あり、阿佛尼の作なり、阿佛尼は、安嘉門院の四條といひ、爲家卿の室なり、藤髪して、阿佛尼といへるなり、

李翺　[増]李翺、字は習之、進士より起り、桂管湖南觀察使、山南東道節度使に歴遷してやす、文辭に妙なりしかば、睦して文といへり、

來南錄　[増]眞郎、唐人小説、唐代小説等に收められたり、

歐陽修　[増]歐陽修、字は永叔、六一居士と號す、文章家の泰斗なりしは、皆人のよく知る所なり、

于役志　[増]眞郎、宋人小説、に收められたり、

陸放翁　[増]陸游、字は務觀、放翁と號す、詩にも長下たりし人なり、

入蜀記　[増]六巻あり

范成大　[増]範文に巧なりしは、能く人の知る所なり、

周必大　[増]周必大、字は子充、平園老叟と號す、

呂祖謙、字は伯恭、東萊先生と稱す、

郭天錫　[増]郭天錫、名は昇、天錫はその字なるべし、

客杭日記　[増]一巻あり、知不足齋叢書に收められたり、

○陸鄴錄　[増]本書未だ考へず、

○汎舟錄　[増]説郛に收められたり、

○方凰　[増]方凰、字は時鳴、仕へて御史たりといへり、

○吳船錄　[増]二巻あり、

○呂祖謙　[増]

○金華游錄　[増]一

いまこの土佐日記をはじめにて、つぎ〳〵紀行といへるもの、更科日記、十六夜日記などゝ、そのほかいとおほかり。このすがたなるもの、漢土にもふるく見えたり。そは唐の李翺が來南錄をはじめとかせん。貫之のぬしも來南錄などを見てより、この書をかゝれしかともおもはるれど、猶おのづからにすがたの似たるなりけり。その外漢土にもいとおほかれど、こゝにくらぶれば、みな紀氏より後のものなり。この書のをはり承平五年は五代の後唐の末にあたれり　されどうのあらましをこゝにあげたり。宋の歐陽修が于役志、陸放翁が入蜀記、范成大が驂鸞錄、吳船錄、周必大が奏事錄、汎舟錄、呂祖謙が入越記、方凰が金華游錄、元の郭天錫が客杭日記などあり。このほかにもおほかりぬべけれど、しるすにいとまあらず。

季吟の抄　[増]北村季吟、拾穗軒と號し、呂覧と稱す、著書甚だ多し、土佐日記抄二巻、其の著なり、

京極黄門　[増]藤原定家、三位入道俊成の子、詠歌の逸人なり、京極に居り、正三位權中納言に累進せしかば、京極黄門と稱せり、黄門は中納言の唐名なり、

老人雜話　[増]二巻あり、江村專齋の口授を雜記せるものなり、

遊華王院　[増]後白河院の御願にて建てられたる寺院なり、

連歌師玄的　[増]玄的の傳未だ考へず、

加賀家　[増]本文は、當時聞りたるにや、欠字したれど、今はさのみはゞかりて、老人雜話によりて加へつゝ、下文八條殿またおなじ、

寛永刊行の本　この寛永本を、後にあらためて、萬治三庚子初春吉祥日秋田屋平左衛門版行させし本あり、たゞ奥書をあらため

延長八年より承平四年まで五年なれば、ある人あがたのよとせいつとせはてゝとはいへり、さて明年二月十六日に京にいりて、前後六年なれば、五とせ六とせのうちに千とせやすぎにけんとはかけり。

この日記の注釋どもいとおほかるがなかに、世にあまねくもてあつかふは、季吟の抄のみになん有ける。そが本文は、京極黄門自筆本によれり。もとより京極黄門自筆本は、貫之のぬしの自筆の本をうつされしものとぞ。されればこの書に定家卿本と引ものは、抄の本文にたがふ事なし。

老人雜話云、貫之自筆土佐日記、遊華王院寶物也、是を定家卿うつしたまへる、連歌師玄的方につたへ、後は加賀家に納むといへり、定家卿くわしく自己の筆法をもてうつし、末に三枚は貫之の書法を寫らせん爲にや、文字の大さ字體をもうつしおかれ、歌にその趣をふるしおきたまふと云々、貫之自筆本は、今亡びたりとなり、彼の定家卿本は、加賀家より八條殿へまゐらするとぞ、

いまかく板にゑれるこのふみの本文は、寛永廿年といふとし、風月宗智が刊行する所の本にまたがへり。そはかならずしもみながらよしとにもあらねど、附注あるは抄などの本文にくらぶれば、はるかにまさりたれば、今はこの本文にまたがへり。さるは古寫本には、この本にもまさりたるもあめれど、寫本の本文にまたがはゞ、さかしらにみ

めたるのみにて、この本といさゝかたがふことなし、〔増〕寛永本は、奥書に寛永廿年孟春、二條通觀音町風月宗智刊行と見えたり、

扶桑拾葉　〔増〕扶桑拾葉集のことなり、三十巻あり、源光圀卿の著なり、

群書類從　〔増〕凡一千二百七十三種、六百三十五冊あり、塙保巳一の著なり、

づからなほしもやまたるとも、人のうたがひあらん事をおそれて、かならずみながらよしとにはあらねど、印本なれば、この寛永本にはよれるなり。

この書の原本にとれる寛永年間の本は、かみにもいへるがごとく、外の本にくらぶれば、まされることすくなからず。もとよりいとよき本なれど、ふみあき人の手になれりしかば、假名のたがひ、また文字に假名をつけたるなど、誤まれるもいとおほく、誤字脫文衍字などすくなからねど、またく誤れりと見ゆるは、あるはなほしもし、あるは文字をもくはへ、あるははぶきもせり。されどたゞ異本にのみよりてあらたむる事なし。あるは附注、あるは抄、あるは扶桑拾葉、あるは群書類從などの印本をさきにたてゝ、校正をばくはへつ。そはさきにもいへるがごとく、寫本のみによりてあらためなば、みづからさかしらもやくはへたると、人のもどきおもはん事を思ひてなり。猶誤れりと見ゆる所もあれど、おほかたにことのこゝろのすめるかぎりはもとのまゝにておきつ。たゞいちじるき誤りをのみしたゝせり。

原本の文中に、眞名にかける所いとおほけれど、初學の人のひがめまん事をおもひて、今大かたは假名になほしてかけり。されど原本の意をうしなはんもまたあたらしければ、その眞名をば本文の左につけたり。すべてこの日記の古寫本、おほくは眞名をまじへかきたるものぞかし。たゞ定家卿本、爲家卿本、烏丸資慶卿本、この三つもはらし。

假名にはかきたまへり。又本文の右につけたる眞名は傍注としるべいにしへより今にいたるまで、文かゝん本にすべきは、この日記にしくはあらじかし。このふみよりさきだちて、古今集の序、または大井河行幸和歌の序などもあなれども、古今集の序は、そのまゝにはうけがたきものなり。また大井河行幸和歌の序は、ひたすらもろこしの序文の躰にのみならひてかゝれしかば、これにもかれにもかよはして、

定家卿本云々　〔増〕定家卿本及爲家卿本、烏丸資慶卿本のことは下文に委し、

古今集の序云々　〔増〕古今和歌集の序のことなり、大井河行幸和歌の序、いづれも貫之朝臣の作なり、

文の本にはしかたかるべし。されば文かゝん本には、まづこの日記、または伊勢物語などをこそすべけれ。さてこの日記のかきざまは、いたづらに見すぐせば、さまでにもあらぬことどもの、ふかくあぢはひ見れば、こゝろもふでもおよばざるばかりのあぢはひもいでくるぞかし。そはこの日記のはじめに、をとこもすなる日記といふものを、女もして見んとてするなりとあるよりして、ことをうちうへにいひて、ことばのあやをなせるをもて、もはら興としてはかゝれぬ。そはこの下にあげたるを見てもおもふべし。

題端　をとこもすなる日記といふものを、女もして見んとてするなり。

十二月廿二日　ふなぢなれど、うまのはなむけす。

同日　しほうみのほとりにてあざれあへり。

同廿四日　ひともじをたにしらぬものしが、あしはともじにふみてぞあそぶ。

同廿七日　にしぐになれど、かひうたなどいふ。

正月七日　あをうまを思へどかひなし。たゞ波のしろきぞ見ゆる。

同九日　海はあるれど、心はすこしなぎぬ。

同十六日　霜だにもおかぬかたぞといふなれど、波の中にはゆきぞふりける。

同廿日　もろこしとこの國とは、こととなるものなれど、月のかげはおなじことなるべければ。

同廿一日　春のうみに秋のこのはしもちれるやうにぞありける。

同日　くろ鳥のもとに、しろき波をよすとぞいふ。

二月朔日　いその波は雪のごとくに白く、貝のいろはすはうにて。

同四日　女兒のためには親をさなくなりぬべし。

これらみなことをうらうへにいひて、ことばのあやをなせり。こをいたづらに見すぐすべきにあらず。さてすべてこの日記を見んには、紀氏みづからを女になしてかゝれしことを、つかのまもわするべからず。

伊勢物語　〔増〕二巻あり、作者詳ならず、見すぐせば　〔訂〕前後の文脈より考るに見すぐさばとありたき所なり、

この日記のうちに、哥もいとおほかれど、みづからよめるといふ哥一首もなく、みな外の人のよめるになしてかゝれしも、ひとつの趣意と見えたり。

正月九日おなじく廿二日の條に、舟哥をのせられたる所あり。そを外の歌のなみにかゝんもいかならんとは思へど、心ひとつもてあらたむべくもあらねば、たゞ原本のまゝにておきつ。

この日記ところ〴〵に地名など見えたるを、そこに注釋をもくはへたれど、みづからゆきて見ざる所なれば、猶ひがことゞもおほかりぬべし。そがうへ土佐よりかへりのぼられし路次の國々の地理にかゝはりたる書もとぼしければ、あまねく考へしるす事あたはず。

いまこの書に挍合せる本は、紀氏自筆本を、定家卿のみづからうつしたまへる本、こは抄の本文におなじ、爲家卿自筆本、烏丸資慶卿自筆本、又外に妙壽院本、古寫本三本、聞書見聞抄、扶桑拾葉本、群書類從本、附注本などを挍合せり。そがなかに爲家卿の本は、おほかたは附注におなじ。

地理にかゝはりたる書【增】卷末にのせたる地理辭を見合すべし、

爲家卿自筆本　【增】藤原爲家、定家の子なり、歌道に長す、

烏丸資慶卿自筆本　【增】權中納言正三位光賢卿の子、權大納言正二位にて、寛文九年四十八才にて薨す、

妙壽院本　【增】妙壽院は、藤原慶安の法號なり、慶安、名は顯、字は欽夫、慶安は其の號なり、藤原定家卿の後裔、冷泉爲純の二子なり、博學多識、家隆公の見る所となり、大に文學を興復せり、

古寫本三本云々　【增】古寫本三本は、いかなるものか未た知らず、但、本文の傍に一本としてあげられたるは是なるべし、聞書、見聞抄等のことは下文に委し、

桑門明靜　【增】桑門は、出家の總名、明靜は、藤原定家卿出家されどいさゝかたがへる所見ゆるをば、みなもらさずかたへにあげつ。さてこの日記は、いま文化年間につたへ來て八百餘年をへたれば、誤字脫文衍字すくなからざるべし。中にも妙壽院本外の古寫本などは、いま本文の古寫本なりしを、眞名になほし、そを又よみひがめてど、おほくは眞名に直してかけりと見ゆ。かたのごとく中古の人のさかしらに、もとは假名なりしを、眞名にあらためなどせしたび〳〵に、原假名にうつし、またそのまゝ眞名にうつし事などかはなからん。たゞいとふべきは後人の本の意をうしなひし事などかはなからん。たゞいとふべきは後人のさかしらにこそ。

京極黃門本奧書云。文曆二年乙未五月十三日、乙巳老病中、雖眼如盲、不慮之外見紀氏自筆本。遵華院寶藏本、料紙白紙。不折無堺高一尺一寸三分、計廣一尺七寸二分計紙也。廿六枚、無軸、表紙縹紙白紙一枚。端聊折返不立竹無軸、有外題土佐日記。貫之筆其書樣和歌非列行、定行書之。聊有闕字。歌下無闕字。而書後詞、不堪感興。自書寫之。昨今二日終功。

桑門明靜

後の名なり、

故將軍　[増]足利義照公の、ことなり、

小河幕府　[増]足利義政公の居られし小河の邸なり、

亞槐藤原　[増]大納言にて藤原氏の人なれど、其の名未だ考へず、

紀氏延長八年任二土佐守一。在國、載五年六年之由。承平四甲午歳五乙未歳歴二三百一年一。紙不レ朽損。其字又鮮明也。不レ讀得一所々多。只任レ本書也。有二朱印一、妙壽院本奥書云。土佐日記以二貫之自筆本一、故將軍書物、希世之重寶也、今度密々自二小河幕府一借二出之一遂一一覽一、依二或人數奇深切一書レ之。古代之假字、猶二蝌蚪一未レ憲臨寫有二魚魯一乎。後見輩察レ之而已。明應壬子仲秋候、　亞槐藤原

諸抄論

土佐日記聞書は、著者の名をしらず。されどおしはかりに、元和寛永のころの人のわざとおぼし。こはなべて世に見ゆるものにもあらず。きゝもおよばざりしかど、ちかきころ一本を得て見るに、いとまたしき説どもすくなからねど、またすてがたきもあるべし。この書は世にもしられざるものから、この日記の注釋のはじめとこそはいはめ。

土佐日記見聞抄は、小野山隱士槃柴記とのみありて、そのとし月をのせず。みな片假名にて注せり。これもまだしき説のみおほかれど、さすがに又すてがたきをばみなとれり。この書はたえて見ぬものなれど、屋代弘賢のぬしの藏本をかり得て、今注釋のたすけとすることを得たり。

土佐日記附注は、人見卜幽の注釋にして、季吟法印の抄にもまさりたる事あれば、季吟法印の抄は、ひそかにこの書をとりたるものゝやうにいへる人もあれど、そはくはしくも見ざるうへのことにて、またくべちのものなることまるし。そは下にいふを見てまるべし。またこの書の跋にも、抄の跋にもひとしく万治四年とあれど、そのころは今のごと、この道もひらけざりし世なりしかば、こゝとかしこととおなじもの丶一時にいでくるをも、かたみにまらざりしこともあるまじくもあらねば、うたがふにたらず。この書すべて書法假名などのかきざま、いとみだりがはしく、もと假名もてかけりと見ゆるを、眞名にあらためゝ、あるは眞名を假名になほせりとおぼしくて、こゝろえがたくいぶかしきところ〳〵もまじれゝど、すべての本文は、おほかたは爲家卿の本にたがふところすくなし。

屋代弘賢　[増]一名陸、文太郎と稱し、輪池と號す、塙保己一の門人にして考證學に長し、著書甚多し、古今要覽の如きは、一部千卷あり、

土佐日記附注　[増]二卷あり、

人見卜幽　[増]人見卜幽軒のことなり、本姓小野氏、名は壹、字は道生、卜幽軒と號し、林塘庵と稱す、水戸家に仕へて侍講たりし人なり、

土佐日記抄は、北村季吟法印の注釋にして、なべて世に土佐日記としいへば、まづこの抄を見ることゝはなりぬ。さて本居宣長云、そも〳〵この日記の注は、たゞ季吟の抄のみ世にはあまりてひろまりて、附注といふものあることをばしれる人いと〳〵まれなり。今この二つをあはせ見るに、季吟の抄にいへることゞもから書をひきたることなど、その外もはらこの附注とことなる事なきは、ひそかに附注をとりてかけるものとこそおぼゆれ。といはれしは、よくも見ざるひがことなりけり。そはこゝにあげたる證を見ても思ふべし。正月七日の條、青馬の事をいへる所に、附注には、延喜式をひきたるを、抄には、公事根源をのみひけり。同日はらつゞみをうちてといふ所に、附注には、莊子をそのまゝひきたるを、抄には、おなじ莊子はひきたれどひける所の文いたく本書にたがへるは、あらぬ書よりとりてひきたるなるべし。同十四日、海神の事をいへる條に、附注には、淮南子、文選、書紀などをひけるを、抄には、太平記をのみひけり。同廿日、日をのぞめば都

北村季吟　【増】略傳は上文にいへり、

本居宣長　【増】通稱は舜庵、鈴の屋と號す、伊勢松坂の人なり、眞淵翁に就て古學を修め、自ら一家をなす、世て紀伊家に仕へ、大に本邦の學を唱ふ、國學の隆盛に至りしは實に此翁の力なり、

延喜式　【増】五十卷あり、左大臣藤原時平等撰す、

公事根源　【増】一卷あり、一條關白兼良公の著なり、

莊子　【増】十卷あり、晉人莊周の著なり、

淮南子　【増】二十一卷あり、淮南王安の著なり故に淮南子といふ、

文選　【増】六十卷あり、梁昭明太子の撰なり、

書紀　【増】日本書紀のことなり、三十卷あり、舍人親王等勅を奉して撰す、

太平記　【増】四十一卷あり、作者詳ならず、

晉書　【増】三十卷あり、唐太宗の撰なり、

幼童傳　【増】此の書未だ考へず、

土佐日記首書　【増】二卷あり、寶永四年五月刊行する所といふ、

土佐日記注　【増】寫本一卷あり、

契沖阿闍梨　【増】名は空心、契沖は號なり、俗姓下川氏、攝津尼が崎の人なり、出家して攝津今里妙法寺に住し、晩年退隱して東高津の圓珠庵に住みて、心を國學に潛め、古語を推考し、著述多し、阿闍梨は沙門の總稱なり、

縣居翁　【増】加茂眞淵のことなり、遠州濱松の人、始め徂徠の門に遊び、漢學を修め、後眷湖の門に入りて國學を研究す、東都に門戸を張り、專ら書を著し、益々有志の徒を教授す、門人數

とほしといふ條に、附注には、晉書をひきたるを、抄には、幼童傳とのみひけり。まこと季吟法印のひそかに附注をとれりなどならば、附注よりまされることはありぬべし。附注におよばざることはあるべからず。さるを上にあげたるごと、抄のかたは、附注よりも、書籍などの引おくれおほかるは、季吟法印の附注をとらざる證といふべし。

土佐日記首書は、著者の名をもあらず。もはら抄とたがふことなし。されどいさゝかたがふ所も見ゆれど。あるすまでのことにもあらず。

土佐日記注は、契沖阿闍梨と縣居翁との説なり。そを藤原宇万伎があるせる本に、上田秋成が序文をくはへ、みづからの説をもくはへたる本あり。秋成が説もよしと思はるゝをばみなあげたり。

百名に及べりといふ、
藤原宇万伎　【增】靜舍と號し、加藤大助と稱す、東都の人なり、加茂翁の門人なり、
上田秋成　【增】鵜乃屋と號す、通稱を餘曾といへり、大阪の人なり、加茂翁の門人なり、
土佐日記打聞　【增】一卷あり、寫本なり、
楫取魚彦　【增】稻生若狹右衛門と稱す、下總の人なり、加茂翁の門人にして傍ら國を治くす、

古今集目錄　【增】二卷あり、藤原仲實の著なり、
歌仙傳　【增】一卷あり、肥前守盛房の撰なり、
作者部類　【增】寫本三卷あり、和歌色葉集　【增】九卷あり題昭の撰なり、
羅山先生文集　【增】百五十五卷あり、男春齋が德撰す、羅山、姓は林、名は信勝、後剃髮して道春といふ、羅山はその號なり、幕府に召され、法律政治數百の諮問に盡力せしこと少なからず、その著書頗る多し、
大日本史　【增】二百四十六卷あり源光圀卿の撰なり、

土佐日記打聞、これも縣居翁の說を、楫取魚彦がみづからの說をもくはへ、抄の說をもよしと思ふ所はくはへてまるせるなり。宇万伎がまるせると、おなじことなれど、かたみにたがへる所もあり。さて按ずるに、魚彦がしるせるは、縣居翁のはやくの說、宇万伎がまるせるは、後の說なるべし、されど宇万伎がまるせるよりはことくはし。この說をももらさずあげたり。

本傳

貫之のぬしの傳は、古今集目錄、歌仙傳、作者部類、和歌色葉集、羅山先生文集、大日本史等に出たり。されどこれにいでたることはかれにもれ、かれにのせたることはこれにはぶきなどして、いづれをひきてもことたらざれは、たゞふるきにもとづきて、古今集目錄によれり。

古今集目錄云。紀貫之延喜六年二月任二越前權小掾一。御書所預、同廿七年二月廿七日任二內記一。同十年二月任二少內記一。同十三年四月任二大內記一。同十七年正月七日叙二從五位下一。同月任二加賀介一。同十八年二月任二土佐守一。天慶三年三月任二大監物一。同七年九月任二右京亮一。同八年正月任二三月任二玄蕃頭一。同六年正月七日叙二從五位上一。同九年卒。

紀氏系圖云——孝元帝——彦太忍信命

- 屋主忍雄命——武雄心命——武內宿禰 景行帝三年於紀伊國生、仁德五十五年薨
  - 木菟宿禰 仁德同日生
    - 眞鳥宿禰——玆籙臣——
      - 眞咋臣——
        - 大口臣——
          - 諸人——
            - 船守 正三位大納言式部卿 延曆十一四二薨六十二
              - 本道 筑前守
                - 時文 從五位上 內藏介
                - 女子 內侍
            - 麻呂 大納言 中務卿
              - 梶長 正三位中納言 大同元十三薨五十三
                - 望之——
                - 貫之——
            - 猿取 從五位上
              - 興道 下野守從四位上
        - 小足臣——鹽手臣 推古舒明仕
          - 大人 大納言 天智十五六三薨
            - 園益 從五位下

屋主忍雄命　屋主忍雄命、武雄心命として、二人とせるは誤なり、こは景行紀を考ふるに、屋主忍男武雄心命として一人とせり、又古事記には、武內宿禰を比古布都押之信命の子とせりこの系圖のごとくにては、古事記にもあはず、書紀にもかなはず、かたく誤なるべし、

大日本史巻二百廿云。按古今集序註。作文藝子。未知孰是云々。古今集目錄にも、貫之のぬしの父祖をのせず。歌仙傳にも、先祖未詳とあるによりて思へば、ふるくより紀氏の父祖は、つまびらかならずとおぼし。さるを紀氏系圖に、ことつまびらかにのせたるはよしとかせん。あしとかせん。さだめがたし。

いまかく按正せるこの日記は、わがちゝの世にいませしほどに按合したまひしなりけり。さるをわがちゝは、このとゝせあまりさきにみまかりたまひぬ。そのころおのれまだいとわかゝりしかば、さまでもの、こゝろもおらざりしかど、ちゝのつねにのたまへりしは、おのれゆづるよ、ひとのごともなりなば、わが按合しおきつるふみどもを、ゆめなちらせそ。またわがとしごろあつめたる書どもをも、おみといふむしになところ得させそ。またものにあそばんとおもはゞ、わがおをりしたるふみのはやしのあとをもとめて、かならずこの道にあそべなど。のたまひしをおもひいでゝ、またさらに別本などあつめて、

文化七とせといふとしのはづきばかりより筆をとりて、今すでに按正しかきをはりぬ。されど七とせを、このふみにのみなづみてすぐしゝにもあらず。ことぶみどもをも見るついでごとに、いさゝかおもひよりたるまだしき説をもおるしおけるを。伊塲至清、山本明清などゝともに按正しかきつらねたれば、ひとつのふみめきたるものとはなりぬ。もとよりものゝいとまにのみおつるわざにしあれば、かならずひきもらせることどもおほかりぬべけれど、猶のちにもおるさんとて、筆をおきぬるは、文化十二年十一月七日。

岸本由豆流

すぐしゝ　［補］弘庵云、原本しの一字を脱す、今一本によりて補ひつ、

訂正 増補 土佐日記考證 上

岸本由豆流考證
鈴木弘恭訂正增補
吉野弘隆校補

をとこもすといふ　[正]一本、をとこのと有、一本、井抄の一本、すなるといれど、今定本、井抄、黒本によりて改めつ、

日記　玉充論衡、效力篇云、能上二青日記一者文儒也、　老學庵筆記卷三云、黄魯直有二日記一、謂二之家乘一、至二宜州一猶不レ輟レ書、宇津保物語藏開上云、さしかげかへりまうできつるまでつくれることども、その人の日記などなんどのなかに侍りし、　源氏物語繪合云、かのたびの御日記のはこをもさりいでさせたまひて云云、　辨内侍日記云、日記の御双子三帖、大内渡のころ中納言のすけ殿にあづけさせたまひしを、　呂保殿歌合詞云、日記は女すらもすべきわざならんよ云云、　季吟云、男文字にてする日記を女文字にてかくその心なりといふ既あれどひがことなるべし云云、今按にこの既、をとこもすなるとあるもの字になづみたる既なり、　源氏梅が枝に、女手とある注釋に、宣長云、女手とは漢文にむかへて、歌物語などをかくをいふ、土佐日記のはじめに、男もすといふ日記といふものを、女もして見んとてといへるこゝろばへなり、　○それのとし　錦織刺云、それのとしとは、さだかにもさゝでわざとおぼめかして、いふことばのみなり、[正]詳本、一日のと有れど取らず、　眞淵云、ひと日といひてきこゆるを、又日とかされていふは、廿一日といひて、その日のいぬの時といふ意なり、　○一日の日の　○いさゝか　[正]扶本、抄、別本いさゝかにと有れど取らず、

ある人、あがたの、縣　四とせはてゝ、れいのことどもみな志をへて、解由などゝりて、すむたち館よりいでゝ、舟にのるべき所へわたる。

今集のはしことばに、文屋康秀が雲河邊になりて、あがたみにはえいでたゝトやさいひやれりけろ、土佐日記に、ある人あかたのよさせいつさせはてゝなどあるも、縣さは其任國をさしていへるこ、志かるをたゞ田舎をいふとのみ心得きつるは非なり、

四させ五させ云云　續日本紀卷廿一云、天平寶字二年冬十月甲子勅云、頃年國司交替、皆以二四年一爲レ限、斯則適足レ勞レ民、未レ可二以化一、自今以後宜以二六歳一爲レ限、　三代實錄卷卅八云、元慶四年冬十月七日丁亥制、貢調九年十一月格曰、勘解由使起請偁、去承和九年八月二十三日下二諸國一符偁、凡國司交替、官符到後百二十日內付了歸京若逕此停留灼然合レ解、又雖二交替訖一未レ得二解由一還任之人不レ得レ居レ官、無職之徒不レ許二直宿一、今諸國所レ進、不レ與二前司解由之狀一依レ違不レ受、返却、而或國依レ進之、理亦不レ疑、因レ茲前司未レ免二抑屈之歎一、後司徒漸四年之秩云云　類聚三代格卷五云、承平二年七月三日太政官符、諸國守介四年爲レ限事、右檢二選叙令一、初位以上長上官遷代皆以二六考一爲レ限、慶雲二年二月十六日改定三四年一、大同二年十月十九日更擬二令文一、弘仁六年七月十七日復二慶雲古格一、天長元年八月廿日今三介以上別處二六年之秩一、夫吏者民之所レ師、民者吏之所レ本、頃年莫レ吏之風希聞、窮民之憂不レ息、臣等以爲善人三年尚可レ勝、況四四九歳雖二復致一功、然則治之能否、非二三年遠近一、代之清濁、實將二不貳一、伏望國司之歴、因二循慶雲一、用二四年一云云　菅家文草卷五云、一秩四年、當時之守國人のごとし、當任は四年なり、よき國司をば重任とてかされて四年をたぶ、又延任とて任をのべらるゝ事もあり、　日本紀略云、弘仁六年七月甲午諸國司還管以二四年一爲レ限、　續古今離別、紀貫之送濱のすけにてまかりけろ時、わかれをしみてよめる、みつれ、一日だに見れば戀しき君がいなばさしの四させないかさすぐさん、　續日本紀卷十一云、天平五年四月辛丑制、諸國司等相代向レ京、或經二人未レ到以前上道一、或雖二交替訖一不レ付二解由一、因延喜式太政官式、政事要略卷五十六などにくはしくみえたり、　眞淵云、解由は國司年々の年貢などをうけとりわたせる計帳を勘解由使におくるに勘解由の判官主典勘定して目錄をつくりて勘解由の長官次官に申せば長官次官直に發閲せしむる事さやう、この勘解由使の解由狀をとりてさいふ事なるべし、

○舟へのろべき所へ云々　[正]抄、別本のろへき所にと有、かれこれ、一本これかれと有、しろしらず、定本、群本、抄しろしらめと有るによる、ぐしつる、附本、かれこれ、志るも志らぬ、おくりす。年ごろよくぐしつる人々なん、わかれがたく思ひて、其日志きりに、とかくしつゝのゝ志るうちに、夜ふけぬ。

●ある九さは、まへにそれのさしなどいへるがごとく、わさとみづからを、おほめかしていへるなり、●あがたは、眞淵の說に、なほくはしくは、古事記傳に見えたれば、たゞあらましを標注にあげたるのみ、●四させ五させはてゝ云々、志かいへり、これ任國の間のことをいふ、任限のことは、世々にたがへれど、このごろは四年さだめられねば、されば國にくだりて、五年めには京にのぼれるなり、その證は標注を見るべし、●れいの事さも云々、こは明書云、例の事どもとは、前官の人、後任の人へ國務をわたすとき、官稅公事いろ〳〵のことゝもを、みなゝしをへてさなり、●解由の事は、見明抄云、解由とるなり、こゝにては、算勘さることほりなしさの證文を後任の人より、貰之うけとるなり、今俗間に、手形なさいふ類のごとし云々、見明抄云、よくぐしつる人々とは、志るまうすおくりするを中に、さしごろ具し使へたるは、われかたくして、はやくかへらぬさまなり、●其日志きりに云々、原本に、其の字、一字を脫して、日志きりにさせり、今は妙齋院本、群書類從本によりておぎなふ、

廿二日、和泉の國までたひらかにと、ねがひたつ。藤原言實舟路なれど、馬のはなむけす。かみなかしもろひすぎて、いとあやしく、志をうみのほとりにて、あざれあへり。

●たひらかにと云々、原本に、さたひらかにと有、よりてあらたむ、さて和泉の國は、國内にて都もちかく、志かも土佐よりの、さしいりなれば、まつそこまで海路たひらかにさ有、藤原言實は、定家本、爲家本などに、藤原さきさねと、假字にてかけり、父祖まろべからず、土佐の國人なるべし、●藤原言實云々、こは醍醐天皇の御時の人なり、●うまのはなむけのことは、標注を見るべし、●ろひすぎて云々、こは提要にあげたるがごとく、例のことをうらうへにいへるなり、あざれは、人のたはふるゝに、額なかれたり、亦は標注にくはし、さて原本あざれあへるさすれど、誤なることしるければ、今は妙齋院本、爲家卿本、扶桑拾葉本、群書類從本などによりてあらたむ、

しらへ、扶本みえと有、八々、一本人どもと有、わかれ、定本、わかたれと有れど、並に取らず、○其日　[正]抄、別本さたひらかにさ有、藤原言實、別本、藤原さきさねと有、馬のはなむけ　新撰字鏡云、餞（馬乃波奈牟介）古今離別端詞云、さだときのみこの家にて、藤原のきよふるあふみのすけにまかりける時に、うまのはなむけしけるよめる云云、眞淵云、うまのはなむけは、ものへゆくわかれにうまのはなをかなたへむけて、つゝがもなくてなどいふをもさにて、後にはそのうまのはなむけの料に、酒のませなどすろをいへり、さて馬は陸にあるゆゑに、こゝは舟路なれどいたはふれいへるなり、

かみなかしも　[正]抄、かみしもなか、扶本かみなかしもながらと有、ろひすぎて、定本、爲本ろひあきてと有れど取らず、○あざれ　青組仁德紀云、有二海人一獻二鮮魚之菟道宮一也、太子令二海人一曰、我非二天皇一乃返レ之令レ進二雉鮨鴈等一、亦返以令レ獻二菟道一、於レ是海人之菟耳愁於往還一、和名抄醬介部云、鮨、野王按經（和語云、阿佐留）魚肉爛也、字鏡集云、鮨（アザル）　源氏花宴云、みな人はうへのきぬなるにあざれたるおほきみすがたのなまめきたるにて云云、眞淵云、あざれのざれは洒脫の音なり、あはあまへろを略していふか、源氏にあざれたるおほきみすがたなどいふにて思へ、季吟の左禮の字也といふ說は誤れり、　春海翁云、あざれは肉のあざれたるなどいふと同じことばにて、人のうへにいふは、みだれたるさまをいふなるべし、こゝにしほうみのほとりにてこゝさらにかけるは、潮のあるうみべにても、人はあざれあへりさたはふれかけろなり也、そは魚の肉は鹽を加ふればあざれぬものなれば也、　[正]抄、別本あざれあへろと有れど取らず、

廿三日、山の康敎といふ人あり。この人國にかならずしも、いでつかはるゝ人にもあらざりき。これぞ、たゝはしきやうにて、馬のはなむけしたる。守がらにやあらん、國人の心のつねとして、今はとて見えざなるを、心あるものは、はぢず、きなんきける。これはものによ

本、抄本、定本、八木と有、又あり附本ありてとあり、いでつかはるゝ云々　万葉十六、楷槻照來酒屋爾眞奴眞留奴和之、佐須比立準而來奈麻之乎、眞奴眞留奴和之、同十九長歌、荒風流爾阿波世受、平久幸而可散理麻世、毛等能國家爾、〔官〕徒に、註にいでではぬての假字の誤と見たるより、かく万葉をも引たるなるべけれど僻言と、いでは出にて出仕の意と、〔正〕原本抄、共にいひつかふものにもあらずとあり、今附本、黒本による、あらざりき詳本あらざなり定本、抄あらずなりとあり、たゝはしき　〔正〕原本、抄たゞしき附本それにたゝかはしきとあり、今扶本、詳本、黒本による、

國人　釋日本紀卷十六云、土俗古點クニヒト爲レ避二後嵯峨院御諱一可レ讀二ヒトノ一也、眞淵云、御諱をさくる事は、今上と太上天皇との二代のみと、檜紀に見ゆ、代々の御諱をさくる事にあらず、又他の國のさだめには、始祖と五世の先の諱までをさけて、その外はさけざるこ、そのさだめすら皇朝にては用ひられず事なし、釋日本紀卷三十八云、延暦四年五月丁酉詔曰、臣子之諱、於レ是改二姓白髪部一爲二眞髪部一山部爲山、類家國史卷廿八云、大同四年九月乙巳、改二伊豫國神野郡一爲二新居郡一以レ觸二上諱一云々、釋日本紀の作者、卜部兼方、天長十年七月癸巳、天下諸國人民、姓名及郡郷山川等、號有觸レ諱者、皆令二改易一云々、後嵯峨院、後深草院の御時の人なりしかば、はゞかれるなり、その今の世までの例とは、まがたかるべし、まかも、のほかあまた見えたれど、所せければこゝに略せり、　○今はさて　〔正〕定本、抄、別本により、見えずとあり、又云凡延暦寺三綱一任之後任二諸國講讀師一其上きなん一本、抄なんとあり、きける、〔正〕定本、抄、別本わたりけるとあり、附本わたりけるとあり、今改めつ、の品の名をさしていはず、ひろくいふ時のことばこ、　○申しゝ　〔補〕弘庵云、爭玲註申せしとあれど、こは佐行四段活なれば、申しゝといふべき格にて、ほむるにしもあらず。

●山の廣敎云、山といふ氏は、姓氏錄に、山公山直山首などみえたり、こゝなるは、いづれの末ならん、父祖もしるべからず、定家卿本、俗家卿本などに、八木とあり、これも姓氏錄にみえたり、●いひつかふものにもあらずと云云、こは俗家卿本、附注本などに、いてつかはるゝひとにもあらざりきと、あるをよしとす、この本のごとくにては、饒つまびらかならず、いては、ねての假字のたがへるにて、率てゆくなといふ、ねてとおなじ詞なり、●かみがらに、やあらん云云、こは紀氏みづから、謙退のことばなり、そは國司のあしきゆゑにやあらん、今任限はてゝ京にのぼる時は、なべての人は酒情なれば、今はとてうまのはなむけにも、見えざるを心ある人は、さる酒情なる事をはぢて、さふらひきたるよとの意なり、●はらすきなんきける云云、こはかならず誤字あるべし、このまゝにては、盃きこえがたし、ある既に、耻過と見たる既あり、又身のいやしきを耻ずと見たる既もあれど、いづれもおだやかならず、異本にはちてきなんきけるとあるにて、ここあきらかなれど、たゞ一本によりてあらたむべくもあられば、さておきつ、猶考ふべし、●同人の心のつれづれとして云云、季吟法印の既に、國人はくにたみとよむべし、後嵯峨院の御諱を、國仁と申しより、儒者にてもくにたみとよみ侍りとあれど、文字のまゝにくにひとゝよむべきなり、尤釋日本紀に、後嵯峨院、後深草院の御時の人なりしかば、はゞかれるなり、その今の世までの例とは、まがたかるべし、まかも、後嵯峨院、後深草院の御諱をはゞかりて、文字をかへたるなどは、標注に證をあげたるがごとくなれど、文字をかへたるなどは、まいにて、朋をかへたる事をきかず、又漢土にも、そのごとく文字の畫をはぶき、あるは文字をかへたるなどはあれど、文字の音のみをかへたる事をきかず、猶この事標注を見てまろべし、●これはものによりてほむるにしもあらず云々、こはおくりものゝよきにによりて、その人をさへほむるにはあらず、またく厚情をほむるさの意なり、

講師　延喜玄蕃式云、凡諸國講師擇二年廿五已上讀師四十已上者二補之、　又云凡延暦寺三綱一任之後任二諸國講讀師一其上座寺主任二講師一、都維那任二讀師一、　政事要略卷五十五云延暦十四年八月十三日符�segment、布大臣宣奉勅如レ聞諸國師任限六年、雖預二他事煩一以二解由一、自今以後宜改二國師一曰二講師一每國置二一人一、

廿四日、講師うまのはなむけしにいでませり。ありとある、かみ（上）もわらはまで、（醉）ゑひしれて、一文字（ヒトモジ）をだにまらぬものしが、あし（足）は、十文字（トモジ）にふみもてきたれり。よばれていたりて、

字にふみてぞ、あそぶ。

眞淵云、いにしへは、國々に國分寺ありて、其住職を講師といひて、其國の僧尼の司なり、これは土佐の國分寺の講師なり、●ゑひしれては、醉ていふかひなくなりて、といふ意にて、ゑひしれと同じ詞なり、間書云、醉れては、醉人はおろかなるものなれば、かくいふなり、杜預が左傳の註にいふ、白痴の字の心なるべし云々、かたく標注を見てまろべし、●ものしがの、し文字は、らの誤りにて、ものらが歟、眞淵はすでにものらがさして、注をばくだされぬ、されど諸本みな、ものしがとあれば、今あらたむべくもあられば、さておきつ、又考ふるに、けふしまれ、けふしこそなどいふ、し文字と同じくて、助字にもやあらん、助字のし文字の下は、かならず、ばさうくるやうにいへる既あれど、かならずさにもかぎらざるべし、そは標注の考證を見てまろべし、●一文字をだにしらぬものしが、あしは、十文字にふみてぞ、あそぶ云々、こは例のたはふれかけるにて、醉れてあしもさだまらずまどろなるをいふなり、今いふ千鳥あしなどいふにおなじ、

館　和名抄居處部云、館、唐韻云、館官反作館、和名多知、釋日本紀卷十三云、高根館、（私記曰案假名日本紀作二高麗樹一乃多知一）きたれり云云　〔正〕定本、抄きたりと有、いたりて、爲本いきてと有、とかく、附本、うさかうらすと有、

なほ守の館にて云々　〔正〕爲本、別本、館にあるにと有、定本、館にてあるにとあれど取らず、あるト　書紀神代紀云、雖假二國百机一以坐二主人之禮一云々、後撰夏端詞云、少將はかれがたにて侍らざりければたちやすらひてあるトいたせなどたはふれけ

廿五日、守のたち（館）より、よびにふみ（文）もてきたれり。よばれていたりて、

日ひと日、夜ひと夜、とかくあそぶやうにて、明にけり。

守のたちは、新任の土佐守の館をいふ、さてそこより、紀氏をよびにおこせしなり、

廿六日、なほ守の館にて、あるじ（聖）のゝしりて、をのこら（男等）までに、ものかづけたり。からうた（詩）こゝをあげて、いひけり。やまと歌、あるじ（主人）も、まらうども、こと人も、いひあへりけり。

今日もなほ、昨日のごとく、今の土佐守の館にありさなり、●あるトは、聖にて、もてなし饗應するをいふ、をのこまでに、ものかづけたりさいふにて、みづからはもさより、從者までさいへるなり、●詩を聖にあげて誦し、歌詩をは

れは云々、伊勢物語云、左中弁藤原まさちかといふをなんまらうどざねにてその日はあるじまうけしたりける云云、時鳥日記云、かへさはしのふれどこゝかしこあるじまうけ云云、〔正〕一本あるじまうけの字なし、今原本による、

なのこと云々　〔正〕爲本、附本、定本、別本、黒本、證本なのこらまでにさあるによりて、改めつ、ものかづけ　大和物語云、大將にものかづけ忠岑もろくたまはりなどしけり云云、季吟云、髭頭かづけものと瑤琴行によめり、きぬなどかづけあたふる事ぞ、眞淵云、かづけるは衣裳をもらへば、かならずうちかづきて、頭をする故に、人にさらすをば、かづけ物とはいへり、

からうた云々　古今序云、そもゝ〳〵歌のさまむつなり、からのうたにもかくぞあるべき、季吟云、あるじをさきにいひてまらうどを次にかけるは、紀氏の自記なればにや又當官をたつとふ心ばへにや侍らん、

に越かゝすと有、別本、抄にはこれにえかゝずとあれど取らず、按するにこの頃よりの事なるべし、古今著上、よみ人しらず、ふるたへのなみちわけてや春はくるかせふくまゝに花もさきけり　古今序云、月を思ふとて云々　○さかしきも　古事記に佐加志賢どもゝき賢をさかしおろかなりとまろしめしけん云云、

もいまのもとあるによる、いでにけり群本、黒本いでいりにけりとあるによりて、改めつ、

人々もよみしさなり、◎からうたは詩をいひ、やまと歌といへるなり、さてあるじには、新任の土佐守、まらうどには、紀氏みづからをいへり、

からうたは、これにはかゝずやまと歌、あるじの守のよめりける。

都いでゝ君にあはんとこしものをこしかひもなくわかれぬるかな」となん有ければ、かへる前の守のよめりける。

ふるたへの涙をとほくゆきかひてわれにしにべきはたれならなくに」こと人々のもありけれど、さかしきもなかるべし。とかくいひて、前の守も、今のも、もろともにおりて、さきのも、いまのも、手とりかはして、ゐひごとに、心よげなることゝして、いでいりにけり。

◎都いでゝ云々、この歌は、新任の土佐守のよめるなり、こゝろは、都をいでゝより、君にあはんと思ひて、こゝまでくるしくすみやかにわかるゝことよとなり、◎かへる前の守のよめる云々、こは紀氏みづからの事なれど、この日記すべて、女に話してかゝれつれば、わざとかくよそ人のやうにいへるなり、◎ふるたへの云々、この歌、紀氏のうたなり、萬葉に、往反をいきかひとよめり、こゝろは、かくのごとく遠き海路をゆきかへりて、からきめにあへる人は、外にもあらじと思ひしを、又われに似て、君にもからき波路をへてはしけりとなり、◎さかしは、古事記、書紀などに、賢の字をよめれど、その意にあらず、こゝはたゞ歌のよきをいふべし、◎もろともにおりて云々、眞淵云、ゐひごとは、酔言なりごとに云々、眞淵云、ゐひごとは、酔言なり、かゞでのことはぎなどいひかはすをいふなるべし、

○これにはかゝず　〔正〕定本、群本これにえかゝずとあるによる、　○ふるたへの涙　ふるたへの涙もてゆへるあはぢしまの花もさきけり、　○さかしきも　古事記に佐加志賢どもゝき賢をさかしおろかなりとまろしめしけん云云、　○今のあるじも云々　〔正〕爲本、附本、黒本、證本、さきのもいまのもとあるによる、いでにけり群本、黒本いでいりにけりとあるによりて、改めつ、

大津云々　和名抄第九云、土佐國長岡郡大角（於保都）　眞淵云、浦戸は大海と入海とをへだてゝさし出たる所之、大津より南へ二里ばかり之、古府より三里餘なり、今の府よりも三里ばかり之、そこをさしてとまづいひて、さて大津よりそのつゞきの鹿子の崎の事あり、いでたちいそぎは、旅だちの設なり、

そぎをみれどさいふは女のさまこゝのみそさいふはかへるよろこびの中に、この事のかなしみあるをいふなり、

かくあるうちに云々　〔正〕定本、するとあり、うまれたりし定本、うまれましとあり、こゝにして定本、附本くにゝしてとあり、扶本、別本、抄くにゝてとあり、えいはず定本、群本、別本、抄いはずと有、いはれずと有非にさらず、

女子のなきのみぞ　宇治拾遺第十二云、いまはむかし貫之が土佐守になりてくだりて有けるほどに、任はてゝのさし七八ばかりの子のえもいはずかなしけなるを、かぎりなくかなしうおもひてうせにければ、なきまどひやまひつくればかくてあるべきことかは、のぼりなんと思ふにちごのこゝにてなにさありしはやなどおもひ出られて、いみじうかなしかりければ、はしらにかきつけゝる、みやこへと思ふものゝ云云、眞淵云、宇治拾遺に、つちゆきのうたさせるは、後にきゝつたへてかきしならん、今はみつからのうたさせず、またすきのみぞ、かなしみこふる。あるひだに、ある人々もえたゝ（立）ずいでたちいそぎを見れど、なにごともえいはず。京へかへるに、女子のなくうまれたりし女子、こゝにして、俄にうせにしかば、このごろのいで（出）

廿七日、大津より、浦戸をさしてこぎいづ。かくあるうちに、京にて

人のかきていだせるうた。

宇治拾遺第十二

みやこへと思ふものゝかなしきはかへらぬ人のあればなりけり」

◎大津、浦戸、みな土佐國の地名なり、◎こゝにして俄にうせにしかば云々、こは土佐國にてうせたるなり、こゝの泊にて、うせたるにはあらず、定家朝本、扶桑拾葉本、附注本などに、くにゝしてとあるところおなじ、見聞抄にこゝにしてとは、この國にてうせたるにて、京へのぼりぎはの事にはなかるべし、いかなれば京へのぼるによりて、京より同道の女子を、思ひいづるよしなり、舊旅だちの用意などするをいふ、物語ぶみに、いみじうかなしかりければ、はしらにかきつけゝる、みやこへと思ふものゝ云々、こは父母のみならず、ほかの人までも、かなしみにたへざるなり、◎みやこへと思ふものゝ云々、この歌は

へてみづからのをも、人のさまにかけるもおほければいづれにてもありなん、か、

あるものさ　眞淵云、あるものさ云云、この歌万葉四に夢之相者苦有家里兄而摩探友手二毛不レ所レ聞者とあるに似たる意なり、いづらはいづこにをぞさいふがごとし、源氏桐壺云、むなしき御からを見るく〳〵猶おはするものさ思ふが、いとかひなければ云々、

いづらさふぞ云云　[正]定本、爲本、別本、抄、黒本、證本による、さふぞ、群本こふぞと有、

鹿子崎　眞淵云、鹿子崎は、大津さならびて有、鹿子水門さはことなり、

いふ所にいたるに云云　[正]附本、黒本、證本によりていたるにの四字を加へつゝ、酒など、定本、抄などいへり、わかれがたき爲本さけのみるひてわかれかたきさあれど井に取らず、くる、群本、黒本きたるさあるによる、

心あるやうには　眞淵云、心あるやうにさは歌よむ心あるをいふべし、ほのめくはそのけしきみえてほこりかなる意ぞ、雅澄云、歌よむ心あるをいふにはあらず、心さしあるやうにいひなすなり、[正]やうには

また、あるときには。

あるものとわすれつゝなほなき人をいづらととふぞかなしかりける」といひけるあひだに、鹿児の崎といふ所にいたるに、守のはらから、またこと人これかれ、酒などもておひきて、磯におりゐて、おかれがたきことをいふ。守のたちの人々の中に、このきたる人々ぞ、心あるやうには、いはれほのめくかくわかれがたくいひて、かの人々のくちあみも、もろもちにて、このうみべにて、になひいだせるうた。

をしど思ふ人やとまると葦鴨のうちむれてこそわれは來にけれ」といひてありければ、いとといたくめでゝ、ゆく人のよめりける。

さをさせどそこひもしられぬわだつみのふかき心を君に見るかな」

といふあひだに、かぢとり、ものゝあはれもしらで、おのれし、酒をくらひつれば、はやくいなんとて、ほこみちぬ。風もふきぬべし、とさわげば、舟にのりなんとす。

○思ふも　[正]爲本、思ふに、妙本思ふなと有れと取らず、

あるものさ云々、旧書云、この歌のこゝろは、なき人をなくなりたりさ、いふここをさへも、なげきのあまりに、うちわすれて、ともすればいづくにあるぞと、あるおもむきなり、有無をさへ、わするゝ計りなげきに、ほづみたるこさ、もつさもあはれなり、●鹿児の崎は、前後のつゞきもて考ふるに、土佐の國のうちなることあきらけし、さるを閉注に、書紀應神紀の、鹿子水門さあるをひきたるは、甚しき誤りなり、又名所に、鹿この島、かこの渡、かこの川などあれど、いづれも當國にあらず、●守のはらからは、新任土佐守の兄弟なり、●人々の口あみも、もろもちにて、この海べにて、になひ出せる歌云々、こは例のたはふれかけるにて、人々の口かるく、さくもえいでず、口おもきを、くちあみのおもきにたさへていへり、さてくちあみの事、既々あり、て定めがたし、標注にあげたる諸説を見て、心のひかんかたにまたかふべし、予心みに考ふるに、くちあみは、魚の名の鯢なさる網なるに、人々の口を鯢網にたさへていへるなるべし、鯢は今いふいしもちの類なり、そはくはしくは標注にあげたり、もろもちはもろさもにもちあふをいへり、鯢網を、口網によせ、網さいふより、海邊さもいひ、になひいだすさもいへり、●もしさ思ふ人やさまるさあしがもの云々、あしがもは、うちむれてさいはん序なれば、はやくいなんとて、さほみちぬ。風もふきぬべし、とさわげば、舟にのりなんとす。

定本はの字なし、

くちあみ云々　和名抄、龍魚類云、鯢、唐韻云、鯢、（雅色立成云、仁部一云久智　魚名也、物類稱呼云、いしもち京江戸さもにいしもちさいふ、四國四國にてくちさいふ、[正]くちあみも、一本もの字なしもろもちにて定本もろはちさあり、さらず、眞淵云、くちあみは口網にて、今の俗語に口おもしさいふごさく、口にあみをはりたりさいふ名なり、もろもちにてたがひにたすけあふて、やう〳〵してよみ出したるなり、諸持さいふよりになひ出せるさいへり、宣長云、金原清方がいはく、今世に海人のまわざに引網さいふ有て、それに口網奥網さいふ有、その口網はひろさ六七尺計、長さは五六十丈もあるを、海中へはへおきて魚をさる、そを引あぐる時に、海人どもこゝらなみたちて、になひいだすえ、これならんさいへり、さもあるべし、歌よむこさ、口重きをたはふれに、かの口網のおもくて

万葉十、蓁鴨之多集池水雖レ溢儲潴方爾吾將越八方、　古今戀一、よみ人しらず、あしがものさわく入江のふらなみのふらすや人をかくこひんさは、

○いといたく云々　[正]一本いたくと有、そこひふられぬ、定本、爲本、抄、證本、附本はやと有、虫に取らず、

つれば爲本くらひけれはと有、はやくいなんとて、附本はやと有、虫に取らず、

○なしさ思ふ　眞淵云、なしさ思ふ云々の歌は、わかれを惜さ思ふさかぎらず、万葉にあめつちのそこひのうちに、又野のそき山のそきさいへるもみなのうらん、そきはこひの約なればそきそこひ同義なり、　古今戀四、紫式部日記云、ちひさきふちやはさわぐ山川のあさきせにこそあだなみはたて、後撰春下、三條右大臣、かぎりなき名におふ藤の花なればそこもしらぬ色のふかくまもなきに、いとゞしき御いのあひの、そこひもふらすきふらなる云々、源氏玉鬘云、人のかたちはおくれたるもなほそこひあるものをとて云々、季吟云、李白が汪倫にあたふる詩に、桃花潭水深千尺、不レ及二汪倫送レ我情一、よくかめりさあるいさ誤え、わたさは、海を渡るさいふ事より即わたさいひて海の名させりのごさく助辭なり、みはもちの約にて、則海つ持にして、海をたもちたまふ神の名させり、山をこしてゆく國を越の國さ云ごさく、つは天つそら國つ神なさは海の事え、

○おのれし　季吟云、おのれしさいふしは助字え、この詞伊勢物語に、かぎりなくさほくもきにけるかなさわひあへるに、はや舟にのれ、

日もくれぬといふに似たり、

つけて云云　[正]一本つけつゝと有、からうた、定本、抄からのと有、につかはしき、一本にあはしきと有れど取らず、にしくになれど、附本、黒本、讀本にしのくにと有るによる、いふ、附本、黒本、讀本うたふとあるによりて改めつ、古今大歌所、甲斐歌、かひがれをさやにも見しかけゝれなくよこをりふせるさやの中山、かひがれをれこし山こしふくかぜを人にもかもやことづけやらん、季吟云、この甲斐歌のはじめの歌は、このかぢとりのいなん事をいそぐをかく前をしきなりに、心もなくさいはんためにや、のちの歌は、其おくりきたる人々も都の人なれば京に思ふ人なきにもあらねをりふし、梶とりの風もふきぬべしといひさわげば、其いせを人にもかもなことづていひやらんといふこゝろにうたへるなるべし、甲斐は東國なれば西國なれどゝかけり、　○ふなやかた　和名抄船部云、舳艫、唐韻云、艫庫(和名布奈夜加太、舟上屋也)　蜷川日記云、さきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたりと云々、

○ちりもちり　[正]定本、抄ちりもと有、取らず、藝文類聚卷四十二、引三劉向別錄一云、有二鼓人一歌レ賦、漢興以來善二雅歌一者、魯人虞公發レ聲清哀、塵動二梁塵一、列子湯問篇云、薛譚學二謳於秦青一、未レ窮二青之技一、自謂レ盡レ之、遂辭帰、秦青弗レ止、餞二於郊衢一、撫レ節悲歌、聲振二林木一、響遏二行雲一、薛譚乃謝求レ反、終身不二敢言一帰、

○さまる　[正]一本さいまるとあれど、取らず、

大みなとをおふ　萬葉六、長歌、

悲乃坂關帥奉晉者叙追遊幷士佐道作、眞淵云、萬葉に晉者叙道とあるも舟路の事をいへるにてこゝにおふといふもおなじ、

このあひだに云々　[正]附本そのあひだにと有、はやくの、一本はやうのと有、守の子、群本くにの守の子と有、并にさらず、

山口の千岑　新撰姓氏錄卷九云、山口朝臣道守朝臣同祖武内宿禰之後也、同卷廿二云、山口宿禰坂上大宿禰四世孫都黄直之後也、はらなどにうまれてさいまりねたるなるべし、

くすし　職員令云、凡國博士醫師、國別各一人、云云、

ふりはへ　古今春上、貫之、春日野のわかなつみにやしろたへのそでふりはへて人のゆくらん、大和物語云、かゝる心はへにてふりはへきたれどわがむつましきすさもなし云云、宇津保俊蔭云、かくふりはへたまへるに、いかでかくれんとて出たり、

屠蘇白散　延喜典藥式云、白散一劑、(白散歲旦以温酒一服五分、一家有レ漏即一里無レ痢帶二過散一病氣皆消)屠蘇一劑、(屠蘇酒治二惡氣溫疫一辟二邪風瘧氣一)又云每年十二月造二元日料白散四百十五劑一、令三醫針生一療二帖地黄中標題上云云、　類聚雜事云、十二月小の月なり、●くすしは、土佐國の醫師なるべし、ふるくより、醫師は課試にて、ふりはへきたれどわがむつましきすさもなし云云、宇津保俊蔭云、かくふりはへたまへるに、いかでかくれんとて出たり、

元日　倭書云、月正元日上日也、玉燭寶典卷一云、正月爲二端月一、其一日爲二元日一云云、

ふきならさせて　[正]一本ながされ、附本なくさせ、抄ならされ、なとあるは、うけがたし、

芋も海帶もはかため云云　延喜大膳式云、正月最勝王經齋會供養料、芋六合、滑海藻二兩二分云

●大湊は、前後のつゞきもて考ふるに、いまだ土佐の國の中なる事あきらけし、●大みなとをおふ云々、こは開書に、風に舟をおはするなり、舟の縁語なればなりといへるがごとし、抄におふとは、追たづれてゆくにゝるなりと、あるは誤りなり、●はやくの守の子云々、こは祖氏より、以前の土佐守の子なるべし、●山口千岑、父祖つまびらかならず、山口といふ氏は、姓氏錄にみえたり、

○はやくの守の子　眞淵云、はやうのかみの子は、貫之より前の守の子千岑といふ人、國のさるべき女のもとにかよひねたるなるべし、

廿九日、大湊にとまれり。くすしふりはへて、屠蘇、白散、酒くはへて、もてきたれり。心ざしあるに似たり。

醫師

廿九日、今日は、十二月のつごもりなれば、醫師の屠蘇、白散などもてきたれるなり、さて日本長暦をもて考ふるに、いまだ土佐國の醫師なるべし、ふるくより、醫師は課試にて、ふりはへきたれどわがむつましきすさもなし云云、宇津保俊蔭云、かくふりはへたまへるに、いかでかくれんとて出たり、

元日、なほおなじとまりなり。白散をあるもの夜のまとて、舟やかたにさしはさめりければ、風にふきならさせて、海にいれて、えのまずなりぬ。芋も、海帶もはかためもなし。かうやうの物も、なきくになり、もとめしもおかず。たゞおしあゆのくちをのみぞ、すふ。このすふ

舟庫　押生魚

廿八日、うら戸よりこぎ出て、大みなとをおふ。このあひだに、はやくの守の子、山口の千岑、酒よきものども、もてきて、舟にいれたり。ゆくゝのみくふ。

このをりに、ある人々、をりふしにつけて、から歌ども、時ににつかはしきをいふ。又ある人、にしのくになれど、かひうたなどうたふ。かくいふなる。こよひ浦戸にとまる。藤原の言實、橘の季衡こと人々、おひきたり。

●をりふしにつかはしきを云々、こは、そのをりに似合しき錢別の時に、かなひたる古時なごうたひしなるべし、●かひ歌は、甲斐歌なり、古今に出たり、標注を見るべし、こゝにしもことさらに、甲斐歌をうたふは、季吟の既のごとし、これも標注を見るべし、●かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆくくもたゞよひぬとぞいふなる云々、こはこの時うら風のふきかたのちりもちりさは、漢の隗公が故事なるべし、●ふなやかた　和名抄船部云、艫庫、唐韻云、艫庫(和名布奈夜加太、舟上屋也)　蜷川日記云、さきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたりと云々、

●かひ歌は、甲斐歌なり、古今に出たり、標注を見るべし、こゝにしもことさらに、甲斐歌をうたふは、季吟の既のごとし、これも標注を見るべし、●かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆくくもたゞよひぬとぞいふなる云々、こはこの時うら風のふきかたのちりもちりさは、漢の隗公が故事なるべし、●ふなやかた　和名抄船部云、艫庫、唐韻云、艫庫(和名布奈夜加太、舟上屋也)　蜷川日記云、さきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたりと云々、

●をりふしにつかはしきを云々、こは、そのをりに似合しき錢別の時に、かなひたる古時なごうたひしなるべし、●かひ歌は、甲斐歌なり、古今に出たり、標注を見るべし、こゝにしもことさらに、甲斐歌をうたふは、季吟の既のごとし、これも標注を見るべし、●かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆくくもたゞよひぬとぞいふなる云々、こはこの時うら風のふきかたのちりもちりさは、漢の隗公が故事なるべし、●ふなやかた　和名抄船部云、艫庫、唐韻云、艫庫(和名布奈夜加太、舟上屋也)　蜷川日記云、さきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたりと云々、

●なりふしにつかはしきを云々、こは、そのをりに似合しき錢別の時に、かなひたる古時なごうたひしなるべし、●かひ歌は、甲斐歌なり、古今に出たり、標注を見るべし、こゝにしもことさらに、甲斐歌をうたふは、季吟の既のごとし、これも標注を見るべし、●かくうたふに、ふなやかたのちりもちり、そらゆくくもたゞよひぬとぞいふなる云々、こはこの時うら風のふきかたのちりもちりさは、漢の隗公が故事なるべし、●ふなやかた　和名抄船部云、艫庫、唐韻云、艫庫(和名布奈夜加太、舟上屋也)　蜷川日記云、さきだちたりし人舟にこもやかたを引てまうけたりと云々、

廿八日、うら戸よりこぎ出て、大みなとをおふ。このあひだに、はやくの守の子、山口の千岑、酒よきものども、もてきて、舟にいれたり。ゆくゝのみくふ。

人々のくちを、おしあゆもし思ふやうあらんや。けふは京にのみぞ、思ひやらるゝ。九重のかどの、まりくめの繩の、なよしのかしら、ひゝら木ら、いかにとぞいひあへる。

●元日は、承平五年正月元日なり、元日のこと、標注を見るべし、今日も猶おなじまりにて、大潡にありさなり、●白散をあした、元日にのまんとて、ある人のまわざに、舟やかたの物のあはひなさに、さしはさみおきたりしを、風にふきなくされて、海にいれてのまずなりぬさなり、●ふきならさせては、附注本に、ふきなくさせてさあり、又異本にふきながさせてさあり、この本のごとく、ならさせてさ有ては、ことのこゝろ聞えがたし、風にふきなびかせてなりさあれど、猶こゝろゆかず、●いも、あらめ、昔今も正月元日に用ふるものなり、●はがためは、原本さ資暇鄙本さに、坂田めさあれど、定家卿本、爲家卿本、藤本さもに、はがためさありて、この原本さ、附注本さのみなり、そはは、がためさありしを、文字の似たりしまゝに、さかためさ寫し誤りしを、又文字に直してかけりしなるべし、されば今は藤本によりてあらたむ、はがためは、國固などに、坂田めの坂田は、地名にもやあらん、讃岐の國香川郡に坂田さいふ地名あり、延喜式などに、坂田郡は、讃岐の國香川郡坂田よりいだせし、海藻にやあらん、さてこの既は、たゞこゝろみにいへるのみ、いづれにまれ、はがためさあるかたやまさりたらん、●かうやの物なきくになりもさめもおかず云々、この國にかうやの物なき國なるうへに、もさよりさる用意してもさめもおかずさなり、おしあゆは、原本、ほしあゆさあれど、藤本、みなおしあゆさし、下の文にも、おしあゆさあれば、今は藤本さ、下の文さによりてあらたむ、元日に、おしあゆを用ふること、標注を見て知るべし、●このすふ人々云々、こは原本あふ人々さあれど、藤本さ上の文さによりてあらたむ、季吟云、口子さかきて、遊仙窟に、くちすふさよめり、この年魚をくふ事を、たはふれてかけるなるべし、●九重のかどの云々、九重は、内裏をいふ、宮門のまりくめ繩、なよしのかしら、ひらぎなど、思ひやらるさなり、又考ふるに、定家卿本に、こへのかどのまりくめなはさあるは、小家の門のことなり、附注本に、こがの門のさあるも、小家さありしをよみ誤りて、假名に直せるなり、●まりくめの繩は、古事記に出たり、今いふまめ繩なり、そを正月かくること、今の世もおなじ、この事漢土にもみえたり、さもに標注を見てまるべし、●なよしのかしら、ひゝら木云々、こは今世も、節分には、いわしのかしら、ひゝら木などを、門にさす事、これらのうつりしなるべし、されど今はなよしをもちひず、いわしさなりてより、ことすでに久し、そは標注にひける壒嚢抄、四季物語などを見ても思ふべし、季吟法印、この日記のさま元日節分なりしにやさて、改めつ、　［増］坂田めはかためさの誤なるを、原注に、

讃岐國坂田より出す海藻ならんさいふ既は、取るにたらず、

○おしあゆ　延喜主計式上云、火乾年魚押年魚漬乾年魚云云、同書内膳式云、土佐國押年魚一千隻云云、江家次第卷一云、元日押鮎一坏、業遠鮎一坏云云、拾遺物名、おしあゆ、すけみ、はしたかのおきそにせんさかまへたるおしあゆかすなれすみさるべく、加藤保憲女集云、かしらしろきおきなさなどもちひのかゞみさして云云、上田秋成云、押鮎は今の干鮎の事にや、又別に製あるものにもあるべし、いづれにもくひつきがたきもの故人々の口つきさまゝむつかしげなるを見るにも、その容のあやしげならんを心にかけて物はなすべからんやさいへるなり、

こは齧れて言ふなり、故にこの吸ふ人々の口を、押鮎もし思ふやうあらんやさいへるなり、　［増］くちなの二字なし、　［正］一本この

けふは京のみぞ、原本京にのみぞさあり、今定本、黒本による、九重のかどの、定本こへのかどの、附本、抄こがのまりくめのなどあれど、さらず、まりくめの、定本まりくめさあり、ひゝら木、一本ひら木、いかにさぞ、附本いかにぞなどさあり、並にさらず、　○九重

君之門以九重（補注云、天子有三九門一謂關門遠郊門近郊門城門朝門雉門應門路門也、　諸資玉詩集云、山河千里國、城闕九重門、

古事記上云、即布刀玉命以二尻久米繩一控二度其後方一云云、　日本紀纂疏云、端出之繩、注云、左繩端出、此卽二其義一又解二其訓一也、繩者直之義、神道以レ直爲レ本、左者、鴨御祖之義、即近世注連是也云云、　世諺問答云、まめ繩さいふ物は、左繩にて繩のはしをそろへねものなり、左は清淨なるいはれなり、端をそろへぬはすなほなる心なり、さればあまてるおほん神の、天の岩戸を出たまひし時、まりくめ繩さてひかれたるは、今のまめ繩なり云云、　貞源云、まりくめ繩は書紀に左繩端出とも端出之繩ともかけり、和名抄に注連（之利久倍奈波）日本紀私記云、端出之繩（證與二注連一同）さあり、こは物をへたつるまるしのみこ、正月物いみすさてかくるこ、宜長云、まりくめなはは、今いふまめ繩こ、つゞむれば、おのづからりくはぶかりてまめさいはるゝこ、尻は蘇の本をいひ、くめはこめにて、わらのまりをきりすてすして、さながらこめおきたるなはなり、　利勘談時記云、正月帖蜜鏡戸上懸二蒜柴於其上一云云、　○なよしのかしら　書紀神代紀一書云、日女自レ口出レ鋤以祭焉、口女即鰡魚也、和名抄鱗介部云、鰡、孫愐切韻云、鰡、魚名也、（鰡謂奈與之）ニ指ベシ然ラバ鬼人ナホ可レ取ト云御示現也ト云云、　四季物語云、つゝなの夜は（中略）いわしのはさみ物、ひゝらぎのほこは、なやらふ家には、百數ならでも、ある郎なれどもことに大内にはかうもりの司の例さしてつかふまつれり云云、　［増］なよしは、今このしろといふ魚のことなり、　○ひゝら木ら　［正］一本、ひいらぎ

抄云、黄苓（ヒヽラキ）

さまれり云云　［正］一本、ひいまれりさ有、講師、一本、こうし、附本、新司さあれど並にさらず、

二日、なほ大みなとにとまれり。講師ものさけおこせたり。

●講師を、異本にこうしさ假名にかけるにつきて、公事物さ見たる說あれど、誤りなること論なし、●もの酒おこせたりと云々、こはそのものさささゝで、大よそにおほめかしていへる詞なり、

眞淵云、まへにも馬のはなむけしたる講師なり、もの酒は、さまゝの物、酒などなり、

おなじところなり　［増］おなじ

ところさは大潡なり、

三日、おなじところなり。もしかぜ波のさわしとをしむ心やあらん。

まわしとをしむ　［正］定本、別

本、抄、なほおばしごとあり、大鏡第三云、佐理大貳よのてかきの上手にて、任はてゝのほられけるにいよのくにのまへなるさまりにて、日いみとうあれ、うみのおもてあしくて風おそろしうふきなどするを、すこしなほりてば、いさあやしくおほして、ものさひたまへば、神の御たゝりさのみいふに、さるべき事もなし、いかなる事にかさおそれ給ひける夢に、見えたまひけるやう、いみじきけだかきさまにたるをさこのおはして、この日のあれて日ごろへたまふは、おのづからへたまふ事なり、それはよろづのやしろに、銀のかゝりたゝに、おのがもさにしもなきがあしければ、かけんさおもふに、なべての手してかゝせんが、いさわろく侍れば、われにかゝせ奉らんと思ふにより、このをりならでは、いつかはさて、さゞめ奉りたるなりさのたまふに云云、

たてまつれり云々　［正］定本、抄、によりて改めつ、かうやうの上定本、抄このの二字あり、又かうやうにさもあれど、並にさらず、人に、定本、抄によりて改めつ、なほしもえあらで、定本、抄なほしもはあらでさあれど、さらず、いさゝけわざ、一本、いさゝけきわざさあり、せさず、定本、舘本、證本せさせずさあり、まくる、妙本、曲るさあれど、皆さらず、

酒よきもの云々　［校］よきものさは食物の事なり、なほしもは、直にしもエカあられないでなり、伊勢物語云、あめのしたのいろこのみの歌にてはなほぞありける、眞淵云、なほはたさいふにおなじ、亂葉に歌餘をなほにさも、たゞにさもよみ、又たゞ人をなほ人さもいへり、しもはいひいるゝ同にして、その首のつゞくなるなり、惡しもなさいふしもにおなじ、○いさゝけわざ　伊勢物語云、いさゝかなるわざもえせで云々、○まくる　眞淵云、むくいせれば、まくるこゝちするなり、

おなじところにあり　［正］資本、扶本、おなじところにあるさあれど元のまゝよろし、

あをうま云云　［正］定本、抄、あをうまなどさ有、いさかひなし、及浪のしろきのみぞ定本、抄、別本、證本、によりて改めつ、

万葉第廿云、天平二年正月爲七日侍宴大伴宿禰家持作歌、水鳥乃可毛能羽能伊呂乃青馬乎家布奈流比等波可藝利奈之等伊布、水鏡云、弘仁二年正月七日はじめて青馬を御覽ぜき、内裏式云、正月七日左右馬寮各率二青馬一入レ自二延明門一、河海抄卷五引二十節錄一云、正月七日沼二青馬一青以白爲レ本、天有二白馬一地有二白馬一、是日見二白馬一即年中邪氣遠去不レ來也、錄證奏、ふるゆきにいろもかはらでひくものをたがあをうまさ名づけそめけん、公郎根源云、晴眼に春を東郊にむかへて青馬七疋を用ふることあり、七は少陽の數、正月は少陽の月なり云云、逸周書卷七王會解云、周公旦主二東方一所之青馬黑鬣謂之母兒、皆馬云云、青馬さいへど實は白馬なり、古實に白きを青さいへる例皆然の白屑の津さいひ、又青

おなじところにあり云々、こは原本におなじ所にあるさあれさ、今は諸本によりてあらたむ、

六日、きのふのごとし。

今日もきのふのごさく、風波やまねば、同じ所にありさなり、

七日になりぬ、おなじみなとにあり。けふは、あをうま青馬を思へど、いとかひなし、たゞ波のしろきのみぞ、見ゆる。かゝるあひだに、人の野のいけと、名ある所より、鯉はなくて、ふな鮒よりはじめて、川のも、海のも、こともののども、長びつに、になひつゞけて、おこせたり。わかなこ若菜籠にいれて、きじなど雉花につけたり。わかなぞ、けふを志らせたる、歌有、そのうた。

あさぢふの野べにしあれば　水もなき　いけにつみつる　若菜なりけり」いとをかしかし。このいけといふは、所の名なり。よき人の男につきて、くだりて住けるなりけり。この長櫃の物は、皆人わらはまでにくれたれば、あさみちて、舟子どもは、はらつゞみをうちて、海をさへおどろかして、波たてつべし。かくて、このあひだに、ことおほかり。

七日、今日も猶大みなさにあり、●人のいへのいけさ名ある所より云云、いけは土佐國の地名なるべし、いけさいふをうまの事は、諸注にくはし、季吟云、この詞、大みなさに久しくありて、勞倦の心あらはれ侍り、

五日、かぜなみやまねば、猶おなじところにあり。人々たえずとふらひにく。來

四日、かぜふけば、えいでたゝず。まさつら、酒よきもの、たてまつれり。からやうの物もてくる人に、なほしもえあらで、いさゝけわざさせず、物もなし、にぎはゝしきやうなれど、まくるこゝちす。

●まさつらは、父眼志るべいらす、妙源院本に昌運さ文字にてかきたり、●なほしもえあらで云々、季吟云、伊勢物語に、たゞなほやはあるべきさ侍るに、同下く直の字なるべし、たゞにしもえあらでさのめなり、猶精注を見てしるべし、●いさゝけわざさせず物もなし云々、こは原本いさゝけわざさせさ物もなし、さあれど誤なること明らかなれば、扶桑拾葉本、群書類從本によりてあらたむ、この詞の意は、この來たる人々に、たゞにはあらで、いさゝかなるもてなしをもせんと思ふに、船中なればさる物もなければ、にぎはしきやうにはあれども、そのさたろ人々にこのかたが、まくるこゝちすさなり、

所の、人の家よりと心得べし、人の家の云云とあるを、異本に人の野のとあるかたよろしからん、さてこゝの意は、いけといふ名ある所なれども、池にある鯉はなくて、川の物、海の物などおこせりと、例のたはふれかけるなり、●鯉はなくて云云、原本に鮎はなくてとあれど、正月のはじめに、鮎のなきことはもさよりなるうへに、諸本みな鯉はなくてとあるによりて、あらたむ、そは鯉と鮎と文字より誤りしものなるべし、鮎とあるは、原本と開書とのみなり、さてあゆはなくてとあるにも、いさゝか意あり、そは開書云、あゆはなくては、鮎はいはひの物なるに、それをばおくらずして、こと物をのみおくりたりといふなり、●川のも、海のも云云、こは川の魚も、海の魚もなり、さてそれにこと物もくはへて、長櫃にいれておこせりとなり、●わかなこゝにいれてきたなど花につけたり云云、この文を、原本諸本ともに脱せり、今は為家卿本、附注本などによりておぎなふ、すべて物を草木の枝につくる事、二つの式なり、そは標注にくはし、●わかなぞけふをばしらせたる云云、こは今日は七日なるに、白馬もみれば七日のしるしもなきをわかなばかりぞ、けふをしらせたるとなり、わかなの事は、標注を見てしるべし、●あさぢふの云云、眞淵云、この哥あさぢふは、淺茅生なり、ふるとは荒物を生ふる所をいふ、あはふを粟田、まめふを豆田など哥たゞひなり、上田秋成云、水もなき池につみつるき物にもあらめをと、用意したる哥なり、●いさをかしかし云云、こは哥をいさをかしとほめたる詞なり、●はらつゝみのこと、標注を見るべし、

なみたてつべしとは、故事によりてかくはいへるなり、そは標注にひける文選の文を見ても思ふべし、

けふわりご　破子

もたせてきたる人、その名などぞや、いま思ひいでん。こ

○花につけたり　伊勢物語云、なが月ばかりに梅のつくり枝にきゝをつけてたてまつるとて云云、落久保物語云、あをきゝりのつぼにこれのたちはないれてあをきふくろにいれ五葉の枝につけたり云云、増鏡巻六云、螺鈿とりの二字を加へつゝ、皆人、一本、おしなべてと有、定本、抄、別本、皆人々にとあれど取らず、波たてつべし附本、つなみと有、慶長本、波をもとあるによる、

○長びつ　和名抄木器類云、櫃、(和名比都、俗有

○こまものゞも　【正】

中有隙之器也云々、崎嶇日語云、わりごなどものして、舟にこしをかきすゑていそぎもてゆけば云々、源順草第十九、われをいとふいもが心やこまくとへだてかちなるわりごなるらん、　【正】原本、いまわりご云々と有、定本、抄、別本、顯水、證本によりて改めつ、

【增】わりごは食物を容るゝ筥にて、今の重箱の組用の類なり、きたる人云々　【正】一本、きたりその人と有、この人、為本その人と有、うれへいひて、定本、抄、別本うるへいひてと有取らず、

さぞよめる　【正】群本、黒本、證本によりてその一字を加へつもてくる　【正】群本もてきたると有、よりは、一本よりもと有、あはれ　眞淵云、あはれはあゝといふ聲より出てゝおもしろき事にも、悲ふる事にも何にもみないへり、なげきといふも長息にて息を長くするをいふ、あはれは聲のまゝをいひて心はおなじことなり、　【正】あはれかれとも、一本もの字なし、かへしせず、一本かへしもせずと有、ましれゞ、定本、原本まゝはれゝごと有、抄、別本、黒本によりて改めつ、　○いたがりて

の人、うたよまんと思ふ心ありてなりけり。とかくいひくて、涙のたつなることゝゝ、うれへいひて、よめるうた。

ゆくさきにたつ白なみの聲よりも おくれてなかんわれやまさらん」とぞよめる。いと大ごゑなるべし。もてくるものよりは、歌はいかゞあらん。この歌を、これかれあはれとも、ひとりもかへしせず、まつべき人もまじはれゝど、これをのみいたがりて、物をのみくひて、夜ふけぬ。この歌ぬしまたまからすと、いひてたちぬ。

●今又こゝ人の、わりごもたせてきたる人ありしが、その人の名は、何とかやいひし、わすれたりしを、いま思ひいだすべしとなり、この人のかくきたるは、おもてにほめられんと思ひて、きたれりとなり、さてかくなにやかやといひて、よみいでん歌に、よしあることゞもなることなど、うれへいふなり、そはよみいでたる歌に、はえあらざめんさていへるなり、●ゆくさきに云々、この歌は、こゝろ明けし、大ごゑなるべしとは、この歌に立ふらなみの聲よりもおくれてなかんわれやまさらんとあるを、さぞ大ごゑならんと、いだすべしとなり、この人のかくきたるは、わかれをしみて、さふらひきたるのみならず、はえある歌なとよみて、ほめられんと思ひて、きたれりとなり、さてかくなにやかやといひて、よみいでん歌に、よしあることゞもなることなど、うれへいふなり、そはよみいでたる歌に、はえあらざめんさていへるなり、●ゆくさきに云々、この歌は、こゝろ明けし、大ごゑなるべしとは、この歌に立ふらなみの聲よりもおくれてなかんわれやまさらん」とぞよめるが、波の聲より、わが聲のまさらんとあるを、さぞ大ごゑならんと、紀氏のたはふれに、あざけりていはれしなり、眞淵の説に、ほこりかなる故に、大ごゑなるべしといはれつるは誤れり、このなるべしといへる語に、心をつくべし、さてあざけりたる證には、次にもてくる物よりは、歌はいかゞあらんともいへり、季吟云、ゆくさきに立しらなみといへる、舟路の首途に禁忌なり、●これをのみいたがりと云々、こは原本にいたはりてとあれど、今は定家卿本、附注本、群書類從本などにいたがりと、あるに、より、て、あらたむ、この詞は、季吟の痛の字なり、物をほむる事といはれつるはいかど、こは標注にあげたる證と、眞淵の説どを見てしるべし、●またまからすとさいふ意なり、今もかた田舎の方言に、ゆくさきの説なり、外をばおしてゆかんす、くはんすの意なり、ゆく事をゆかすといひ、くふ事をくはすなどいふがごとし、これらもみなこゝろへのありながらうちつけにもいひつけたまはす、つれなしがほなるしも

こそいたけれ云々、行宗朝臣、もちひこそいたきやつなれみな人のふくださのみもなづくさおもへば、訓淵云、いたかりては、ものをほむるやうにてそしる同也、こゝは歌のわろければかへりてほめてのみすぐしてかへしもせぬなり、〔正〕原本いたがりと有、附本、黒本、證本によりての字を加へつ、○またまからす　聞書にまからすはまからんすさにはれてよむへしよみくせと、〔増〕まからすと清みてよむべし、らすのすは敬語之、來ることをまかるといへるは方言にて、俗にマタマ井リマスなり、○ほえ　〔補〕弘庵云、原本註はへある歌などはへあらしいむさてさあるはへはある人の子　後撰冬おやの外にまかりておそくかへりければつかはしける、人のむすめのやつなりける、神無月まぐれふるにもくるゝ日をきみまつほどはながしとぞ思ふ、後撰正雑云、これは貫之の女七條にてよめりといふ、父貫之内裏よりおそくかへりけるをまちわびてよめり家集には、ちちまつほどはさあり云々、大鏡巻八云、四の宮のそこ〳〵の家にいるこくさきたる水のやうだいうつくしきが侍りしを、ほりたりしかばいへあるトの水にこれゆひたまひ候てもてまゐれといはせたうびしかば、あるやうこそはさてもてまゐりて候ひしなにぞさて御覧トければ女の手にてかきて侍りける、「勅なればいともかしこしうぐひすのやどはさはといかゞこたへむ」さありけるに、あやしくおぼしめされて、なにものといへぞとたづねさせたまひければ、つちゆきのねしのみむすめのすむ所なりけり、

まろ　古事記云、宇麻良賀岐許許志母知袁賀勢麻呂賀知云々、伊勢物語、つゝゐつゝにかけしまろがたけすぎにけらしないもみざるまに、宣長云、まろさは、われおのれなどいふがごとし、さて師の説にみづからまろさいふことはかしこきをかざりさいふにむかへてかざなくまろなりさいふ意にてつたなくおろかなるよしの稱なりといはれたるは古への物言ともきこえすからごゝろめきてこそおぼゆれ云々、

いへかしといふに云々　〔正〕原本、にの字なし、爲本、黒本、證本による、まからすといひて、原本、いひの二字なし、一本、證本、證本によりて加へつ、あらん原本、ありけんと有、爲本、黒本、證本によりて改む、定本、抄、別本ありけんの四字なし、之苗、(姿利)皆毛皆毛百足之虫(乃)至死不顧尊(波)輔(乎)多(奈止奈毛)陪食云々、ほす云々、宇津保物語云、さしかげ云、そも〳〵けだものさいへどさらおぼかなからぬはすまざなり云々、

○そも〳〵　續日本紀巻卅六云、天應元年三月辛卯詔云、其尊仁者、百行之苗、(姿利)皆毛皆毛百足之虫(乃)至死不顧尊(波)輔(乎)多(奈止奈毛)陪食云々、竹取物語云、そも〳〵いかやうなる心ざしあらん人にかおほんとお思はずなり。わらはことにては、何かはせん。おもな、おきなにをしつべし。あしくもあれ、いかにもあれ、たよりあらば、やらんとて、おかれぬめり。

●ある人の子の云々、こは紀氏みづからの子なれど、例のおほめかして、ある人のこのさはいへるか、又實に或人の子にてもあるべし、されど紀氏の子の歌よみしこと、外の書にも見えたれば、こゝも紀氏の子としてありぬべし、

さて紀氏の子の歌よみしこと、は標注を見てまろべし、標注に引たる宣長の説と證と、を見てわきまふべし、●よみてんやは、よみつべくは云々、こはよみてんやは、よみはせじと、されどもし、よみつべくは、はやくいへとなり、歌ぬしのまからんすさて立ぬるをまちて、よみたる歌をもいはんとて、たづねれど、よのふけぬればにやあらん、やがてそのまゝかへりさりぬとなり、そもくは、語をいひおこすことばなり、語例標注にひけり、●いぶかしとは、字類抄に訝を訓ぜり、不審なる意なり、猶標注を見るべし、●ゆく人もとまる袖のなみだ川　みぎはのみこそぬれまさりけれ」ていへるのみなるべし、又は土佐にさる名所ありてか、すべて涙川に三つあり、そは標注を見てまろべし、李嶺云、さきの歌に、ゆくさきにさいひ、おくれてなんさいふものかな云々、聞書云、かやうにも、よくよみたるものかなとなんよめる。かくはいふものかは。うつくしけれればにやあらん、いとくしは、わか子をうつくしみあはれむをいへり、古事記、萬葉などに、愛をうつくしとよみ、以呂波字類抄に、慈愛親などをうつくしみと訓ぜり、こゝはわが子を愛する心からにやあらん、歌も思はずによきやうに思へば、わらはの歌にては、何かはせん、につかはしからんなおきな云々、李嶺云、をんなおきなさは、年よりを爺さいへば、老女のことにかけるにやさ、いはれつるは誤なり、おんな、おきなは、媼さ翁さふたつなり、そは標注にひける、證を見ても思ふべし、このくだり原本おんなおきなてをしつべしさあれど、誤なること明らかなれば、今は定家朝本、爲家朝本、扶桑拾葉本、群書類從本等によりてあらたむ、●たよりあらばやらんとてまづうちおかれしのかけるなり云々、この戯誤れり、こは又たよりもあらば、やらんとてまづうちおかれしなり、

と聞なることしるし、［正］原本、おんなと有、抄、舊本おむなとあるによる、［増］おむなおきなになしつべしさは蓋女にては、歌の餘りよく出來すきたり、聞書の歌にすべしと審めたるなり、○あしくもあれ云々　［正］一本、あしくまれいかにまれと有れど取らず、

さはる事ありて云々、［正］一本、さはる事あればと有、こよひの月、一本、別本、黒本、舊本、のの字あるによる、

業平の君　三代實錄卷三十七云、元慶四年五月二十八日辛巳從四位上在原朝臣業平卒、業平者故四品阿保親王第五之子、正三位行中納言行平之弟也、阿保親王羽栖武天皇女伊登内親王生業平（中略）業平體貌閑麗、放縱不拘略無才學善作和歌（中略）卒年五十六、

山のはにげて　古今雜上、なりひら朝臣、あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずもあらなん、六帖四、友則、いる月を山のはにげていれずとも人のこゝろをいかゞたのまん、［増］古今雜上なる山のはにげて云々の歌は、業平朝臣が惟喬親王の御前にて御宴の時、親王いたく醉ひ給ひて腰所に入り給ひなんとせしときよみし歌なり、伊勢物語に詳なり、○おぼゆる云々　［正］一本、おもほゆるこそ有、よまゝしかばなんともよみてこそ有、皆に取らず、○てる月の云々　後撰羇旅、土佐より任はてゝ上りけるに、ありても紀氏みつからの哥なる事しるし、●ある人とは、例のおぼめかしてかけるなり、●天の川いづるみなとは海にざりけるをは、博物志の故事を思ひよりてよまれつるか、そは錯誤にひけり、ざりけるは、ぞありけるなり、

一本、つきいでたらましかばと有、あらなんこみて則本、あらなんとみて則本、

のぼり侍りけるに舟の中にて月を見て、貫之、てる月のなかるゝ見ればこよひの月、一本、さればしよごむと、博物志卷十云、漢說云、天河與海通、近世有人居海渚者年々八月有浮槎去來不失期、人有奇志、立飛閣於査上、多齎糧乘而去十餘日中猶觀日月星辰、自發至々忽々亦不覺晝夜、去一餘日奄至一處有城郭狀、屋舍甚嚴、遙望口中、多織婦、見一丈夫、牽牛渚次飲之、牽牛人乃驚問曰何由至此、此人具說來意、并問此是何處、答曰、君還至蜀郡訪嚴君平、則知之竟不上岸、因還如期、後至蜀問嚴平曰某年月日有客星犯牽牛宿、計年月正是此人到天河時也、［正］さりける集にはぞありけるとあり、

九日つとめて　新撰字鏡云、暁曉明旦（同上屯反日初出時也、明也旦也反日初出時也、

八日、さはる事ありて、猶おなじ所なり。こよひの月は、海にぞいる。これを見て、業平の君の、山のはにげていれずもあらなんと、いふ歌なん、おぼゆる。もし海邊にてよまましかば、波立さへていれずもあらなんと、よみてましや。いまこの哥をおもひいでゝ、ある人のよめりける。

後撰羇旅
てる月のながるゝ見ればあまの川いづるみなとはうみにざりける」

とや。

今も聖同とごとく、大湊にありさなり、八日なれば、さく月のいるが、海べなれば、海の中にいるやうに見ゆさなり、さて月の海の中に、いるやうに見ゆるを見て、業平朝臣の山のはにげて云々の、哥を思ひいづさなり、この哥は標注にひけり、●てる月の云云、この哥は後撰にも貫之のさてのせられたれば、まへのことばにある人のよめりけるさ、ありても紀氏みつからの哥なる事しるし、●ある人さは、例のおぼめかしてかけるなり、●天の川いづるみなさは海にざりけるをは、博物志の故事を思ひよりてよまれつるか、そは錯誤にひけり、ざりけるは、ぞありけるなり、

九日、つとめて、大湊より、那波のとまりをおはんとて、こぎ出けり。

地豆止女天又阿志太）桃草子云、冬につとめて霜のふりたるはいふべくもあらず、拾遺哀傷、仙慶法師、ごくらくはるけきほどゞきゝつるにつとめていたるところなりけり」［正］一本九日のさあり、

那波　和名抄國郡部云、土佐國安藝郡奈半、

おぼんとてこぎ出けり

［正］一本おぼせん又諸本こぎ出にけりさあり、

あまたが　［正］定本あまたるさあり、

長谷部行政　新撰姓氏錄第十七云、長谷部造神饒速日命十二世孫手遮見命之後也、

いでたまひし　［正］定本たまうさあり、

ぞゆざしある云々よりこの人々　［正］定本此の十五字なし、

海にも　［正］原本海にはさあり、今定本、抄本による、

かくてこぎゆくまに〳〵云々

遊仙窟云、忽把十娘手子而別行至二三里、廻頭看數人猶在砂堤立、余時漸々去遠、望洗彫波、顧瞻不見側僧而去、行到山口浮舟而過、云々、大和物語云、車は舟のゆくをみてえゆかず、舟にのりたる人は、車をみるさて、おもてなさしいでゝ、こぎゆけば、さほくなるまゝに、かれより、今はこぎはなれてゆく。これを見おくらんとてぞ、この人どもは、おひきける。かくて、こぎゆくまに〳〵、海のほとりに、といまりける。この人々のふかき心ざしは、この海にはおとらさるべし。ここに、おひくる。この人々ぞ、心ざしある人なまたがなかに、藤原言實、橘季衡、長谷部行政らなん、御館よりいでたまひし日より、ここかしこに、おひくる。これを見おくらんとてぞ、この人どもは、おひきける。かくて、こぎゆくまに〳〵、海のほとりに、といふ事ある人も、とほくなりぬ。舟の人も、見えすなりぬ。岸にも、いふ事あるべし。舟にも、思ふことあれど、かひなし。かゝれど、この哥をひとりごとにしてやみぬ。

思ひやることゝろはうみをわたれどもふみしなければあらずやあらん」

●つとめては、早朝ないへるにて、新撰字鏡に、日初出暗也と注したるがごとし、●なはのさまりは、和名抄に奈半さあるさ同所なるべし、●藤原言實、橘季衡このふたりは、さきに見えたる人なり、長谷部行政この人ははじめてみえたり、父祖まるへからす、長谷部行政らなん云々さ、あるなんの二字を原本脱せり、今は舊家鄉本、扶桑拾葉本、群書類從本なさによりておぎなふ、●御館より出たまひし日より云々、御館より出たまひしといふは、おほやけの館なれば、御の字なばつくるか、又この書すべてみづからなば、よそ人のやうにかければ、記氏の館より出しを、御館より出たまひしさもいふべし、●この人々ぞ云々、原本このぞもしを脱す、今は舊家鄉本、拾葉本、頭從本等によ

ほいさちひさくなるまで、みおこせければ、いとかなしかりけり云々、 幾經記云、たがひにゆきもやらず、かへりてはゆき、ゆきてはかへりしたまひけり、畢にのぼり谷にくだりゆき給ふほどにすがたのみえ給ふほどはしづかはる〳〵とみおくりけりたがひにすがたのみえねほどにへだてば山びこのひゝくほどにぞをめきけるこゑも君をおくるとおもひやる心もともにたびれなぞする」[正]あるらん原本ありけんとあり、今定本による、

かくて [正]妙本此三字なし、いくそばく 古今物名、よみ人しらず、花ごとにあかすちらし風なればいくそばくわがうしとかは思ふ」

もとごとに云々 万葉三、何時間毛神左備初留鹿背山之鉾椙之本爾近生左右二」全十長歌、眞椙繁拔旗張本葉裳實世丹云々」

鶴ぞとびかふ [正]原本ぞもとなし、又定本鶴の群本とびかよふとあり、今諒本、定本による、

見わたせばの歌 万葉二、後將見跡君之諾有翳 代乃子松之宇禮乎又將見香聞」 妹之名者千代爾將流姫島之子松之末爾標生 孫代爾」 書部神功紀歌云、宇陽比等戰于陽豐苔奴知野伊徒姑播摩伊徒姑奴知云々」 万葉八、黃葉乃過麻久惜奥思逝今宵者不開毛有奴香」 六帖、わがやどの松のこずゑにすむたづを千世のゆかりと思ふべらなり」 [正]ちとせ原本千世のとあり、

てけ 宇津保初秋云、さるトやうづのてけの手どもをいちもちにしつき給へる人の云々、[正]一本ひより卿本ていけとあり、ならはぬは [正]一本、黒本ならはれはとあり、

かくおもへとは [正]原本おもへはとあり、今一本、黒本、讀本による、

ふなうた 宇津保俊蔭云、御ふともこきつらねて、よろづのトやうづふなうたに、ものゝれども、ふきあはせて云々、住吉物語云、ゆきちがふ舟にのりたるものどもの、あやしきこゑ〳〵して、つきもさためぬきしの姫松、そうたひてこぎゆくも、ならはぬこゝちして、あはれなり云々、又云、おきよりこぎくる舟には、あやしきこゑにて、にくさひかけるなどうたふも、さすがになかしかりけり云々、貫選漢武帝秋風辭云、泛樓船兮、濟汾河橫中流兮、揚素波鼓鉦鳴兮、發棹歌(注云種歌引種而歌)

三輪黃圖卷四云、昆明池中有龍首船常令宮女泛舟池中張風蓋建華旗作櫂歌(櫂歌櫂發歌也又曰櫂歌艫舟人歌也)小補觀合卷四云、歌乃歌棹船相應聲云々、

おもへらすそのうたふうたは [正]資本、附本おもへらすそなにともおもへらず、その春の野にてそ、ねをばなく、わかするなを、親やまほるらん、夜部の菜を、そらごとをして、おきのりわさをして、錢ももてこず、おのれたにこず」これならずおほかれども、かゝず。これらを、人のわらふをきゝて、海はあるれど、心はすこしなぎぬ。かくゆきくらして、とまりにいたりて、おきな人ひとり、たうめひとり、あるがなかに、こゝちあしくして、ものも、ものし給はで、ひそまりぬ。

●山も海もみなくれ云々、こは日のくれたれば、山も海もかきくらがりて、くらきをいふなるべし、●てけは天氣

かくて、宇多の松原をゆきすぐ。その松のかず、いくそばく、いく千年へたりとしらず。もとごとに、浪うちよせ、枝ごとに、鶴とびかふ。おもしろしと、見るにたへずして、舟人のよめるうた。

見わたせば松のうれごとにすむつるはちとせどちとぞ思ふべらなる」とや。この歌は、所を見るにえまさらず。

●宇多の松原は、いまた土佐國のうちなるべし、宇田野、宇田氷室、宇陀大野、花田などいふ名所あれど、みな當國にあらず、●いくそばくは、いくもさいへるなり、いくもさゝいへるなり、万葉に、松のたちなみたるをいふ、幾十許の意なるべし、もとごとには、松の木のもとごとにはあらず、木ごとにになり、木ごとにはを、木ごとにふは、万葉に見えたり、●鶴とびかふ云々、季吟云、とびかふは、飛ちがふなり、ふな人は、楫取にあらず、船中の人なるべし、●見わたせば松のうれごとに云々、季吟云うれは上なり云々、この説誤れり、うれはうらの轉りたるにて、松のうらごとにになり、さる證は、万葉に末の字をうらとよみ、又宇韻ともかけり、うれうら、音かよへり、どちは書記に、奴知さかき、万葉に共の字をよめり、皆も共の字のごとし、さてこゝの意は、朋と松とはちよの友どちと思ふらんさい所のけしきよりは、昔はおされりとなるべし、

○思ひやるの歌　萬之葉、さほくゆく

のさあり、原本はもト[illegible]なし、今群本、抄本、謄本によりて加へつ、

わかすゝき　[補]弘庵云、傍註に晉源さあるは非ム、消みてよよむべし、若源ム、

手をきる〳〵　[正]抄本手をの二字なし、

まほろらん　宇津保藤原君云、かくてふし給へるほどに、まうほる物、日にたちばなひとつ云々、

ふうとめ　和名抄夫婁類云、姑國雅云、夫之母曰姑（和名之宇止女云々）

よんべのうなゐもかなぜにこはん　[正]原本此の十五字なし、今諧本、抄本、別本、黒本、謄本によりて補ひつ、

夜部の衆をそらごとをして　万葉四、野千玉能昨夜者今還今夜左倍吾乎遅其路之長乎呼」醫州消息下云、位記只今所持來也、夜部入眼云々、万葉十一、朝茅原小野印空尓何在云公待」六帖二、へなつけて山にいりにしあらたかのいとをきにくきそらごとなせそ」小大君集、わりなしやそらごとによりちかひてはけふまであらん物さやは思ふ」[正]夜部の衆を抄本此の五字なし、　○おぎのりわざ　官司市云、以泉府同貨而斂諸、註云、民無貨即賒貨而予之、　○これならずおほかれども　又おほかれどものもト原本なし、今諧本による、　[正]原本、これなみにとあり、　○ふみるからに心はなぎぬかたらはれども　[正]爲本ともあり、　○なぎぬ　伊勢物語、おほよどのはまにおふてふ人ひとりたうめひとり　和名抄老幼類云、古老又一云、老翁一云、老婦一云、日本紀云、嘉領（二字讀太宇女乎佐女毛波其）嘉一之義也、太宇女者、毛波其之語也、今呼古老女、爲太宇女、放次於百耳、　新猿樂記云、野干坂伊賀專之男祭叩幽苦本舞云々、宇治拾遺卷四云、紙たまはりて、これつゝみてまかり、たうめや、子共などに、くはせんといひければ云々、宜長云、老女をたうめといふは、姥（トメ）のうつれるにて名にきく所はねならばとぶがごとくに都へもがな」

なり、宇津保物語に、天下さいへることを、てけさあるにても志るべし、さてかちどりさいふものは、天氣などよくみさだむるものなれば、天氣の事は、かぢとりにまかすさなり、●なのこもならはねは云々、こはなの子のうちにも、かゝる海路の旅になれざる人は、いと心ほそしさなり、なのこもさいふにて、まして女の心ほそさはおしはかりまるべし、●かく思へは云々、歌林良材集、海路の旅になれざる人は、女も男もかく心ほそく思へど、舟子かぢとりは、何さも思はず、ふなうたなどうたふさなり、●ふなうたうたひて云々、ふなうたは、住吉物語、宇津保物語などにも出たり、又漢土に、棹歌、歌乃歌などいへるも、ふなうたなり、そは標注にひきたるを見てしるべし、●巻の野にてそれなばなく云々、こは巻の野にて、わがすゝきに手をきるをもいさはず、皆になきつゝつみたる衆を、さいへるなり、●親やまほろらんふうとめやくふらん云々、原本親やまもろらんさあれど、誤なること明らかなれば、今さの返、まなればおのづからまほろるさなれり、宇津保物語にまうほろるさあるも同ト、●かへらや云々、季吟云、かへらやは、かへつけていふうたのふしなるべし、この下にわらはがうたへるうたにも、かへらやこれは舟歌のはやし詞さ見ゆ、●夜部の衆を云々、この文諧本になくして、よんべのうなゐもがなどにこはん云々、さいふ文をのせたり、又諧本にのせたる文もさだかならず、この本のごさくにては、文字の考へ見えたり、又諧本にのせたる文もさだかならず、この本のごさくにては、文字の考へ見れば、もさより別種の本さ見まがふばかりにて、文字の意も明らかなれど、かへりて諧本のかすはすくなければ、かへりて諧本の本文さおなじき本、資陵舶本さ異本のうちに一本見えたり、●そらごさをしておぎのりわざをして云々、この本のかたまされり、尤そらごさはいつはりなり、おぎのりわざをして云々、猶標注を見るべし、●これなみにおほかれさ云々、このやうなる歌、おほかれどもかかずさなり、●おきな人を云々、和名抄に古老を訓せるがごさく、老人をいふ、●たうめも、和名抄に呼老女爲太宇女、さあるごさく老女をいへり、猶くはしくは、標注を見てしるべし、さて下文に淡路のたうめさあるさ同人にや、●ものもものしたまはで云々、こは食事をだにせぬさいふ意なり、源の字の意なり、源は標注を見てしるべし、

やあらん、さてそのたうめに、源の字を用ふるは、いかなる由にか詳ならず、御國にて字義に非ざる意に用ふる例も多ければ、この字を用ひて、へんをはぶけるにもやあらん、そはかもかくもあれ、たうめさいふは、老女の稱也、[正]原本たうめの下ひとりの三字なし、今定本、抄本、黒本によりて加へつ、よる、　○ものもものし給はで　眞淵云、物をもくはずしてれたるなり、[正]原本あしみしてとあり、今諧本、異本に篇云、盤（ヒソマル）玉篇云、盤蹇憂愁不樂之狀、[正]給はで一本たまはらで定本たばでとあり、取らず、　○ひそまりぬけふはこの　[正]原本、此の五字なし、今定本、抄本、別本によりて加へつ、

十日、けふはこの那波のとまりに、とまりぬ。

きのふ九日の條に、那波のさまりをおはんさてさありて、今日十日に、なはのさまりにつきてさまれるなり、

室津　和名抄國郡部云、安藝郡室津（李呂都）　[正]定本ありやうさありさま、

れいの事どもして　九條殿遺誡云、先起稱國足名字七遍（微音）次取鏡見面見曆知吉凶、次取枳枝、向四洗手、次誦佛名、及可念尊勝所尊重神社、次記昨日事（事多日中可記）次服粥、次梳頭（三箇日一度可梳之日々不梳）次除手足甲（五日除手甲寅日除足甲）次掃日沐浴（五箇日一度）（中略）有可出仕事、即服衣冠不可懈緩云々、　證記內則云、凡內外鷄初鳴咸盥漱、衣服欲統鬘、櫛搔笄纓及紳、佩容臭、昧爽而朝、各問其安否而供之、

いまし　和玉篇云、乃（イマシ）平他字類抄云、乃（スナハチ）[增]注に和玉篇に、乃の字をイマシさ訓ぜり、乃の字の義にて

十一日、あかつきに、舟を出して、室津をおふ。人みなまだねたれば、

海のありさまも見えず。たゞ月を見てぞ、にしひんがしをば、志りける。

かゝるあひだに、みな夜あけて、手あらひ、れいの事どもはて、ひるになりぬ。いましはねといふ所にきぬ。わかきわらはは、この　所の名をきゝて、はねといふ所は、鳥のはねのやうにやあるといふ。まだをさなきわらはのことなれば、人々わらふときに、ありける女わらはなん、この歌をよめる。

まことにて名にきく所はねならばとぶがごとくに都へもがな」

も、こゝの詞よく聞えたり、さあるは、甚だ非ㇾ、こは漢書などに人を呼ぶに、用代する、乃(ナンヂ)といふ詞を、本邦にては、イマシといふより此の乃の字をイマシとよませたるなれど、スナハチの義にはあらず、こゝのいましは注にもある如くしは助字にて、今といふことゝ、○ばれ　和名抄羽族體云、雨衣雅集注云、羽本曰翮(和名八根)一云、羽根也、　○わかきわらは　源氏蜻蛉云、あしすりといふことをして、なくさま、わかきこどものやうなり、○ばれ　今群本、抄本、諸本による、　○わらふさきに　○名にきく所　[正]定本、抄本名をさあり、[正]原本きの二字なし、[正]原本、此の二字なし、[正]定本、抄本、此の五字なし、

さく　[正]為本、此の二字なし、[正]為本げなとあり、[正]為本げなとあり、

げにさ　誤なるべし、

ついでにて　[正]原本、黒本にぞさあれど、さては語格さゝのはれば、今一本、諸本によりて改めつ、

むかしの人　[正]一本むかしつ人さあり、

かなしむ事は　[正]定本、抄本かなしがらるゝ事はさあり、

ふるき歌　[正]定本、抄本き！よなし、

かすはたらでぞ云々　古今顯旅よみ人知らず、きたへゆくかりぞなくなるつれてこしかすはたらてぞかへるべらなる」左注云、この歌は、ある人、男女もろともに、人のくにへまかりける、をとこまかりいたりて、すなはちみまかりにければ、女ひとり京へかへりける道に、かへる雁のなきけるをきゝて、よめる

男も、女も、いかでとく、都へもがなと、思ふ心あれば、この歌よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々わすれず。このはねといふ所、とふわらはの、ついでにて、またむかしの人をおもひいでゝ、いづれの時にかわするゝ。けふはまして、はゝのかなしむ事は、くだりし時の人の、かずたらねば、ふるき歌に、かずはたらでぞかへるべらなるといふ事を、おもひいでゝよめるなり。

世の中に思ひあれどもこをこふるおもひにまさるおもひなきかな」

といひつゝなん。

●まことにて云々、の歌をさまで、よしさにもあられど、舟中の男女ともにいかで、さく都へかへらんと思ふなりなれば、げにさ思ひて、みな人々わすれずとなり、●むかしの人は、在國のうちうせたりし女子をいへり、原本になる事ふるけれは、今は定家廂本、抬葉本、類從本、異本等によりてあらたむ、●けふはましてといへるは、この女わらはの歌よみしさまなどを見て、わきてすぎにし女子を思ひいだせりとなり、●世の中に云々、すべて思ひさいふ語を、かされて一首をなせり、この例標注にあげたり、●さいひつゝなん云々、こはすぎにしことを、思ひかなしめる心をふくめて、さゝめたるなり、

●雨ふらすは、雨のふるべきそらのけしきにて、雨ふらざるをいふ、　季吟云、貫之の子に時文さてありしは、梨壺の五人のうちなり、もしこれを文時さかけるにや、但諸本かくのごとくなれば、今あらためがたく侍り、又紀氏の頃に、官三品を文時さいひ、平維蔭なぞ侍りしにや、この人々にてはいかでかあらん、たゞ紀氏類船の人々なるべし云々、開書云、文時、維蔭二人ながら、貫之の下司なるべし、鳴津はすなはち、大湊なり、

十二日、あめふらず。文時、維茂が、舟のおくれたりし、鳴津ならしつより、

むろつにつきぬ。

十三日、あかつきに、いさゝか雨ふる。ゆあみなどせんとて、あたりのよろしき所に、おりてゆく。海を見やれば。

雲もみな波とぞ見ゆるあまもかないづれかうみととひてまるべく」

となん歌よめる。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。ふねにのりそめし日より、舟にはくれなゐ、こくよきゝぬきず。それは海の神にりさなんいふ、

世の中の歌　後撰雑一、兼輔朝臣、人のおやの心はやみにあられども子を思ふ道にまどひぬるかな」全歌一「よみ人しらず、思ふ人おもはぬ人をおもふ人おもはざらなん思ひしるべく」躬恒集、おもへどもおもはぬ思ふさき思ふ人をやおもはざりけん」[正]思ひあれども定本、抄本思ひやあれどもさやきぬなりさあり、今定本、別本、諸本による、

つきぬ　[正]原本、きね、妙本

文時維茂　[抬]此の二人、詳ならず、注の説もおだやかならねこゝにちす、

いさゝか　[正]定本、抄本いさゝかにさあり、

ゆあみせんとて云々、　古今離別云、源のさねが、つくしへゆあみんとて、まかりける時に云々、貫洲云、舟よりおりて陸にのぼりてゆくこと、むろ津のあたりの津にて人の家ありてゆあみなどすべき所と見ゆ、

雲もみなの歌　新拾遺秋上、刑部頼輔、わたのはらさはに路はそらさひとつにてくものなみよりいづる月かげ」新後拾遺秋上、よみ人しらず、水やそらそらや

おぢて、といひて、何のあしかげにことづけて、ほやのつまの、いずしあはびをぞ、心にもあらぬ、はぎにもあげて、見せける。

●あたりは、ほとり、かたはらなど、いふにおなじ、●よろしき所は舟よりおりたらんに、たよりよろしき所を、いふなるべし、●歟もみな云々、この獣の心あきらけし、原本いづれか海さふて志ろべくとあれど、誤なること明らかなれば、爲家卿本、拾葉本、類從本、異本などによりてあらたむ、●舟にはくれなゐこくゝぬきすゝみの神におぢてきざるなるべし、こは海神といふもの、物めでするものゝよしなれば、くれなゐこくゝぬきすゝみの神とは、海神におぢてといひて云々、さてこの文、原本海の神におぢてもいみてもあれど、誤なる事まるければ、定家卿本、拾葉本、類從本、異本などによりてあらたむ、●何のあしかけにことづけて云々、こゝより下、すべて誤字脫文ありとおぼしくて、こゝろえがたし、契沖阿閇梨も、古今餘材抄に、こゝの文を引てこの一段すべて心得がたしといはれつるがごとく、おなじく心得がたしといはれつるがごとく、いかにも心得がたし、されど諸家の說をも、標注にあげたれば、見ん人心のひかんかたにまたがふべし、さてこの諸家の說、いづれものこる所なく、分明なりともいひがたし、いま予が說をも下にあげたり、こはよしとも思はれざれど、たゞ志ひてこゝろみにいへるのみなり、さて何のあしかげにことづけて云々、とある何は、河の誤にて、あしかけは、季吟の說のごとく、蓋脫ならん、ことづけはかこつけてといはんがごとし、そもゝゝこの日記はじめより、こゝろを以て女の心をも、かくして女のかけるおもむきにて見るべし、はじめゆあみんとて、陸にのぼりゆきて、さてかへさに、海よりわかれいりたる、河の蓋脫によれば、すべてのかたもあらほにもみえわれに、それにかこつけて、衣をはぎまでかけて水のほとりまでおりたちて、舟の中の人に、ほやのつまのいずしあはびなどを、見せけるなるべし、すべを用意志たるさま、女の心さもあるべし、ほやのつまのいずしは、眞淵の說のごとく、式に貽貝保夜交鮨とあるこれなるべし、つまは妻の義にあらず、交をいふなるべし、すべて物に物をかて交へるをつまにするといへるがごとし、いずしは、貽貝鮨にて、保夜をつまにしたる貽貝鮨なるべし、さてこは志ひてこゝろみにいへるのみ、すべて古書には、わきまへがたき事どもおほかるを、志ひていひとかんとすれば、ひがごとどもいでくるものなれば、かくいへるも、おほくはひがごとなるべし、くれ〳〵もこの一章、心得がたし、猶ふかく考ふべし、又考ふるに、この原本と附注本と、異本とのみに、はぎにもとありて、諸本には、はぎにもの、もの字なし、はぎにもとする時は、あげての、でもよをにこゝろべき歟、この、てもよをにこゝろべき歟、この、てもの字をにごる時は、心うらうへにかはりて、はぎにあげずに見せけるといふ意になれり、しかし見る時は、まへよりのつゞきがらいかゞあしゝ、されば、もの字は、衍字にもやあらん、またはもの字に、こゝろなしと見てもありぬべし、

水さも見えあかすかよひてすめる秋のよの月」

舟にのりそめし　〔正〕定本、抄本のりはじめし一本のりていでそめしとあり、

舟にはくれなゐよきゝぬきすゝみ云々、源氏須磨云、海の中のうわう、いたうものめでするものにて云々、河海抄卷六、引作手丸記云、大夫於途中、爲龍神被取、端正美麗之故也云々、太平記卷十八云、是の如何樣龍神ノ財寶ニ目ヲ掛ラレタリト覺ユルソ、何ナモ皆海底ヘ入ヨトテ、弓矢、太刀、刀鎧、腹卷ノ類ヲ殘ク投入ケレモ、渦ノ卷ヿ尙止ズ、扨ハ若色アル衣裝ニヤ、目ヲ見入タルラントテ云々、西陽雜俎卷十四云、姤婦津相傳言、有婦人渡此津者、皆理衣枉粧然後敢濟、不爾風波暴發云々、後漢六帖卷十八、引四域記云、始黑國有清海、周千餘里、味苦魚龍変集、無敢取者、其國行人、不得綵衣高聲、災颶立至、行旅咸知云々、和名抄鬼神部云、海神文選海賦云、海童即海神也、日本紀云、海神（和名和太豆美乃加美）眞淵云、國を立しよりこゝまでは、船にのみ在しが、こゝにしてはじめて、陸におりたちて、湯あみせんとて、人の家にゆくに、衣のあしきを思ひて、それをことわるさまにかける、げに女の心、さるべき事になん、いひてといふ詞は、おりてゆくといふへ、立かへりてきく意ざまに、〔增〕眞淵翁の說は、いかがと、こゝは海の神におぢてといひて、船にのりそめし日より、船には紅こく、よきゝぬはきす、といふ意と、いひてといふ詞は、舟にのりそめしといふへ、かへりてきくべし、

○何のあしかげにことづけて云々　闇書云、何のあしかげにことづけてとは、あしかげは、惡しき氣といふ心と、一說に、蓋脫とかくともいへり、あしかげとつゞけたるは、何のあしげなる事あらんといふ義と、よき衣きぬを、大事もなきことよといへり、ほやは、穢屋と、蓋を蒸ながらふきたるいやしき家をいふ、つまは、家のつまと、則ひさしなどの事をいへり、いずしは、飯鮨にしたる鮨と、はぎにもあげて見せけるは、歷をかゝげて見するとと、さて本文の心は、湯に入に女どもの上る里は、いつたなげなる故に、貽貝之心にもあらねど、歷をかゝげて女どもに見せて、かやうにもてなすべきぞといへる詞と、季吟云、この一段幾分明ならず、何のあしかげとは、蓋脫といふべきを、ふさわしからぬ事と、ほやのつまのいずしとは、穢屋の妻の蠣蛸鮨と、和名の貝類にいはく、蠣蛸（和名、加）其貌似蛸而大者也、うみべなる蓋の穢にてふける屋の、はしつかたにあるものどもをいふと、又一說に、保夜交鮨といふもの、延喜式に侍り、然れども舉者のこのむ所にまたがふべし、すしあはびは、鮨鰒と、師說には、いずしと侍るものを押て、ほやのつますしと落着せん事、いかゞと思ひて、心にもあらぬとは、本意ならぬ事と、いせ物語に、心にもあらで絕たる人といへる同じ心と、はぎにあげてとは、歷をあらはにかきあげて、磯邊などにおりたちゆくさまと、古今に、いつしかさまたく心をはぎにあけてといへる、此哥のはぎにあげては、袴のすそなどくりあげしていへる、さて此日記の心は、かのゆあみしに磯邊にゆきて、枯のこりたる蓋のかげなどにかくれて、かの着物など心にもあらず、はぎあらはにかきあけ、おりたちゆきて、人々に見せたるとにや、さして興なきものなれば、或說になにやらのみかげによらんとてといふ意なるを、海邊なれば、あしかげとつゞけたるは、君がみかげにますかげはなし、などいふに同じ、ほやは、延喜式に參河國保夜一斛とあるにてあきらか、穢屋とては何ともきこえず、いずしは、延喜式上云、五雜俎に、海鼠一名海男子北狄如男子勢然淡菜之對也と見え、余曇日疏に、文蛤似女陰と見ゆ、文蛤も淡菜と、いがひをいふ、又東海婦人の名あり、海錯錄に、誰謂之東海婦人耶、當謂四施不潔といへり、されば陰陽の形に似たるをもて、妻とはたはぶれいへるなるべし、宣長云、肥前國佐伯の海に、ほやといふ物あり、紫色にて海嵐の如くなる形したるもの之、さ佐伯の人がたれり、然らば、ほやのいずしとあるは、それを飯鮨にまたるなるべしとある人いへり、又云、はぎにあげては、人に物をかくとあらはしみするを、古の語にはぎにあぐといふ事のありしなるべし、延喜主計式上云、貽貝保夜交鮨云々、同内膳式云、參河國保夜一斛云々、同齋宮式云、鮨鰒二石云々、同主計式上云、鰒鰒貽貝蜜那交鮨各四十六斤云々、和名抄魚貝類云、老海鼠漢語抄云、老海鼠（保夜俗用此保夜二字）又云、貽貝爾雅注云、貽貝一名黑貝（和名伊加比）云々、古今、俳諧、藤原兼輔、いつしかさまたくこゝろをはぎにあげてきつるに云々、〔增〕黒川翁云、こは湯あみのさまをいへるに、何のあしかけ、海邊の蓋陰にいひかけたるに（俗に、何ノカマウコトハナイ）と（あしかけ、海邊の蓋陰にいひかけたるに）ほぼ同じ、故にこゝも男陰をほやといひたるに、つまは妻といふにあらず、俗にトリアハセといふ義と、いずしは、貽貝の鮨をいふ、貽貝は、注にも見えたり、淡菜又東海婦人といへる具にて、其形女陰に似たり、故にこゝも出意にて、女陰をいひたるに、其意にて女陰をいひたるに、但し、貽貝と鰒とは、老若をわけていへるなるべし、すべて此の一條は、戯文にて其の意は、海邊の蓋陰にて、男女共に裸体になりて、湯あみしたりといふ意と、〔正〕はぎにも定本、抄本、別本もの字なし、

十四日、あかつきより雨ふれば、おなじ所にとまれり。舟君せちみす、節忌

凡月六齋日公私皆斷殺生（訓六齋日八日十四日十五日廿三日廿九日三十日）季吟云、こゝに正

月、五月、九月は、年三ゝて持戒精進して、一切の罪を消滅すべきよし佛書に侍り、　多武峯少將物語云、こゝかしこより、なかしきさうとものまゐらせたるは、ときゝ〳〵參りおく云々、源氏若菜上云、御あるとのこと、さうとく物にてうるはしからず、なまめかしくせさせ給へり云々、[正]せちみ爲本せちいみとあり、

うまの時　[正]抄本のもとなし、

おちくれぬ　[增]おちられぬさは、精進落をいたりさいふこゝろ、精進落とは、精進をして、すみたる後改めて、わざと魚類を人々の喰ふことゝ、

おほくありぬ　[正]定本、抄本なほありぬさあり、だのはらよせくる涙のまばゝもみまくのほしき玉つしまかも」[正]まばゝ定本、抄本、館本などくるとある方よろしけれは、本文はなどに改つれど、さては原本の標注にあほれば、見出しは、元のまゝにまばゝとすべし、

あづきかゆ　延喜主水司式云、正月十五日、供御七種、粥料、米一斗五升、粟、黍子、薥子、豆子、胡麻子、小豆、各五升、搗四升云々、

拾芥抄引世風記云、正月十五日亥時、煮小豆粥、爲天狗祭庭中、案上即其粥凝時、向東方呼耶長脆服之、終年無疫氣、　公事根源獻御粥條云、寛平のころより年毎にこれを奉ると云々、　荊楚歲時記云、正月十五日、作豆糜、加油膏其上、以祠門戸、先以楊枝挿門、題楊枝所指、仍以酒脯飯食及豆粥、挿箸而祭之、　續齊諧記云、吳縣張成、夜起忽見一婦人立於宅上、南角安手招成、成就之、婦人曰、此地是君家舊宅、我即是此地之神、明年正月中、宜作白粥沙弥於上祭我也、必當令君舊染百倍貲絹失之、成如貲、作弥糜、自此後大得舊、今正月中、作白弥粥自此始也、

行にて、舟の水あさき所にゐて、うごかぬをしひてやる意なり、　和名抄に說文云、纁(子紅反俗云爲流)船著沙不行也とあるにてしるべし、下文に舟を引つゝのほれども、川の水なければ、ねざりにのみぞ、ねざるとあるに同じ、にいへるが如く、ねるさこそいへ、ねざるさいひしこといまだみず、今按に、この說、誤れり、舟の水あさき所にて、うごかぬをば、和名抄さへていへるなり、さてねざるほどゝはいへり、ほどゝいふに心をつくべし、下文二月九日の條に、川の水なければ、ねざりにのみぞねざるとあるには、川の水なくして舟の滕行するごとく、さくもゆかざるなり、

○猶日の　[正]爲本けふの日のさあり、

○ねざる　以呂波字類抄云、滕行(#ザル)　蹟人云、ねざるは、艤○日をふれば　[正]原本日をおくればさあり、今定本、抄本、黑本による、

○たてばたち　[正]別本、抄本たてばたつさあり、

○いふかひなき　源氏若紫云、月ひとつをたのもし人に、する人なん侍れど、いさまだいふかひなきほどにて云々、　[增]いふかひなきものさは、俗にナンデモナイモノといふにおなじ、　[正]爲本いさの二字なし、

正月十五日、小豆粥の事は、標注にくはし、さて舟中なれば、物ごと不自由にて、正月十五日なれども、小豆粥をも爲ぬがくちをしきなり、くちをしくおもふさいふやうに、くちをしくの、く文字に意をふくめてさめたるなり、

圖をつけてきくべし、●猶日のあしければは、日よりのあしくして、波風たち、雨ふりなどして、ほどふるをいへり、●ねざるほどにぞ云々、ねざるは、滕行にて、舟の水あさき所などにて、うごかざるをいへり、●けふ廿日あまりさは、去年十二月廿一日にかどでして、今日は正月十五日なれば、前後廿日あまりさはいへり、かくいたづらにのみ、日をおくれば、人々うみつかれて、海のおもてなどを、うちながめて、ゐたるなるべし、●風のたちいろにふたかひて、波もたちぬすれば、ふく風と波とは、おもふごとならんさはいへり、さてこの哥もいたづらに、日をおくるに、あまりのことに、うみつかれて、ふく風と波とは思ふごとならんささへいへり、

精進　さうじ物なければ、うまの時より後に、かぢとりの、きのふつりたりし鯛に、錢なければ、よねをとりかけて、おちられぬ。かゝること、おほくありぬ。かぢとり、また鯛もてきたり、よね、さけなどくる。かぢとり、けしきあしからず。

●舟君は、船中の主君さいふ心なるべし、紀氏みづからを、例のよそ人のやうに、いへるなり、●せちみす云々、明書云、せちみすとは、けふ十四日にて、六齋日なれば、精進潔齋するをいふなり、せちみ、節忌とかく、下の二月八日の段にも、せちみすれば、魚もちひずさあり、十四日、八日、いづれも六齋日のうちなり、●さうとく物は、精進物なり、船中なれば、物不自由にて、さるべき精進ものもなければ、午の時より後に、精進をおちられぬさなり、●よねさけさは、きのふかぢとりのつりし鯛に、あたへの錢なければ、米をつかはして、精進をおちさせしさあり、●よねさけさは、ばゝ〳〵くるる云々、さばゝ〳〵さよめるがごとく、よねさけなど數々かぢとりにあたふるなり、數々あたへたれば、甚けしきよしとなり、

万葉十、息經音難忘人見多社吹風有數々應相物」　古今雜上、よみ人しらず、わたつみのおきつ白浪たちくらし雪もふりきぬ白妙のまつ

十五日、けふあづきかゆにず。くちをしく、猶日のあしければ、ねざる　滕行

ほどにぞ、けふ廿日あまりへぬる。いたづらに、日をふれば、人々海をながめつゝぞ、ある。ののわらはのいへる。

たてばたちゐればまたゐるふく風と波とはおもふごとにやあるらん」いふかひなきものゝいへるには、いとにつかはし。

十六日、風なみやまねば、猶おなじ所にとまれり。たゞ海に波なくして、いつしか、みさきといふ所わたらんとのみなんおもふを、風なみともにやむべくもあらず。ある人の、このなみたつを見て、よめるうた。

霜だにもおかぬかたとぞいふなれど波の中にはゆきぞふりける」

さて舟にのりし日よりけふまでに、廿日あまり五日になりにけり。

十七日、くもれるくもなくなりて、あかつきづくよ、いとおもしろければ、舟をいだしてこぎゆく。このあひだに、雲のうへも、海のそこも、おなじごとくになんありける。うべも、むかしのをのこは、さを(楫)

●みさきは、混淵の説のごとく、いまだ安藝郡のうちなるべし、海に風なみなくして、いつしかみさきといふ所をさほりすぎんと、まちごほにおもふこゝろなり、かくおもへども、風なみさもに、やむべくもあらすさなり、●霜たにも云々南海には、霜だにもおかずとはきけど、波の中には、四のふれるやうにみゆさなり、波のふるきを、四になしていへり、●十二月廿一日より、正月十六日まで、廿五日なり、十二月小の月なればなり、かく日々に日をかぞへ見るなど、すべて風なみにさへられて、いたづらに日をおくるに、うみつかれたる、さまあらはれたり、下文にも、日をかぞへたる所見えたり、

猶おなじ所 [増]猶室津にさまれりとなり、たゞ海に [正]定本、抄本、海のさまあれと取らず、みさき 混淵云、みさきは、御崎なり、安藝郡室津の崎なり、[正]抄本深崎に作れど取らず、わたらんとのみなん云々 [正]定本、抄本なんの二字なし、又おもふを定本、抄本、な文字なし、今諸本に依て改めつ、風なみともに [正]定本、扶本、井抄には、風なみさにとあり、又一本さみにさあれど、今は取らず、よめるうた [正]一本、うたの二字なし、今あるによる、霜たにもの歌 拾遺愚草「霜おかぬみなみのうみのはまびさしひさしくなりぬ秋のゝちきく」白氏文集巻十六云、誰言南國無霜雪、盛在愁人鬢髮間、けふまでに [正]一本、けふまではさあり、くもれるくもなくなりて 扶本くもなくてさあれど取らず、あかつきづくよいとおもしろければ 万葉十「四具禮等暁月夜紐不解懐君跡居益物」 公任卿集云、あかつきづくよにいしやまより出たまふとて眺のあなた

にて月のいらぬさきにうたひとつさのたまひければ云々、狭衣物語二下云、あかつきづくよのさやかなるにかみぎぬのいとうすきにまげさせいふものをきて云々、[正]扶本、抄いともさあり、

こきゆく　[正]原本すきゆくとあれど、今定本、扶本、群本、證本、黒本、抄本に從ひて改めつ、

海のそこも　[正]一本なみのそこことあれど取らず、

むかしのなのこ　[正]爲本をとことあり、

さんはうがつ云々　流隧叢話前集巻十九引今是堂手錄云高麗使過海有詩云水島浮還沒山雲斷又連時賈島詩爲楫人聯下句云棹穿波底月杜陵水中天麗使嘉歎久之自此不復言詩云々

きゝさしに　[正]妙本、群本、聞去とあり、又抄別本きゝされとあれど、ともに取らず、[增]凡てさしといふは、その事を半途にしてさしおくことなり、こは例の女の筆に擬せし故に、漢文の故事などのことはわざとおほめかしてかくいへるなり、

またある人のよめる　[正]群本よめるの下歌の字あれど取らず、

みなそこの歌　古今秋上、たゞみれ、「久かたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらん」　初學記巻一、引隋薛安天論云、俗傳月中仙人桂樹、今視其初生、見仙人之足漸已成形、桂樹後生云々、　詞林采葉抄、引姫名苑云、月中桂長二百五十丈、月輪内有之、下有河、此水秋花開云々、　酉陽雜

穿　波　上　月　船　聚　海　中　天

はうがつ、波のうへの月を、ふねはおそふ、うみのうちのそらを、とはいひけん。きゝさしにきけるなり。またある人のよめる。

みなそこの月のうへよりこぐふねのさをにさはるはかつらなるらん

「これをきゝて、ある人のまたよめる。

かげ見れば波のそこなるひさかたのそらこぎわたるわれぞわびしき」かくいふあひだに、夜やうやくあけゆくに、かぢとりら、くろきくもにはかにいできぬ。風もふきぬべし。みふねかへしてんといひてかへる。このあひだに雨ふりぬ、いとわびし。

●あかつきづくよは、暁の月夜なり、●むかしのなのこは云々、この句を、原本文字にて、棹穿波上月舟聚海中天とかきたれど、今は諸本によりて、假名にあらたむ、さてこの聯句は、流隧叢話に出たれど、文字いさゝかはれり、●さをはうがつ、波のうへの月を、ふねはおそふ、うみのうちのそらをけるなり云々、この全文さきくも、いへるがごとく、すべて女になりてかゝれしかば、かく漢土の故事などいへるは、ほこりかなるゆゑに、わざとほこりかならずして、こゝはきゝさしたるなりと、ことわれる意なり、この文、原本、抄ともにきゝされにきけるなりとかなれば、今は爲家卿本、附注本、などにきゝさしとあるによりて、あらたむ、●みなそこの云々、こは水にうつれる月の、うへよりさをさせば、棹に漾などさはりたらんを、月中の桂ならんさはいへり、月中の桂のことは、標注にあげたり、●かげ見れば云々、こは、そらさいはん枕詞のみ、●くろきくもは、もとの津へ、舟をこぎかへすなり、

みなそこの歌　古今秋上、たゞみれ、「久かたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらん」　初學記巻一、引隋薛安天論云、俗傳月中仙人桂樹、今視其初生、見仙人之足漸已成形、桂樹後生云々、　詞林采葉抄、引姫名苑云、月中桂長二百五十丈、月輪内有之、下有河、此水秋花開云々、　酉陽雜俎巻一云、酒言月中有桂、有蟾蜍、故異書云、月桂高五百丈、下有一人常研之、樵創随合、人姓吳名剛、西河人、學仙有過、謫令伐樹、釋氏書云、須彌山南面窮閻扶樹、月過樹影入月中、或云、月中蟾桂地影也、空隠水影也、此語差近云々、東坡全集巻三十三赤壁賦云、桂棹兮蘭槳擊空明兮泝流光、[正]

みなそこ一本波のそこ又なるらん定本、抄本なるべし扶本、群本なるらしさあり、

○かくいふあひだに　[正]附本一本、とかういふあひだにとあり、

資本、抄本、もゝとなし、今あるによる、　○ある人のまたよめる

のかへりしに、[正]定本、抄本、扶本、群本、舟かへるとあり、

くろしければなにごともおぼえず　[正]爲本、附本、くろしければをなごければに作る、又おぼえずを定本おもほえずに作れど、并に取らず、[增]こは唯船中が難儀なりとの意之、注いかゞ、

心やりにやあらん　万葉三「夜光玉跡言十方酒飲而精浮遊聞豊若目八方　新撰字鏡云、跳踉(遊意之貌、安心之貌、喜也、心與之、又心也留)後撰巻上、みつれ「春の野に心をだにもやらぬみは若菜はつまでやしをこそつめ」大和物語「かたなかにわらびもえずはたづれつゝ心やりにやわかなつまゝし」　會昌一品外集巻三方士論云、昔於便殿言及方士、皆語荒多端不可信也、上曰、宮中無非以此遊閑耳、李群玉詩集巻二云、短篇繼遊閑、李小醜不供愁、

いそぶりの歌　契沖云相摸風土記云、鎌倉郡見越崎、毎有逍遥、崩石、國人名號伊賀布利、訛振石也云々、　栄陵集、「いそぶりのさわぐ涙だにたかけれ」　万葉二十「於保吉美能美許等可古奈伊蘇布理宇乃波真和多流知々波々乎於伎夫」[正]いそぶり抄本、磯振とし

きた附本さしつきの又わかぬ一本ともらぬともあり、○つれにせぬ　[正]原本つれせぬともあり、今定本によりて改めつ、

またある人の　[正]原本、あるの二字なし、今一本、左本によ

十八日、なほおなじ所にあり。海あらければ舟いださず。このとまり、とほく見れども、ちかく見れども、いとおもしろし。かゝれどもくるしければ、なにごともおぼえず。男どちは、心やりにやあらん、からうたなどいふべし。舟もいださでいたづらなれば、ある人のよめる。

いそぶりのよするいそにはとしつきをいつともわかぬ雪のみぞふる」このうたは、つねにせぬ人のことなり。

●なほおなじ所にとまりにて、いまだ室津にありとなり、●くるしければ云々、こはいたづらに日をふるが、くるしきにや、舟牌などゝたまたるが、くるしき歟、万葉に思ひをやるといふこれなり、遣閑といふもこれなり、●心やりにやあらん云々、眞淵云、心やりは、思ひをやりうしなふをいふ、ふるゝをもて、やがていそぶりといひて、波の事とするなり云々、かくいはれつるごとく、いそぶりは、波のいそにより、さて一首の意は、磯にふるゝ波のよするごとく、いそぶりは、波のいへの哥はつれに、うたなどよまぬ人の、うたなりとなり、

また、あるひとのよめる。

りて補ひつ、

風による歌　眞淵云、なみのいそつゞけたるは、万葉にまら浪のいそ松がえをつゞけたる例に、［正］波のいそには一本いろとあり、

月ごろの　［正］一本、月日ごろとあり、

心やりに　［正］附本心やりとてたつなみをの歌　源氏橋姫云、さしごろよからぬ人の心をつけたりけるが、人なはかりこちてにしのうみのはてまでとりもてまかりにしかば、云々、後拾遺雑二、清少納言、よをこめて鳥のそら音ははかるともよにあふさかのせきはゆるさじ」新勅撰春上、登蓮好忠、まきもくのあなしのひばら春くれば花かゆきかさみゆるゆふしで」［正］三句ふくがぜぞ原本、ふくかぜにとあり、今抄本、定本による、

ある人のまたきゝて云々、　日本靈異記中巻云、貧（フケル）以呂波字類抄云、耽（フケル）貪（日）耽（仝）　新古今序云、みちにふける思ひふかくして後のあざけりをかへりみざるなるべし云々、　尚書無逸云、不啻小人之勞惟耽樂之從、傳云、過樂謂之耽［正］定本ある人きゝふけりてとあり、又よめる定本、扶本、抄本よめりとあり、

みそもじあまりなゝもじ　季吟云、歌の文字あまりするに節奏のならひとてうちとならふるに口にたまりてあしくきこゆるはきらふ事ゑ、文字あまりてもほどひやうしあしからぬやうによみ侍るとかや、歌林良材二條院讃岐「わだつうみのおきつしほあひにかづくあまのいきもつきあへず物をこそおもへ」とよめるは、句ごとにたゝすと申侍り、又京極黄門の未來記に「わすれぬらんうらめしさおもひおこせよ六字侍るをよからぬ跡の中にきつられ給へるに、いはんや三十七字をや、へがたかるべし　［正］定本、よみずゑ抄本よみすへ一本よみのへとあれど今原本のまゝとす、　○のちにはいかならん　［正］定本、扶本、抄本、けふだにかくとあれど共に取らず、　○けふだに　［正］定本、扶本、抄本、けふだにかくとあれど今按に、たつなみを云々の歌のまへの詞に、一本によりて思へば、をさしけるさあるは、さの字を脱せしにやともおもへど、たゞいたきに、そをなげりおどろかしめんとて、いつはりて、楫人となりぬて、旬の下をつけたれば、かの高麗使そのゝち詩をいはざるよし、漁隠叢話にも見えたり、これによりて思へば、貫島が楫人となりしがごと、はじめの波を雪にみなし、花にみなせし、哥などをなげりたるさをさしけるおきなさはかゝれつるか、さて哥にも、先の哥をなげりたるさをさをもむきあらはれて、ふく風によせつゝ人をはかるさはいへり、又こゝに、たゞさきの日の條に、ここさらに貫島が事を、かゝれつるにてもあるべし、【增】こは船中の主君さいふ意にて、官之みづからをいふなるべし、船長をいふに川眞頼篇はいへり、

十九日、日あしければ、ふねいださず。

●日あしければ、吉日にあられば云々、日よりのあしきをいへり、

廿日、きのふのやうなれば舟いださず。みな人々うれへ　なげく。くるしくこゝろもとなければ、たゞ日のへぬるかずを、けふいくか、廿

舟いださす　［正］爲本舟もいださすとあり、　［正］爲本くるしうさくるしくあり、

こゝろもさなければ　［增］こゝ

風による波のいそにはうぐひすも春もえ志らぬ花のみぞさく」このうたどもを、すこしよろしときゝて、舟のをさ志けるおきな、月ごろのなにかといふを、ある人のまたきゝて、ふけり（耽）たつなみをゆきか花かとふくかぜぞよせつゝ人をはかるべらなる」このうたどもを、人のなにかといふを、ある人のまたきゝて、ふけり（耽）てよめる。その哥、よめる文字、みそもじあまりなゝもじ、人みなえあらでわらふやうなり。哥ぬし、いとけしきあしくてゑまず、まねべどえまねばず、かけりとも（笑）、えよみあへがたかるべし、けふだにいひがたし。ましてのちにはいかならん。

●風による云々、風のなみをふきよするいそには、鶯もさらず、春もさらぬ、花のさくよさなり、さら波を花に見なしてよめり、●ふれのをさ志けるおきな云々、こは船中の主君さいふ心にて、紀氏みづからをいふ歟、又たゞ船長をいふ歟、いづれならん、さだめがたし、されど哥がらを見るに、紀氏みづからの哥なるべし、●たつなみを云々、眞淵云、はかるはたばかるさいふなり、人を欺くをいへり、はじめの二首のうち一首は、波を雪によせ、いま一首は、波を花に見なして、こゝには、よめるなり云々、この説のごとく、始の二首をうけて、こゝよするを、波のよするにかけていへり、またこの哥につきて、心みに云々、尚書無逸云、不啻小人之勞惟耽樂之從、傳云、過樂謂之耽［正］定本ある人きゝふけりてとあり、又よめる定本、扶本、抄本よめりとあり、

みそもじあまりなゝもじ　季吟云、歌の文字あまりするに節奏のならひとてうちとならふるに口にたまりてあしくきこゆるはきらふ事ゑ、文字あまりてもほどひやうしあしからぬやうによみ侍るとかや、歌林良材二條院讃岐「わだつうみのおきつしほあひにかづくあまのいきもつきあへず物をこそおもへ」とよめるは、句ごとにたゝすと申侍り、又京極黄門の未來記に「わすれぬらんうらめしさおもひおこせよ六字侍るをよからぬ跡の中にきつられ給へるに、いはんや三十七字をや、へがたかるべし　［正］定本、よみずゑ抄本よみすへ一本よみのへとあれど今原本のまゝとす、　○のちにはいかならん　［正］定本、扶本、抄本、けふだにかくとあれど共に取らず、　○けふだに　［正］定本、扶本、抄本、けふだにかくとあれど今按に、たつなみを云々の歌のまへの詞に、一本によりて思へば、をさしけるさあるは、さの字を脱せしにやともおもへど、たゞいたきに、そをなげりおどろかしめんとて、いつはりて、楫人となりぬて、旬の下をつけたれば、かの高麗使そのゝち詩をいはざるよし、漁隠叢話にも見えたり、これによりて思へば、貫島が楫人となりしがごと、はじめの波を雪にみなし、花にみなせし、哥などをなげりたるさをさしけるおきなさはかゝれつるか、さて哥にも、先の哥をなげりたるさをさをもむきあらはれて、ふく風によせつゝ人をはかるさはいへり、又こゝに、たゞさきの日の條に、ここさらに貫島が事を、かゝれつるにてもあるべし、【增】こは船中の主君さいふ意にて、官之みづからをいふなるべし、船長をいふに川眞頼篇はいへり、

十九日、日あしければ、ふねいださず。

●日あしければ、吉日にあられば云々、日よりのあしきをいへり、

廿日、きのふのやうなれば舟いださず。みな人々うれへ　なげく。くるしくこゝろもとなければ、たゞ日のへぬるかずを、けふいくか、廿

日、三十日、とかぞふれば、および指もそこなはれぬべし。よるはいもねず、いとわびし。廿日の夜の月いでにけり。山のはもなくて、海の中よりぞいでくる。かうやうなるを見てや、むかしの安部の仲麿といひける人は、もろこしにわたりてかへりきたる時に、舟にのるべき所にて、かの國人、うまのはなむけし、わかれを惜みて、かしこのからうたつくりなど惜みける。あかずやありけん、廿日の夜の月、いづるまでぞありける。その月は海よりぞいでける。それを見て、なかまろのぬし、わがくにはかゝる哥をなん、神代より神もよみたび、今は、かみなか下もの人も、かうやうにわかれを惜みて、よろこびもあり、かなしみもある時には、よむとて、よめりけるうた。

古今雑旅
あをうなばらふりさけ見れば春日なるみかさの山にいでし月かも」

とぞよめりける。

●くろしく心もとなければ、いたづらに日をへぬるが、くろしく心もとなきなり。●けふいくか、廿日、三十日、とかぞふれば云々、上文、十五日の條にも、廿日あまりへぬるといひ、十六日の條にも、廿日あまり、五日になりにけり、といへり、かくたびく、日をかぞふるなど、舟路に日かずをふれば、うみつかれたる心、尤おかるべし、かく、あまたの日かずをふれば、かぞふるに、およびもそこなはるべしとなり、日かずへし事を、つよく

いはんとて、およびもそこなはるべしといはれざれば、いとわびしとなり、●山のはもなくて云云、海上なれば、山の端もなくて、海の中より、月のいづるやうに見ゆるなり、かゝるけしきを見てや、仲麿呂のぬしの傳は、標注にひける外にも、もろこしにて、哥をよみけんとなり、●安部仲麿呂の傳は、標注にひける外にも、みえたれど、うるさければあげず、●舟にのるべき所にて云々、こは古今集の左注に、めいもうといふ所の、海邊にてとあれば、明州なるべし、明州のこと、標注にひけるがごとし、●かしこのからうたつくり云々、こはもろこし人も、送別の詩などつくれるをいふなるべし、もろこしの、仲麻呂におくれりし詩も、標注にいたせり、●その月は海よりぞいでける云々、その時の月も、ことにのごとく、海上よりいでにきとなり、わが國には、神代より神も哥をよみたまへりとなり、●神代より神もよみたび云々、わが國には、神代より神も哥をよみたまへりとなり、神詠の哥は、標注にあぐべけれど、すさのをの命の、やくもたつの御哥の事、またてるひめのあもなるやの哥の事などは、皆人もきりたる事なれば、こゝには志るさず、●あをうなばら云々、眞淵云、古今には、あまの原、青海原、ふたやうにいひつたへしなるべし、海上なれば、今は青海原のかたをさられしとおぼゆ、ふりさけの、ふりは、辭、さけは、見さけ、聞さけなどに同じく、はるかに見る意なり云々、猶この哥の事は、古今餘材抄、續万葉論などにもくはしくしげれど、事ながければ、こゝにのせず、本書につきて見るべし、さて、この哥をこゝにのするに、古哥なれば、文中にかきつくべき例なるを、諸本みな外の哥のなみにかきたり、又前後の書ぶりも、文中に古哥をかき入たる跡なられば、もとのまゝにて、おきつ、下文、二月九日の條に、業平朝臣の哥を、かき入たる所には、すでに文中にかきつけたり、そは前後の文も、古哥を文中にかきいるゝ跡なればなり、

○くろしけるあかずやありけん　○それをみて　○歌なし

[正]原本、いとわびし夜はいもねず又定本、抄本、夜の字なし、今爲本、證本、黒本によりて改めつ、

廿日の夜の月　[正]定本、抄本、夜の字なし、今あるによる、

かうやう　[正]定本、抄本かやうとあり、

安部の仲麿といひける人はもろこしにわたりて云々　綴日本紀第三十五云、寶亀十年五月丙寅、前學生安部朝臣仲麿、在唐而亡、家口偏乏、葬禮有闕、勅賜東絹一百疋、白綿三百屯、綴日本後紀第五云、承和三年五月戊申、詔贈曰、故留學問生、贈從二位安部朝臣仲滿、大唐光祿大夫右散騎常侍兼御史中丞、北海郡開國公、贈潞州大都督朝衡、可贈正二品、身涉險波、衆成畏角、聞喪變峻、學海揚波、國位斯昇、英傑已播、如何不悲、英遂（音歸、唯有桂天之章長傳鄉地之譽、追貢幽墟、既隆於前命、重叙崇班、尊榮於命詔云々、古今集目錄云、安部朝臣仲麿、中務大輔正五位上船守男、寶龜二年八月廿二日、爲遣唐學生留學生從四位上、安部朝臣仲麿、大唐光祿大夫散騎常侍兼御史中亟、北海郡開國公贈潞州大都督（中略）天暦五年正月薨、年七十三、

かへりきたる　[正]爲本、群本、かへりきけるとあり、

かの國人　[正]爲本、別本、かの國の人とあり、

かしこのからうた云々　舊唐書列傳卷一、百四十九上、東夷傳云、開元初又遣使來朝、因請儒士授經、詔四門助教趙玄默、就鴻臚寺教之、乃遣玄默闚幅布以爲束脩之禮、晁云、白龜元年、調布人亦疑其僞此歟、所得錫賚盡市文籍、泛海而還、其偏便朝臣仲滿、慕中國之風固留不去、改姓名爲朝衡、仕歷左補闕、儀王友衡留京師五十年、好書籍、放歸鄉還留不去、天寶十二年、又遣使貢上、元中謂衡爲左散騎常侍鎮南都護、王維集云、送秘書晁監還日本詩云、積水不可極、安知滄海東、九州何處遠、萬里若乘空、島中、別離方異域、音信若爲通、文苑英華卷二百九十六、朝衡衡命使本國詩云、衡命將辭國、非才忝侍臣、天中戀明主、海外憶慈親、伏奏違金闕、騑驂去王津、蓬萊鄉路遠、若木故園鄰、西望懷恩日、東歸感義辰、平生一寶劍、留贈結交人、又包佶送日本國聘賀使晁臣卿東歸詩云、上才生下國、東海是四鄰、九譯蕃君使、千年聖主臣、野情偏得禮、水性本含仁、帆乘風轉急、裝照地新、孤域開昏曙、曉日上東輪、早誤本朝歲、塗山五帛均、李太白集卷貳十五、哭晁卿衡詩云、日本晁卿辭帝都、征帆一片繞蓬壺、明月不歸沈碧海、白雲秋色滿蒼梧、元和郡縣圖志卷二十六云、明州開元二十六年、採訪使齊澣奏分越州之鄞縣、置明州以境内、四明山爲名、

○それをみて　[正]原本、その月もとあり、○歌なし

[正]黒本、歌なんとあり、今定本、黒本、證本、抄本によりて改めつ、

○神代よゝ神もよみたび　古今集序云、久堅のあめにしてはまたてるひめに、千早振神代には哥のもじもさだまらずすなほにしてことの心わきがたかりけらし、人の世となりて、すさのをのみことよりぞ、みそもじあまりひともじもよみける云々、

○よめりけるうた　[正]定本、抄本、かやうとあり、○あをうなばらの歌

[正]古今集には、あまのはらとあれど、今は原本に從ひつ、万葉七「春日在三笠乃山二月船出遊士之飲酒梅開隣所見雲、仝十「春日在三笠乃山樹月母

出奴可毋佐紀山樹開有櫻之花乃可見」全十八「都奇見禮婆於奈自久爾奈里夜烏許曾於母比都都」全十九「隔千里兮共明月」

かの國人云々　［正］原本、國の人とあり、しるまゝ原本しるまゝ又おもほえけれども原本おぼえたれどとあり、今定本、黒本、抄本、證本によりて改めつ、をとこもト　季吟云、をとこもトは、かなをんなもトといふに對して、まなを男文字といふこと、眞淵云、男文字女文字とて、古へ別なし、このごろいまやうのなだらかなる書樣のありしを、女もトとは、俗にいへりとみゆ、さて仲歷は、この歌を漢文に書て、見せける故に、よく通トたりといふのみ、通事のいふ事にあらず、

こゝのことばつたへたる人に云々、　漢書卷十九、百官公卿表云、典客秦官掌諸歸義蠻夷、有丞、景帝中六年、更名大行令、武帝大初元年、更名大行令、孟康曰、郊廟之禮、詹事主之、如淳曰、漢儀注、郊祭泰一五帝、則太祝令主讀祝文、文穎曰、祝官在前、祝文在後、師古曰、文穎說是也、大唐六典卷十八云、鴻臚卿之職掌、賓客及凶儀之事、領典客司儀二署以率其官屬而供其職務、少卿爲之貳、凡四方夷狄君長朝見者、辨其等位以賓待之云々、

ことばことなれど　［正］原本、ここととなるものなれどとあり、一本、ここやうなれどとあり、今抄本、證本によりて、改めつ、

かの國人、きゝおもほえけれども、ことの心を、をとこもじに、さまをかきいだして、こゝのことばつたへたる人に、いひおくせければ、こゝろをやきゝえたりけん。いとおもひのほかになんめでける。もろこしと、この國とは、ことばことなれど、人の心も、おなじことにやあらん。さて、今そのかみを思ひやりて、ある人の、よめる哥、

後撰羇旅
都にて山の端に見し月なれどうみよりいでゝうみにこそいれ」

●こゝのことばつたへたる人に云々、こは當朝にいふ通事なり、漢土には、鴻臚といへり、新唐書に、鴻臚寺教之とあるなど、こゝの文に、引合はせて考ふべし、鴻臚の事は、標注にひけるがごとし、●もろこしと、このくにとは云々、漢土と、こゝの國とは、人の言語などはちがへど、月のかげのおなじきがごとく、人の心も、同じきことなれば、思ひのほかに、この哥を感ぜりとなり、人の心も、さあるものを、原本、をとあれど、誤なる事、土佐やりて、さあるにふたつの意あるべし、ひとつには、都にて月など見たりしをりの、事など思ひいでしなるべし、さるの哥をよみし時の哥を思ひいでて、ふたつには、都にて月を見て、あをうなばら云々證には、歌にも、都にて山のはに見し月かげをこよひは涙のうへにこそみつ、と云々、一首の意は、都にありし時、山の端よりいでゝ、山のはにいるやうに、見えつる月なれども、こゝにては、涙よりいでゝ、涙にいるやうに、見ゆとなり、眞淵云、都にて、山のはに見しといふ所、三笠の山にいでし月かも、といふにあたれり、波よりいでゝ、波にこそいれと、いふは、青海原ふりさけ見れば、といふより出たり、

○さて　［正］一本、さてまたとあり　○都にての歌　後撰羇旅云、土佐より

廿一日、卯の時ばかりにふなです。みな人々の舟いづ。これを見れば、

春のうみに、秋のこのはしも、ちれるやうにぞありける。おぼろけの、

ねがひによりてにやあらん、風もふかず、よき日いできてこぎゆく。こ

のあひだに、つかはれんとて、つきてくるわらはあり。それがうたふ

ふなうた。

猶こそ國のかたは見やらるれわが父母ありとし思へばかへらや」

とうたふぞ、あはれなる。

●春の海に、秋のこのはしも、ちれるやうにぞ、有ける云々、こは、人々の舟のきそひ出るを、落葉の水にうかびたるがごとしとなり、さて、舟はもとより、落葉を見て作りそめたる物なる事、思ひ合すべし、季吟云、この歌ものしもは、助詞なり、舟を一葉ともいへり、●おぼろけは、眞淵の説のごとく、おぼろけならぬ意なり、そは標注にあげたるを見て、わきまふべし、季吟の説に、おぼろけは、おぼかたなり、おぼかたのれがひにてやは、かやうのよき日は、あらんとのこゝろにや、といへるは誤れり、●なほこそ國のかたは云々、このうたは、意明らけし、かへらやは、さきの舟歌にも見えたり、●とうたふぞあはれなる云々、このさもトを、原本に脱せり、今は諸本によりてくはへつ、

かくいへるは、このころの俗語に、おぼろけならぬさいふへきを、ならぬをはぶきていへる俗語をもてかけりさみゆ、源氏物語にも、かくさまにいへることあり、凡俗語にいひなれし詞は、理なくはぶきてつかふ事多し、今もまかりける詞は、みやひ言にあらずさまりてわきまふべし、或説に、やはさみよさいへど、まかみるときは、あらんの詞おちぬず、[増]黒川説類云、おぼろけのれかひは、大きなる願にて、大願の意ん、○うたふふなうたくろとり　和名抄羽族部云、鵐(漢語抄云、久呂止里)黒色水鳥也、十六夜日記云、ろき洲さきに、くろきとりのむれゐたるは、鵐といふとりなりけり云々、いはほ　[正]定本、抄本、いはほと有、

○[正]ゐなゝそぢ　[正]定本、抄本、くろとり　[正]定本、別本、抄本、くろきとりとあり、

よすさぞいふこのことば云々　[正]よすさぞ別本、抄本よするとぞとあり何とにはなけれど、抄本なけれど原本何とにはなけれど、今為本、附本、黒本、譜本によりて改めつ、

ものいふやうにぞきこえたる　季吟云、ものいふやうにては、秀句など作意ありて、いふやうなるとこそ、眞淵云、ものいふやうにては、詞をあやにいふやうなるとこそ、[正]きこえたる為本、附本、きこゆるとあり、

さかむるなり　古事記云、天照大御神者登賀米受而曾、万葉四「足引乃山二四居者風流無二等爲類和射乎等賀月鷄名、以呂波字類抄云、曾トカム尤同、後撰春上、よみ人しらす「うめの花よそながらみんわきもこがそでかもにほふ」

かくはさがむるなり、さがむは、尤咎の字などを訓ぜり、こゝは物をあやしめうるこゝろなり、玉かいふ證は、標注にあげたり、●舟君なる人云々、こは紀氏みづからをいふなるべし、●波を見て云々、眞淵云、波を見ては、下に佐より舟出して、波を見るよりはやくこの氣のありし、云々、かいぞくは、海賊なり、むくいせんとは、すべてあだを報ずるをいへり、そは標注にひける證を見てもしるべし、こは、紀氏任國のあひだ、海賊など、かならめしことなどのありしが、今この海路にて、あたを報ぜんとて、おひきたるよしなどきゝて、そをおそるゝさまにかけるは、みづからを女になしてかける故なり、この一章、季吟の説、いたがへり、そは抄をひらき見て玉ふるべし、●かしらもみなしらけぬなゝそぢやそぢは海にあるものなりけり云々、海賊と、海上さのおそろしさに、いたく辛勞玉たれば、かしらも白髪になれりさなり、さて、七八十年のおいの、一時にわかみにきたりしやうに思ふさなり、されば、なゝそぢ、やそぢとは、海にあるものなりけりさはいへり、すべて、人いたく勞すれば、白髪になるさいへり、その證は、標注にあげたり、●わがかみと云々、この歌、意明らけし、いづれまされりおきつしまもりと、島守へさひかくろ髪なり、さて、かぢさりもいへさ、かぢさりへもさひかくろ髪と、おきつ島守かぢさりいへさ歌より文へつづけて心得べし、原本、おきつ島守と、かぢさりいへりさあれど、誤なる事まろければ、定家卿本、拾葉本、異本などによりてあらたむ、

海のまた　[正]為本、なみのまたもさとあり、○かしらもみなしらけぬ　十訓抄下云、顯光左大臣は、小一條院の女御あらそひによりて、御堂關白を恨み奉りて、悪縁さなりて、一夜の内にこゝ〳〵く、白髪になり給ひけんこそ、いとおそろしけれ云々、漢書第五十四、蘇武傳云、武留匈奴凡十九年、始以壯出及還須髮皓白云々、南齊書第三十六、謝超宗傳云、武帝收謝超宗、付廷尉獄、一宿髮白云々、世説巧藝傳云、荀仲將能書、魏明帝起殿欲安榜、使仲將登梯題之、既下頭髮皓然因數兒孫勿復學書、　季吟云、いづれまされりさは、いづれかまされりけんと含めたるてにをはにて、いづれもまされりとにはあらず、○ないそぢやそぢ　[正]別本、七十年八十年さあり、○わがかみの　よめるたぐひおほく侍り、玉まもりは、たゞ島を守護するものゝ、かぢさりいへさは、かの白髪さしも悪さの勝劣を島守に問ひかけて、又掲取もこのおりまさりをいへるいひつゞけしにや、　眞淵云、万葉四に「八百日ゆく濱のまさごもわがこひにあにまさらめやおきつしまもり」この歌を思ひてよみたるにや、[正]わがゝみの別本、我身の為本わがゝみさあり、●かぢさりいへりさあり、今は取らず、

夜べ　[正]定本、抄本、よんべさあり、

おひてぞゆく　[正]原本おひてゆく定本、抄本、おひゆくさあり、今群本、頭本による、

さし　[正]一本よはひさあり、

なのわらは　以呂波字類抄云、童(ナノワラベ)

廿二日、夜べのとまりより、こと〳〵まりをおひてぞゆく。はるかに山見ゆ。としこ〳〵のつばかりなるをのわらは、としよりはをさなくぞある。このわらは、舟をこぐまに〳〵、山もゆくと見ゆるを見て、あや

しきうたをぞよめる。そのうた。

こぎてゆく舟にて見ればあしびきの山さへゆくを松はきらすや」。

をぞいへる。をさなきわらはの事にては、につかはし、けふ海あらけ、

磯にゆきふり、なみの花さけり。ある人のよめる。

波とのみひとへにきけどいろ見ればゆきとはなとにまかひぬるか

な」

●ここゝまりは、外の泊なり、昨夜のとまりより、外のとまりをおふなり、●をのわらはは、男のわらはなり、さきに女のわらはといふにむかへていまに〳〵山もゆくと見ゆるを云々、こは、舟をこぎてゆくまゝに、山もゆくやうに見ゆさなり、このことは標注にひけり。●あやしきことうたをぞよめる云々、眞淵云、あやしきことにて、句かきろべし、漢文の例、物語などに多し、九歳はかりなる、わらはのそのさしころよりは、をさなきうまれのものが、歌をよみたるは、あやしき事かなど、詞をあやにいへるなり、●こぎてゆく云々、こぎてゆく舟のうちにて見れば、山のゆくやうに見ゆるを、山のうへにたてる松は、山のゆくをばしらざるやさなり、●海あらけば、諸本に、海あらげにてさあり、あらけさの みあるは、この原本と爲家卿本と、別注本とのみなれど、この本のごとくあらけさのみあるをよしとす、さて、あらけたるいくさは、海のあるゝことにはあらず、古事記に、各退さあるを、あらけましゝと訓ひ、書紀に敗卒さあるを、あらけたるいくさとはいひしならん、宇鏡集以呂波字類抄などに、敗の字をあらくさと訓ぜるなど、をもて思へば、波などの敗るをあらけさとはいひしならん、波の敗る放に、磯にゆきふり、なみの花さけるやうに、見ゆさなり、海あらけのけもの、にごるべからず、海あらけ、磯にゆきふり、波の花さけりと、詞をかさねてかきたるも、一つの文勢なり、諸みなうみのあるゝことさすれど、實に海のあるゝにては、いかでかく歌をもよみ、波を雪花に見なしてたはふれかける事のあらん、これを見ても、實に海のあるゝには、あらざる事をきろべし、●波とのみ云々、こは波とのみたり、一樣にきゝつれど、色を見れば、雪や花にまがふさなり、まへに磯に雪ふり、波の花さけり、さあるも、このうたにかくいはんはかりなり、

廿三日、日てりてくもりぬ。このわたり、海賊のおそりありといへば、

かみほとけをいのる。

●朝のうち、きばし日てりて、またくもりぬるなり、おそりは、恐にて、りされを、かよはせたるのみ、このころおそりさのいへり、

廿四日、きのふのおなじところなり。

楫師

昨日のさまりさ、おなじ泊なるべし、きのふの條に、きろされねば、所の名はきられず、

廿五日、かぢとりらの、きたかぜあしといへば、舟いださず。海賊おひくといふこと、たえずきこゆ。

●おひくは、追來るなり、海賊のおひきたるよし、たえずきこゆるなり、

廿六日、まことにやあらん。かいぞくおふといへば、夜半ばかりより、舟をいだして、こぎくる、道にたむけする所あり。かぢとりのまうしてたてまつることは、このぬさのひんがしへちれば、かぜずみやかにこがしめたまへと、申してたてまつる。これをきゝて、あるわらはのよめる。

新千載羇旅
わだづみのちぶりのかみにたむけするぬさのおひかぜやまずふか
六帖四
なん」とそよめる。

まに〳〵山もゆくと云々　河社
引圖便經云、照映月遥舟行岸移云々、唐曹松詩云、掬水疑山動掛帆覺岸行、[正]まに〳〵定本、爲本、まいにとあり、

あやしきうたをぞよめるそのうた

[正]原本、こゝうたさあり、今一本、讀本によりて改めつ、そのうた爲本なし、あるによる、

こぎてゆく舟にての歌　[正]原本舟にしとあり、今定本、抄本によりて改めつ、

わらはの事にては　[正]爲本事の字なし、

海あらけ　古事記云、如此歌而明日各退云々、齊紀齊明紀云、各營一所誘聚敗卒云々、字鏡集云、敗(アラク)　[正]あらけ讀本、抄本あらけにてさあり、

波とのみの歌　古今秋下、文室康秀「くさも木もいろかはれぞもわたづみの波のはなにぞ秋なりける」[正]ひとへに一本ひとつにいろみれば一本いそみればさあり、まがひぬる抄本まがひけるとあり、

海賊のおそり　古今序云、秋のよのなかきをかこてればかつは人のみゝにおそりかつは歌の心にはちおもへど云々、後拾遺神祇「さかつきにさやけきかげのみえねればちりのおそりはあらじとぞ思ふ[正]原本海賊ののもじなし、今、黒本、讀本、別本、抄本、一本による、

きのふのおなじところ　[正]原本、きのふののもじなし、今定本、黒本、讀本、抄本による、

かぢとりらのきたかぜあしと

和名抄兵器類云、楫師、文選吳都賦云、櫓工楫師、和名(加知止利)[正]一本かぢとりらののもじなし、あし一本、別本、よからぬさあり、

おふさ　[正]定本、おひくさとあり、

夜半ばかりより　[正]定本よりの二字なし、又一本よりなにに作れり、

たむけ　万葉三「佐保過而寧樂乃手祭爾置者妹乎目不離相見染跡衣」同九海若之何神乎齊祈者歟往方毛來方毛舶之早飛」和名抄神靈部云、道神、和名(太無介乃加美)道上祭一云、道神也、訓源云、万葉に「船はつるつしまのわたりわた中にぬさとりむけてはやかへりこれ」ともいへり、いづくにても、たむけはするぞ、

ねさたてまつらするに　古事記云、更取國之大奴佐而（奴佐二字以音）清紀允恭紀云、玉田宿禰則是有事以馬一疋授吾襲爲禮幣云々、日本紀養疏云、幣謂幣帛也、皆手國産物云、以珠玉爲上幣、以布爲下幣、以黄金爲中幣、以刀布爲下幣、後撰離別云、あひ思りて侍りける人の、あづまのかたへ、まかりけるに、櫻の花のかたに、ぬさをなして、つかはしける、よみ人しらず、あだ人のたむけにぬれるさくら花あふさかまではちらやもあらなん」貫之集八云、ものへゆく人、つるのかたぬさにして、君がゆく旅路おくれぬあしたづはいのるこころのまろべなりけり」宣長云、ぬさは、神に手向る物をもいふ、名義は、麻布佐にて、事をこひねぐさて、いたすよしと、れぎふを、つどむれば、ぬさなるなり、麻の、ぬさも、その證驗を、のぞき消めたまへと、れぐ意も出すなれば、神に奉りて祈ぐと心ば（一つなり、さて佐布は、麻なり、古語拾遺に、好麻所生故謂之麻國、古語麻謂之檄也、今爲上總下總二國とあり、[正]たてまつらする原本、此所の三つのたてまつるを皆たいまつるとあれど、今黒本、讀本による、○がちどりの申して　[正]一本のもゝなし、又原本申してのてもゝなし、今定本、爲本による、

○みふれすみやかに　[正]爲本、すみやかにみふれとあり、○これをきゝてあるわらはの

のわらはとあり、　○わたつみのちぶりの歌　袖中抄第十九云、ゆくけふもかへらんときもたまぼこのちぶりの神をいのれとぞ思ふ」顯昭云、ちぶりの神は道祖の神なるべし、行道のほとりの神をいふ歟、又その神を思ひて、かの所にも、つけたるにや、これはあまりのことなり、[正]ちぶりのかみ　千載集、古今六帖ちひろのかみとあり、

●夜半ばかりは、よなかばかりとよむべし、すでに、類從本には、夜なかと假名をつけたるは、誤れり、●たむけする所あり云々、たむけはくがにても、舟路にても、道の神につゝがなからんやうにと、いのるをいへり、万葉に、祈の字、手祭などの字を、たむけとよめるがごとし、またり云々、眞淵云、ぬさは、古へは、その色々の絹布を尺ながら奉るゆゑに、万葉などには、幣にも、旅にも、ぬさとよめり、後には、旅には、ぬさは、幣をよめてゆくなり、●わたつみのちぶりの神に云々、ぬさのおひかぜは、今ちぶりのかみに奉るぬさの、ひんかしへちれば、京のかたへかへらんには、おひかぜなれば、かくはいへり、ちぶりの神は、袖中抄、眞淵などの既のごとく、道祖の神なり、猶くはしくは、標注に見えたり、猶又和訓栞にも出たれど、事なかければ、こゝにあけず、ひらき

このあひだに、かぜよければ、かぢとりいたくほこりて、ふねにほげよなどよろこぶ。そのおとをきゝて、わらはも、おむなも、いつしかとし思へばにやあらん、いたくよろこぶ。この中に、あはぢのたうめ

淡路

と、いふ人のよめるうた。

おひかぜのふきぬる時はゆくふねのほでうちてこそうれしかりけれ」とぞ、ていけのことに、つけていへる。

●そのおさをきゝて云々、帆をあぐる音なり、こゝに、そのおさをきゝて、とあるを後の歌のほでうちてといふへかけて聞べし、こゝに音といふより、ほでうちてとはいへり、わらはも、女も、とある女は、もとおんなもとありしな、心なく女と、文字には直して、かけるならん、こゝはわらはにむかへていへるなれば、おんなにて、爲をよめり、爲は、老女の事なり、さて、このおんなは、淡路のたうめとあると同人にや、●あはぢのたうめ云々、たうめの事は、上文正月九日の條にいへり、下文淡路の巨子とあると、同人なるべし、●おひかぜの云々、この歌意あきらけし、ほでは、諸説みな船の具に、帆手といふものゝ、あるやうに見ゆれど、實にさる具今もありや、物に見えたることなし、されば、楼するに、こは物をよろこぶさき、手などをうちて、よろこぶをほでうつといひしならん、さてそれに、船の帆をかけていへるにて、ゆく船の帆と帆の字一字にのみかゝりて、手までへは、かゝらざる調なるべし、枕詞などに、たゞ一字にのみかゝりて下なひつゞけたる例多し、てらし見てまろべし、●ていけのことにつけつゝいのる云々、ていけは、天氣なり、上に、てけさあるにおなじ、歌などよむにつけても、天氣のよかれかしと、いのるさの心なり、さればこそ、眞淵は、いへるとある本に、またがはれね、

讀本による、

おひかぜの歌　拾遺愚草中、やまひめのぬさのおひかぜふきさされちひろのうみに秋のもみぢば」新撰六帖四、光俊朝臣、なみたつるぬさのおひかぜはやければまかぢもげぬきわたるふなびと」季吟云、物をよろこぶさきは、手鼓などうつことを船の帆手をうつにそへてよめり、眞淵云、帆のよこ手に繩をおほくつけて右へ左へひらめんとする繩をほでといへり、物をよろこぶ時は、手つゞみなどうつを、舟の帆手を風にうたするにそへてよめるなり、谷川士清云、ほでゝ、船にいふは、船手之、荷舖ともいふ、[正]ふきぬる妙本ふきくるとあり、ゆくふねの定本、抄本舟もとあり、

とぞていけのことに云々　眞淵云、天氣のことにつけて、いへることの多かりしゆゑに、かく書るならん、さなくては、此の調益なし、[正]爲本そのことにとあり、つけていへる原本つけつゝいのるとあり、今定本、訓本、抄本、附本、一本による、

心なぐさめよ　[正]定本、此の六字なし、

日をのぞめば都とほし云々　晉書卷六、明帝紀云、明帝數歲、元帝抱置膝前、屬長安使來因問、汝爾日與長安孰遠、對曰長安近、不聞人從日邊來、居然可知也、元帝異之、明日宴群僚又問之、對曰日近、元帝失色曰、何乃異聞者之貧、對曰舉月則見日、不見長安、由是益奇之、

廿七日、かぜふきなみあらければ、舟いださず。これかれかしこくなげく。男たちの、心なぐさめに、からうたに、日をのぞめば都とほし、などいふなる、ことのさまをきゝて、ある女のよめるうた。

日をだにもあまくもちかく見るものを都へとおもふ道のはるけ

よめるうた　［正］挟本、うたの二字なし、

つまはじきをなして　宇津保藤原君云、いちめうちわらひて、つまはじきをして、きこゆ云々、蜻蛉日記云、いとかしこしとて、つまばじきうちして、ものもいはず云々、源氏空蟬云、かの人の心をつまはじきをしつゝ、うらみ給ふ云々、東鏡卷四云、彈指（ツマハジキ）梁書卷四十一、褚翔列傳云、翔少有孝性、爲侍中、時坻疾篤、捕沙門祈禱、中夜忽見戸外有異光、又聞空中彈指、及曉疾遂愈、或以翔誠精所致焉、

維摩經云、度百千劫猶如彈指、

あめやまず　［正］定本、抄本あめもさもとあり、

けさも　［增］今朝に至りても、猶ふるとなり、

ゆくに日うらゝ〳〵　万葉十九「宇其々々爾照流春日爾比娑理安我里情悲毛比登里志於母倍婆」春日遲々、鶯鳴正喈、悽悄惱惹、非歌酣耳、乃作此歌、式展紾綖、　江談抄卷四云、東行記行談抄々、二月三月日遲々、天神令教曰、トサマニユキカウサマニユキクモノハルノ〳〵キサラキヤヨヒウラ〳〵ト可詠云々、

毛詩豳風云、春日遲々采蘩祁祁、［正］原本ゆくうらゝこゝあり、

さ」又ある人のよめる。

ふくかぜのたえぬかぎりしたちくれは波路はいとゞはるけかりけり」日一日、かぜやまず、つまはじきをしてねぬ。

●かしこくなげく云々、かしこくは、古事記に、恐をよみ、舟組、万葉なさに、可畏憶などをもよみて、もさはおそるゝ意なれど、こゝには、いたくなどいふ所にもちひたり、●日をのそめは郡さほし云々、この詩の句は、舟中の人の作なるへし、されは、男たちの心なくさめにさはいへり、●日をたにも云々、この歌、意明らけし、晉の明帝の故事に似たり、そは標注にいひけるを、見てまるへし、●ふくかぜの云々、ふくかぜのたえずふくかぎりは、波路は、いとゞいつさなくはるけきやうに思はるさなり、●つまはじきは、ものをもたちやまれは、都へと思ふ波路はるけきのわざなり、漢土に、彈指さいへるものも、つまはじきのことなり、

太平記音義卷十一云、爪彈（ツマハジキ）［正］つまはじきを定本をもとなし、

廿八日、よもすがらあめやまず。けさも。

●終夜あめふりて、けさもやまざるなり、よもすがらは、廿七日の夜をいひ、けさもは、廿八日のあさなり、

廿九日、ふねいだしてゆくに、日うら〳〵とてりてこぎゆく。つめのいとながくなりにたるを見て、日をかぞふれば、けふは、子の日なりけれはきらず。むつきなれば、京の子の日のことといひいでゝ、小松もがなといへど、海なかなれは、かたしかし。ある女のかきて、いだせるうた。

六帖一

おぼつかなけふは子の日かあまならばうみまつをだにひかましものを」とそいへる。海にて、子の日のうたにては、いかゞあらん。

●うら〳〵とてりては、假名にて、うらゝなたりては、原本に、浦ゝとかきしより誤れるにて、甚しきにいよりてあらたむ、●子の日なりけれはきらず云々、すべて爪をきるには、日をさりてきるよし、ふるくよりいへり、けふは、子の日にて、爪をきる日にあらされば、きらざるなり、爪をきる日の事、標注にひけるかごとし、●子の日の事は、標注にくはし、さて、子の日は、當月五日、初子にて、十七日も中子なるを、何のさたもなくして、今こゝに、廿九日、おさ子にしもはじめて、松もわかなもいひしかも哥をさへよまれしは、いかなることにか、今考ふるに、五日は、風もやまず、人もおほくさふらひきたりて、物にまきれたるなるべし、又十七日は、くもれるくもらなくさいひ、哥どもゝみえたれど、子の日を思ひ出、子の日を思ひ出しては、爪ののびたるにつけて、子の日の松もがなとは思へども、海上なれば、小松を得る事も、かたしさなり、●おぼつかなくさいひ、子の日の松もがなとは思へども、海上なれば、小松を得る事も、かたしさなり、●おぼつかなかなし、せめて海士ならば、松とてもいかゞあらん云々、伊勢物語の哥の後に、筆者の閑をそへて、あまれりや、たらずや、よしや、あしやなどいへるは、みなほめたる詞なり、こゝにもいかゞあらんさいひて、あしからじ、いひたることばなり、

て、にもとさも下もとなし、今一本、證本によりて加へつ、

つめのいとながく云々　簾中抄云、つめきる日、手の爪丑寅、足の爪寅午、日本紀纂疏上云、凡陰陽家丑日除手甲、寅日除足甲、爲吉、又云、寅日三戸於兩手指甲、午日三戸於兩足指甲云々、邇生八牖守庚申法云、甲寅日可割指甲、甲午日可割脚甲、［正］原本つめのゝもとなし、なりにたるを定本なるをさあり、

子の日なりければ云々　晉家文章卷六云、予亦晉朗子故老、曰上陽子日野遊厭老、其事如何、其說如何、俗松樹以釀腰、習風霜之雄犯也、和漢爰而吸日、期氣味之克調也云々、拾芥抄引十節記云、正月子日登岳何耶、傳云、正月子日登岳遠望四方、得陰陽靜氣除煩惱之術也云々、　許渾云、今日まで、日ごさに雨ふり風ふきて、たゞ日よりの事のみ思ひ、こゝろづかざりしに、けふうら〳〵さてれば、心ものごやかになりて、爪の長くなりたるに、心つぎし事さもあるべし、む月に子の日に、野遊に出て、小松引若菜つむさいふ事は、古はなし、今の都俗言には、さもあるべし、む月の初子の日は、にごるべしさいへり、三ばらく閑々わくるため、月七日を、子の日さだめて、若菜つみ、小松引事は、後のことゝみゆ、［正］なりければ定本、抄本なればさあり、

○子の日のこさいひいでゝ小松も　［正］一本子の日をおもひ出てさあり、小松定本、抄本小の字なし、

きて云々　［正］定本、抄本あるの二字なし、いだせる一本いだしたる

○ある女のか　狀如松而無葉（和名美流）楊氏漢語抄云、海松（和名同上俗用之）緩古今賀、墨慶法師「うごきなき岩ほにねざすうみ松のちさせをたれになみのよすらん」同廿六、夫木廿五、よみ人しらず、「なだのうらのみほになづさふうみ松をみぎはの浪ぞさしほこえける」同廿六、よみ人しらず、「はるかなる子の日を山すげのひきたるは、子の日に山すげを、てまさくりにして、「おぼつかなけふは子の日を山すげのひきたがへてもいのりつるかな」［正］だにひかましものを六帖しそひくべかりけるさあり、

またある人のよめるうた。

けふなれど若菜もつまずかすが野のわがこぎわたるうらになけれ

ば」かくいひつゝこぎゆく、おもおろき所に、舟をよせて、こゝやいづ

こととひければ、土佐のとまりとぞいひける。むかしとさといひける

所に、すみける女、このふねにまおれりけり。それがいひけらく、むか

しおばしありし所の、名たぐひにぞあなる。あはれといひて、よめる

うた。

としごろをすみし所の名にしおへばきよる波をもあはれとぞ見る」

●けふなれど云々、この歌うちつけにきけば、春日野に、沼のあるやうにきこゆれど、さにあらず、調をうちかへして、いまわがこぎわたる沼に、春日野のなけれども、わかなもつます、ときくべし、わかなの事は、七日の條にくはしければ、今日子の日なれども、わかなもつます、ときくべし、わかなのにすでに安藝郡の地名みえたるに、土佐郡土佐といふ所みえたれど、上土佐郡は、安藝郡より西のかたなれば、そこにはあるへからず、こは土佐の國の地圖もて、考へたるなり、土佐のとまりとぞ云々、こは紀氏みつからをいふなるへし、くはしくは、標注にわけたる、季吟かし土佐といひける所にすみける女云々、土佐といへる名のたぐひにて、こゝも土佐の泊といふとなり、の説に見えたり、なだやひは、むかしすみし所の、土佐といへる波は、きよする波といふにおなじ、名にしおへば、とあるを、●としごろを云々、この歌の意明らけし、名にしおはゞとすれど、誤なること明らかなれば、今は定家卿本、爲家卿本、拾穂本、群従本、などによりて原本名にしおはゞとすれど、誤なること明らかなれば、今は定家卿本、爲家卿本、拾穂本、群従本、などによりて あらたむ、

抄本、讀本による、それが定本、抄本此の三字なし、○名たぐひ 依留湯乎見者淨潮に「正」あはれとぞおもふとあり、とぞいへる原本此の四字なし、今妙本、爲本、群本、讀本によりて加へつ、

あめかぜふかず 「正」一本ならひとあり、○としごろなの歌 万葉七、住吉之奥津白波風吹者來

阿波のみさ 「正」爲本みなとあり、 「増」小杉榲邨云、阿波のみさは、鳴門の門すぢ、所謂下流にて今もみさといふ云々、

からく 万葉七、拳可之欲里伊比祁流非等乃可良久爾能可良久毛、已許爾和可可須留可聞」古今雑上、よみ人しらず「おしてるやなにはのみつにやくしほのからくもわれはおいにけるかな」

田無川 「正」一本無の字なし、見聞抄云、阿波のみさは、阿波の鳴門之、田無川とは、和泉之、拳吟云、沼島、淡路の海中にあり、太平記には、武島とあり、土佐泊より五里云々、たな川、和泉の田川にや、良潤云、万葉に、淡路の野島がさきよめり、

万葉三、人麿、三津崎浪矣恐隱江乃舟公宣奴島爾」

からくいそぎて 「正」定本、抄本かくいそぎてとあり、

かうふれる 「正」原本慍にとあり、宇鏡集云、慍(アハレム)今定本、讀本、抄本による、

世日あめかぜふかず。海賊は夜ありきせざなりと聞て、夜なかばかりに、舟をいだして、阿波の水門(ミナト)のみとをわたる。夜なかなれば、にしひんがしも見えず。をとこ、女、からく神ほとけをいのりて、このみとをわたりぬ。とらうの時ばかりに、奴島(メシマ)といふ所を過ぎて、田無川といふ所をわたる。和泉の灘といふ所にいたりぬ。けふ海に波に似たる物なし。神佛のめぐみ、かうぶれるに似たり。けふ、舟にのりし日より、かぞふれば、二十日(ハツカ)あまり九日になりにけり。いまはいづみのくにゝきぬれば、海賊ものならず。

●海賊は、夜あるきはせぬものぞと、聞て夜中に舟出してゆくなり、●阿波のみさは、阿波の水門にて、みなといふにおなじ、是阿波の鳴門をいへるなるべし、●からく神佛をいのりて云々、季吟の説に、辛勞の心なりといはれしはたがへり、こは万葉古今などに例あり、そは標注にひけるがごとし、からく神佛をいのりて、このみさをわたりぬと、あるを見ておもへば、阿波のみさとは、阿波の鳴門をいへるにや、このつぎに奴島さあるは、すでに淡路の國のわしまが崎なれば、阿波のみさとは、阿波の鳴門にて、道のほどにも、たよりありておぼゆ、●田無川は、季吟云、和泉の田川にや、和泉のなだは、和泉國和泉郡、和泉郷あり、そこの灘なるべし、●けふ海に波に似たるものなし云々、こはのごかなるべし、原本に、うれふると、假名をつけたるは譌なり、●慍は、あはれふとよむ、つよくいはんとてのかきざまなり、●三十日あまり、九日になりにけり云々、上文、十六日の條、海路に日をへたるにうみつかれたるさまあらはれたり、●かいぞくものならず云々、こは和泉の國は、畿内にてふかも都もちかければ、今は海賊ものゝかずにもあらずとなり、今までは、海賊をいたくおそれつれど、今はや、凉もちかければ、心つよくなりたるさま、まことに女の心さもあるべし、

二月朔日、あしたのまあめふる。うまのときばかりに、やみぬれば、和泉の灘といふ所より、出てこぎゆく。海のうへきのふのごとくに、風浪見えず。黒崎の松原をへてゆく。ところの名は、くろく、松のいろは、あをく、いその浪は、雪のごとくに白く、貝のいろは、すはう（蘇枋）にて、五色にいまひといろぞたらぬ。このあひだに、けふは、はこの浦といふところより、つなて（準紋）ひきてゆく。かくゆくあひだに、ある人のよめるうた。

玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみもかゝみとたれか見さらん」

●黒崎は、和泉國、月根郡なり、●所の名は、くろくさは、五色をいはんとて、黒崎といへば、くろきにかぞへいれたり、●雪のごとくに白く云々、原本、雪のごとくに日とあれど、日の字は、白を寫し誤れる事、明らかなれば、拾葉本にひける異本と、又外の異本とにても、雪のごとくに白くあるによりて、あらたむ、●五色は、青黄赤白黒なり、くろきは、所の名の黒崎といふにても、青きは、松の色にてもたせ、白きは涙にてもたせ、赤きは、貝の色の類枋なるにてもたせたれど、五色に、黄が一色たらずとなり、●はこの浦も、和泉日根郡箱作村なり、そは泉州志箱作村の條に、こゝのうち波云々、玉くしげはこのうら波といふものは、うけひきがたきものにて、くしげはこのうち波云々、玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみもかゝみとたれか見さらんとつゞくる事は、万葉にも見ゆ、標注にひけるがごとし、●玉々の名をかくし題によめる中に、はじめて見えたるのみ、さてこの人麻呂集といふもの、延喜天暦の後の作者の云わざなるべしと、契沖師も、いはれわれば、玉くしげはこのうら波といふものは、御門にいるゝもの故、玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみもかゝみとたれか見さらんとつゞくる事、明らかなれば、標注にひけるがごとし、●玉くしげはこのうら波云々、原本、雪のごとくに日とあれど、日の字は、白を寫し誤れる事、明らかなれば、拾葉本にひける異本と、又外の異本とにても、雪のごとくに白くあるによりて、あらたむ、●五色は、青黄赤白黒なり、くろきは、所の名の黒崎といふにても、青きは、松の色にてもたせ、白きは涙にてもたせ、赤きは、貝の色の類枋なるにてもたせたれど、五色に、黄が一色たらずとなり、●はこの浦も、和泉日根郡箱作村なり、そは泉州志箱作村の條に、こゝのうち波云々、玉くしげはこのうら波といふものは、うけひきがたきものにて、くしげはこのうち波云々、玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみもかゝみとたれか見さらんとつゞくる事は、万葉にも見ゆ、標注にひけるがごとし、●玉々の名をかくし題によめる中に、はじめて見えたるのみ、さてこの人麻呂集といふもの、延喜天暦の後の作者の云わざなるべしと、契沖師も、いはれわれば、玉くしげはこのうら波といふものは、御門にいるゝもの故、玉くしげはこのうらなみたゝぬ日はうみもかゝみとたれか見さらんとつゞくる事、明らかなれば、標注にひけるがごとし、●玉くしげはこのうら波云々、原本、雪のごとくに日とあれど、日の字は、白を寫し誤れる事、明らかなれば、拾葉本にひける異本と、又外の異本とにても、雪のごとくに白くあるによりて、あらたむ、●五色は、青黄赤白黒なり、くろきは、所の名の黒崎といふにても、青きは、松の色にてもたせ、白きは涙にてもたせ、赤きは、貝の色の類枋なるにてもたせたれど、五色に、黄が一色たらずとなり、●はこの浦も、和泉日根郡箱作村なり、そは泉州志

あめふる　［正］原本あめふりとあり、今詳本、讀本による、和泉の灘　［正］爲本和泉のたゞはとあり、誤なるべし、ごとくに　［正］爲本くの字なし、黒崎　泉州志云、日根郡黒崎在濱輪村、白く　［正］諸本、別本、抄本なし、貝のいろはすはうにて　和名抄染色具云、蘇枋（俗音須方）人用染色也、山家集、「ふぢそむるまするのこかひひろふとていろのはまさはいふにやあるらん」　［正］すはうにて爲本になんみゆるとあり、五色　倭書錄稽云、以五采彰施于五色、禁沈註云、五色青黄赤白黒也、はこの浦　亜之菓「はこのうらにあけくれあそぶあしたづのらさせのかげぞさらにみゆらん」　和名舟具云、楽紋（音支、訓豆奈天）挽舟綱也、よめるうた　［正］一本うたの二字なし、たまくしげの歌　人麿集「あしがらのさがみにゆかんたまくしげはこれの山のあけんあしたに」

ふな君　［正］爲本みふな君とあり、いへるうた　［正］定本、抄本うたの二字なし、ひくふねの歌　万葉一、長歌云、眞木乃都麻手乎百不足五十日太爾作云々、紫式部日記云、さいかは、霜月の朔日の日、れいの人々のふたてゝ、のぼりつゞひたる云々、榮花物語花山云、さいかもゝかなどすぎさせたまひて、いみじううつくしう、おはしますらん云々、［正］ひくふね原本ゆくふねとあり、今定本、抄本、讀本による、ひそかに　［正］爲本みそかにとあり、からくして　［正］原本しての二字なし、今一本、黒本による、ひれり出して　揚萬里集卷二云、拈出老諛明宇宙、本來淸尙只靈泉、よしと思ゝ　なえしも　「……考ふと思へるとあり、今抄本、類本、定本、黒本、抄本、別本、讀本によりて改めつ、えしも爲本わらはゝとあり、取らず、誣へとて云々　宇鏡集云、誣（シフル）万葉三、不覺蟲話誣々々諮詢許費志惡伊波発強話登言」眞淵云、ふひへは、ふひめと、

んさはいへり、海をかゝみさ見るなど、風波　なくのごかなるさまなり、

また、ふな君のいはく、この月までなりぬることゝて、くるしきにたへずして、人もいふことゝて、心やりにいへるうた。

ひくふねのつなでのながき春の日をよそかいかまでわれはへにけり」きく人の思へるやう、なぞたゞごとなると、ひそかにいふべし。ふな君のからくして、ひねりいだして（拈出）、よしと思へる事を、えしもこそ誣へとて、つゝめきてやみぬ。にはかに、風なみたかければ、とゞまりぬ。

●ふな君は、紀氏みつからをいふべし、正月十四日の條にも見えたり、●この月までとは、去年十二月舟出して、正月もすぎ、今二月にもなりたれば、かくいへり、この月までなりぬる事にて、さあるるもじを、原本に脱せり、今は、諸本によりておきなふ、●人もいふことゝて、心やりにいへるうた、歌、序歌なり、ながき春の日といはんとて、かくいふ事にて、ふねを五十日太と、かきたるなど、みな五十を、いの假名に用ひたり、又子の生れて、後を、いか、もゝか、などいへるも、五十日、百日なり、されば、いかは、五十日なる事論なし、さてこゝの恋は、過し日かずをかぞへて、四十日にもあまりて、五十日にもおよばんとするをいへり、こは今の世にいふ、四五十日などいはんがごとし、實は十二月廿一日より、二月朔日まで、四十一日なれど、おほよそに、四五十日といはいへるなり、●なぞたゞごとなる云々、たゞごとは、ことばをもかさらず、ありのまゝにいへるをいふ、この歌を、きく人のなさか、このやうにありのまゝなると、思はんさなり、古今の序に、たゞごと歌さあるも同上、ひそかにいふべし、さあるを原本に、ひそかにいひしとあれど、てにをはも、さゝのはず、誤なること明らかなれば、諸本によりてあらたむ、●ひれ〻いたしては、上文にになひいだすなど、いへるがごとく、やう〳〵として、よみいだせし心なり、

こは詩に拈出など、つかふがごとし、証へさては、さひへさて、さよむべし、さひいべさいふを、はぶきたるにて、強言なり、道入をはひりさいふがごとし、風流の説、標注にあけたれど、よしさも思はれず、●さゝめきてやみぬ云々、こはひそかにさゝやくをいへり、万葉に、呼音をよめるがごとし、さてこの文、諸本つゝめきてやみぬと、ありてさゝめきてさあるは、この原本と、陽春本、見聞抄、異本とのみなれど、さゝやきてさあるかたやまさりたらん、

一日、雨風やまず。ひと日よすがらかみほとけをいのる。

●よもすがら、神佛をいのりて、あかせしさなり、

三日、海のうへきのふのやうなれば、ふねいださず。かぜのふくことやまねば、きしの涙たちかへる。これにつけてよめるうた。

緒をよりてかひなきものはおちつるもなみだの玉をぬかぬなり鳧

かくてけふもくれぬ。

●きしの波たちかへるこれにつけてよめる云々、梁平朝臣の、うらやましくもかへる波かなといへるを、心に思ひて波のかへるを見ても、われも都へさくかへりたく思へども、風波にさへられて、日をおくれば涙のこぼるゝなり、さてその涙を歌によめるなり、●緒をよりて云々、この歌、意明らけし、

四日、かぢとり、けふ風くものけしき、はなはだあしといひて、舟いださずなりぬ。おかれども、終日に波風たゝず。このかぢとりは、日もえからはぬかたゐなりけり。

○けふもくれぬ　〔正〕原本けふは抄本はもとなし、亦くれぬの下に為

●終日に波風たゝず、このかぢとりは、日もえよく天気なごと見さだむる物なるを、かくよき天気なるを、風雲のけしき甚あしさいひて、さゝめられたる事を、はらたゝしく思ひて、かぢとりをのゝしりて、かたゐなどいへり、さてかたゐなどは、標注を見てあるべし、●この泊の浦には、いろいろの貝石など多しさなり、すべて貝いしなごは、くさ〴〵のうるはしき貝石などおほかり云々、

おなし所に、日をふることをなげきて、ある女のよめるうた。

手をひてゝさむさもしらぬいづみにぞくむとはなしにひごろへにける。」

●女兒のためには、おやをさなくなりねべし云々、こは、親のならひとして、子のためには、何ごともうちわすれて、をさなきやうになるさなり、こゝの文、原本、おやせさなくさあれど、誤なること明らかなれば、諸本により改む、●玉ならずもありけんを云々、親の心としては、最貴目に、玉にたとふるはかりおもへども、人いはんや云々、玉のやうにもあらずさいはんさなり、されども、玉にし子は、いまいきてある子よりも、なきもの故に、あやにくにて、顔よかりしやうに思ふさいへり、さてこゝの文を考ふるに、このころのことわざに、玉にし子かほよかりき、なさいひしこさありしにや、さ思はる、そはこゝの文を、よく〳〵あぢはひて玉ろべし、さて又こゝの文原本、諸本、さもに玉ゝかほなど、雅文にまゝへん閒さも思はれねば、為家朝本、附注本などによりれば、て季吟の說も、見えたれど、玉ゝかて、今はかくあらたむ、●手をひてゝ云々、こは國の名のいづみを、泉にさりなしたり、されど、まことの泉ならず。いま玉かもめむれてあそぶ所あり。京のちかづくよろこびの

五日、けふからくして、いづみのなだより、小津のとまりをおふ。松原めもはるゞなり。これかれくるしければ、よめるうた。

ゆけどなほゆきやられぬはいもがうむを小津のつの浦なるきしの松ばら」

かくいひつゝ、くるほどに、舟とくこげ、日のよきにともよほせば、かぢとり、ふなこどもにいはく、みふねよりおほせたぶなり。あさきたけふ、なみなたちそと、人々ひねもすに、いのるしるしありて、風浪たゝず。いま玉かもめむれてあそぶ所あり。京のちかづくよろこびの

のいでこぬさきに、つなではやひけといふ、このことばの歌のやうなるは、かぢとりのおのづからの詞なり。かぢとりは、うつたへに、われ歌のやうなる事いふとにもあらず、きく人のあやしく、歌めきてもいへるかなとて、かきいだせれば、げにも三十文字あまりなりけり。

●小津の泊は、泉州志、和泉郡太津村の條に、こゝの小津の泊さある文をひけりしかは、大津、小津、同所か、更級日記におほへさあるをも、大津さして、同じ條にひけば、これも同所か、●めもはるゝなり云々、はるゝは、古く書紀、万葉などに、みなはろゝさもいへり、紫平朝臣の歌に、はるゝきぬる旅をしそ思ふ、さあるなどを見ても玉ろへしふるくより、はるゝさみえたり、ろさろさかよひたろにて、みな遥なる意なり、されど、いま少し、これらみな標注にあげたり、●くるしければ、師京をいそぐゆゑに、松原のはるかなるもくるしさなり、●ゆけどなほ云々、眞淵云、妹がうむ麻さいひかけたり、万葉にうみをなす長門の浦、又うみをなすながらの宮などよめり、冠辭のみなり云々、さて一首の意は、さきにも、めもはるゝなりさいひて、岸の松原のはるかなるに、倦たるに麻を紡をいひかけたり、原本、ゆきやられはさあれど、ねさぬさを、誤れる邪明らかなれは、諸本により、今は諸本によりておきなふ、●みふねより云々、この文、原本、舟ごさにいはくさあれさ、もの字を脫せし邪明らかなれゆゑなり、あさきたは、朝の北風なり、万葉にあさごちさあるたぐひなり、●うつたへに云々、眞淵云、うつたへは、ひさへにさ云ふ閒なり、されども、いまだ熟語つまびらかならず、万葉集、さかきにも手はふるさふをうつたへに人づまさいへばふれぬものかはなどあれど、又うつたへにまがきの姿みまくほり、又うつたへに品ははまれど、などあり、いづれも、ひさへにさいふごさばなり、●かきいだせば云々、こはそばにて聞ゐたる人の、かぢとり閒の、歌めきたるか書て、いだせしなり、かきていたせしを見れば、まことに歌めきて、三十文字あまりなりさなり、

けなればさあり、よめるうた定本、抄本うたの二字なし、いもがうむをつの浦　万葉六長歌、績麻成長柄之宮爾真木柱太高敷而云々」、仝十三長歌、是女等之麻笥垂有績麻成長門之浦丹云々」

いはく　［正］為本いそくさあり、あさぎた　万葉十一、朝東風痛井提越浪之世蝶似裳不相鬼故泥毛響動二」

さいふ　［正］定本、抄本此三字なし、

うつたへに　万葉四、神樹爾毛手者觸云乎打細丹人妻跡云者不觸物可聞」　思見集、「はるさめはふりそめにしかうつたへに山をみどりになさんさやみし」源松中納言物語云、うつたへにかうておはすらんさ思ひよらんやは云々、季吟云、うつたへは、八雲御抄云、うちたへてなり、ひさへにさいふ心之、またうちつけさいふ心さおなじ、根さりは、偏にわれ歌のやうにいはんさて、いふにもあらざりしかど、閒人の歌に聞なして書出しさえ、人々ひれもすに　［正］為本ひれもすにあるわらはのよめるうた　［正］為本めのわらはさあり、うたの二字、定本、抄本なし、いのりくるの歌　夫木十九、よ

○いへるかな　［正］定本、抄本、抄本いひつるかなさあり、　○げにも　［正］原本もの字なし、今定本による、

あまりに、あるわらはのよめるうた。

六帖三百之

いのりくるかざまと思ふをあやなくにかもめさへだに涙と見ゆらん」といひてゆくあひだに、石津といふ所の松原、おもしろくてはまべとほし。又すみよしのわたりをこぎゆく。ある人のよめる。

いま見てぞ身をばおもりぬる住の江の松よりさきにわれはへにけり」

こゝに、むかしつ人のはゝ、ひと日、かた時も、わすれねば、よめる。

住の江に舟さしよせよわすれくさおるしありやとつみてゆくべく」

となん。うつたへに、わすれなんとにはあらで、戀しきこゝち、おもばしやすめて、又もこふるちからにせんとなるべし。

●いまし云々、この岡、上文、正月十一日の條にもありて、そこにくはし、いましのしは、助字なり、●かもめむれゐて云々、この文、原本かもめもむれゐてとあれど、もの字衍文なる事明らかなれば、諸本によりてはぶきつ、●いのりくる云々、この歌、意明らけし、かざまは、風のたえまなり、かもめは、白きものなれば、涙のこと見ゆとなり、あやなくの事、標注にあげたる眞淵の說見るべし、さへだにといふ岡、あるべしとも思はれず、眞淵も、說字なるべしといはれゐ、この歌、六帖には、かもめさへたゞにとあり、六帖のかた、まされりとは思へど、この日記には、諸本さまに、さへだにとさせれば、たゞ諸本にふたがふのみ、又鎌倉右大臣の集に、すらたにさへだにといふ岡、見えたれば、こゝも、さへだにとしてもきこゆべきにや、石津は、和泉の國、大島郡なり、●すみよしのわたりを云々、眞淵云、すみよしの江とよみつらんを、後に文字のまゝに、假字に誤れるものなり、日吉も、よしさも、すみのえともいへり、さる證は、忠岑の歌に、すみよしとあまはつぐともなど、あるを見ても思ふべし、

●いまし見てぞ云々、季吟云、紀氏の歌なるべし、住吉の松は、さしふるものとかけては思ひつゞくに、いま見れば、われはなほふりまさりければ、わかみのほどを思ひしりぬとなり、●むかしつ人のはゝ云々、こはさきに、うせたる子の母なり、紀氏みづからをいふなるべし、ひと日、かた時もうせにし子の事をわするゝ事なしとなり、むかしつあるつもトは、助字なり、●すみのえに云々、わすれ草は、住のえにおほくよめり、されば住のえに、舟をよせてわすれ草のおるしありて、思ひをわするゝかさつみてゆかんとなり、わすれ草の事、標注にあげたり、●うつたへにわすれなんとにはあらで云々、うつたへは、上文にいへるがごとく、ひたへにになり、まへのうたにわすれんとにはよめども、偏にわすれはてんとにはあらず、いたく戀ふれば、心もくるしきゆゑに、その戀しき心をしばしやすめて、こひつかれたるに氣力をもつけて、またもこふるちからにせんとなり、

○またもこふるちからにの下にあり、

こゝろ、ほそうきこゆ「あるいうみに風よりさきに舟出していしつの波さきえなましかば」

はまべさほし　【正】爲本はまべいさごほしとあり、

身をば　【正】定本、抄本身をもとあり、

むかしつ人　【正】爲本つもトなし、抄本つをへに作る、

住の江にの歌　古今雜上、みふのたゞみれど云々、是ふるものとかけては思ひつゞくに、いま見れば、すみのえのきしにおふてふこひわすれ草」和名抄草類云萱草一名忘憂（漢語抄云、和須禮久佐、俗云如忘貝二音）毛詩云、焉得諼草言樹之背、鄭云、萱草令人忘憂云々、文選晉叔夜養生論云、合歡蠲忿、萱草忘憂、愚智所共知也云々、【正】舟さしよせて　原本さしよせてとあり、今黑本、諸本、爲本による、つみてゆくべく爲本がへらんとあり、【正】爲本またものもトなし、然してちからにの下にあり、

かくいひて、なかめつゝくるあひだに、ゆくりなく風ふきて、たけどもく、おりへおぞきにしぞきて、ほとくしくうちはめつべし。かぢとりのいはく、このすみよしの明神は、れいの神ぞかし。ほしきものをたいまめくものか。さてぬさをたいまつりたまへといふ、いふにおたがひてぬさたいまつ

ほうれしと思ひたまふべきもの、たいまつりたまへといふ。またいふにしたがひて、いかゞはせんとて、まなこもこそふたつあれ。たゞひとつある、かゞみをたいまつるとて、海にうちはめつれば、くちをし。されば、うちつけに、うみはかゞみのごとなりぬれば、ある人のよめるうた。

神中抄
ちはやふる神のこゝろをあるゝうみにかゞみをいれてかつ見つるかな」いたく、住のえのわすれ草、きしの姫松、などいふ神にはあらずかし。めもうつらく、かゞみに神の心をこそは見つれ。かぢとりのことばも神のこゝろなりけり。

●なかめつゝくるあひだに云々、ながめは、もの思ふ事のあるなりにいへり、こゝは、先にうせにし子の事を、思ひいたしてうちながめたるなり、なかめの事、標注にあげたる眞淵の說を見てもしるべし、●ゆくりなくは、今俗に思ひがけなくなどいふにおなじ、●たゞごともく〳〵とは、万葉七に、八船多氣とあるたゞごとおなじくて、意は標注にあげたる宣長の說のごとし、こゝの文諸本、こけども〳〵とあるは、この原本と、異本とのみなり、今考ふるに、諸本のごとく、こげたらん、●しりへしぞきにしそきて云々、こは舟をこげども〳〵、風波にさへられて、語釋つまびらかならねど、こゝはあやふきこゝろなり、諸說考證ともに標注にくばし、●すみよしの明神は云々、標注にあげたる眞淵の說に、貫之のころ明神さはいふべからず、名神の誤ならんといはれしは、いみしき誤なり、いさふるくより、明神ともいへり、そは檜窓筆記の說のごとく、名神と、明神さがよへりとおぼし、眞淵は誤りて、貫之のころ、明神さはいふべからずさいはれつれども、魚彦は、既に心づけりと見えて、魚彦の書入には、續日本後紀をひけり、檜窓筆記にも、續日本後紀を引たれど、猶ふるく

四云、弘仁七年九月戊子幸皆明神報賽稔也、續日本後紀卷十八云、承和十五年卷三月壬申勅奉充山城乙訓郡山崎明神御戸代田二町、又云、嘉祥元年冬十一月壬申、隱岐國伊勢命神預明神例緣歷有靈驗也、漢書卷二十五、効紀志云、使先聖之後能知山川敬於禮儀明神之邪者、以爲祝、梅窓筆記云、明神ト云ハ、公式令ニ明神御宇日本天皇詔旨トアリテ現在ノ天皇チサシテ申ス邪ニテ神チサス ニハ、名神ト云邪ナリシガ、名ト明ハ、字音ノ同ジキ故ニ通ヒテモ用ヒタリ、サレド差別ノアルヘシ、續日本後紀承和十年又四月丁丑山崎神預之名神トアルチ同紀承和十五年卷三月壬申勅奉充山城國乙訓郡山崎明神御戸代田二町トアリ、同神ニテ名神チ明神トカケル證明チ出スノミ、仁和三年三月十四日、賀茂明神幷日明神トアリ、此外ニ又台記久安三年二月廿二日(取要)幷日祭大名神四座ヒカケリ、後世ニナリテハ、大明神ナドチ被授シ事モアリシ也、眞淵云、明神はあきつ神、あきらみ神ともよみて、顯神と書におなじ、今顯におはします天皇をも申すなり、神を明神さいふ邪、延喜式のころまではなし、貫之の明神と書くまでき邪知るべし、名神とありしを、後に明神と曾誤りしならん、又名ある神とあるは、名ある神の邪なり、魚彦云、明神さいふ邪、嘉祥のころ既にありさみえて、續日本後紀卷十八に、山崎明神、又伊勢命神預明神例などあれば、明神さいはやくよりいひけるなり、續日本紀卷十云、天平二年冬十月庚戌遣使奉渤海信物於諸國名神社、古事記云、其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男、三柱神者、墨江之三前大神也、○れいの神ぞかし　季吟云、れいの神さは、靈と例と兩義あり、いつもほしきものおはするゆゑ、かしこき波風をおこし給ふさなり、又貫の字の心は、靈驗ある神なれば、奉幣したまはゞ、靈驗あらんさいへるなり、○たてまつれども　○いやふきにいやたちに　[正]原本たいまつりさあり、又いふの二字原本になし、[正]定本、抄本、諸本による、[增]黑川眞頼翁云、こは住吉の神はおはすれば、波風をおこし給ふさなり、[增]風波の爲に、舟を打ちいるゝばかりなりさよ、すみよしの明神　日本後紀卷廿

明神さいふ文字は、皇朝には、日本後紀、漢書に見えたり、さもに標注にあぐるがごとし、又名神さかきたるは、國史にいさおほくて、あぐるにいさまあらねば、ふるきをのみあげつ、住吉明神の事も、標注に見えたり、●れいの神ぞかし云々、標注にあげたる、續居の既用ふべし、季吟の說も、あげたれど、よしとも思はれず、たゞこゝろみにあぐるのみ、●いまめくものか云々、眞淵云、神も今の世めきて、物ほしみしたまふかさなり云々、この說のごとくにて、物語ふみなどにいまめくさあるさは、こゝろたかへるやうなれど、もさハ同語さ見えたり、●いふにしたがひて云々、いやは、原本、このて文字なけれど、脫せること明らかなれば、諸本によりておぎなふ、●いやふきにいやたちに云々、いやは、物をつよくいへるにて、古事記に、最をよみ、續日本紀に、彌をよめるがごとし、●ねさには御心のゆかれば云々、こはねさを奉れども、それには御心のゆかずさ見えて、風なみもやまざれば、御舟もゆかれば、神慮に猶うれしく足れりさおぼしたまふほどの物を、奉りたまへさ、かぢとりのいふなり、さてそのいふにしたがひて、まなこさへふたつあれ云々、類語はうつぼ物語に見えたり、標注にあぐるがごとし、●うちつけにかゞみのごとなりぬれば云々、季吟云、うちつけに、こゝはさしあたりにさいふ心なり、かゞみをうみにいるれば、やかて海もかゞみのおもてのごとく、風波なぎてたひらかに成たるさなり、●ちはやぶる云々、この歌、意明らけし、かつみつるは、鏡の綠語なり、●いたくすみのえわすれ草岸の姫松などいふ神にはあらずかし云々、風波しづまりて、いたく海の面すむさいふを、すみの江さいひかけ、そのすみさ姫松のひめさ、あらきにはにつがはしからすさなり、さてわすれ草は、こゝには不用なれど、姫松にむかへて、對をなせるなり、こゝの文、よく〳〵あぢはひ見ざれば、文酔いたづらになるべし、季吟の說の如にては、こゝたらず、●めもうつらく〳〵は今うつら〳〵してれぬなどいふ俗語のうつら〳〵に同じ、眞淵の說、標注にあぐるがごとし、●かゞみに神のこゝろをこそ見つれ云々、かゞみを奉りて、風波もづまりたれば、かゞみにて、神の御心を見しよさなり、見るは、鏡の綠語なればなり、●かぢとりの心は、神の御心さ同じくこそ云々、かぢとりの云ふにまたがひて、鏡を奉りて、風波もつまりたれば、かぢとりの心は、神の御心なりけりさなり、

○御心のゆかれば　[正]定本、抄本いかればとあり、○うれしと思ひたまふべきもの云々　[正]定本思ひたぶべき爲本たまふばかり又たま〳〵定本、抄本たべきあり、また以ふに爲本此の五字なし、○まなこもこそふたつあれ　宇津保さしかげ云、ちゝはゝまなこだにふたりありと思ふほどに云々、全嶽蛾院云、かんのおとゞ、めもこそふたつあれ、たゞひとところをおやすくおのぼゆるかな、○くちをし　[正]抄本いとくちをしとあり、○うちつけに　大和物語「うちつけにまどふこゝろを聞からになぐさめやすくおのぼゆるかな」源氏澤標「うちつけにわれをいしむかごとにておもばゆ」[正]爲本うちつけにあり、○かゞみのごと　[正]爲本かゝみのおもてのごとにもあり、○よめるうた　季吟云、かやうにいたくおそれある神なれば、和歌などにやさしきまでに、ひたぶるにおそれ奉るべきにはあらねど、○いたく住の江の松なども住吉の神を恐れていふへなり、今迄は住の江の忘草、或は岸の姫松などいふ、そのみなのまろしにたつる水をいふ之、世俗には、いたく物をみるをば、つら〳〵と見るといふ之、又あみをまろしといふを、わかには、ふなやもひさしといふ歟、あたらさはあらたにといふ之、あさそさたつと同音之、[増]眞淵云、うつら〳〵は、うつゝとおなし、顯然といふ意之、日本紀等に國きといふは、うつゝのこゝろ之、(雜錄)此の説よろし、○かぢとりのことば　[正]原本こゝろはとあり、今爲本、黒本、謄本によりて改めつゝ、みなつくしのほどより　[正]抄本けりの二字なし、

雜式云、凡難波津頭海中立澪標、若有蓄標朽折者搜求拔去云々、

釉中抄云、みをつくしとは、川口などに、水のふかき所をば、みなといふ、そのみなのまろしにたつる水をいふ之、世俗には、みをまろしといふを、わかには、みをつくしとよむ之、又水脈舟さかきて、みをびきの舟とよめり、又万葉云、水思衡石こゝろつくしてと云々、國史には、難波津に始立澪標の由あり云々、

年山紀聞云、御釋云、宇津標とかけど、名の意は、水脈津錢にて、つは助語之、[正]ほどより原本もとより[増]眞淵云、とあり、今定本、抄本謄本による、

なにはづにつきて　[正]原本難波の津をきて定本、抄本津をのなのをもとな〳〵、今一本、黒本、謄本による、

河尻　拾遺別聞書云、師伊周つくしへまかりけるに、川尻はなれ侍りけるによみけるとぞ云々、

散木集運歌「川尻に舟のへぐらの見ゆるかな」俊頼「こゝほのぼるさそさわぐなるらん」俊賢、

東鏡卷五云、元暦二年十一月五日、今日隨州至河尻之處振津國源氏多田蔵人大夫行綱四島冠者等遁前途聊發矢石云々、

女なきなきもの　[正]爲本おきなおんな定本、群本、抄本おんなおきなとあり、又定本、抄本ものの二字なし、

ひたひに手をあてゝ　源玉かつら云、ひたひに手をあてゝねんとなり云々、

舟醉　和名抄病類云、苦船(布奈夜毛非)西溪叢話云、今人不善乘船謂之苦船云々、○もたげさせて　[正]定本、抄本させの二字なし、○いつしかとの歌　古事記云、兄子者既成人是無愧云々、　万葉四、久堅之雨之落日乎直獨山邊爾居者鬱有來」万葉十四、安可見夜麻久左稚可利曾倍奈良波安波須賀倍安良蘇布伊毛之安夜夜爾可奈之」全十六、枕詞風土記曰倉將立厚遠麻禮御造刀自」

○人のいへれば　[正]爲本かくいへればとあり、○こゝちなやむ　発花初花云、ことごとには、よの中こゝちおこりて、人もなくなり、あはれなる事どもおほかり云々、○舟君ぞいたく　[正]原本ぞもとなし、今爲本、黒本、謄本による、又一本いたうとあり、○ふたまひし　[正]定本、抄本はもとなし、○似ずもあるかな　[正]一本あらすもあるかなとあり、

病者　[正]爲本病ひとあり、

こちくしき人　源氏朝顔云、こゝちくしくおぼえ給へるも、さるかたなり云

六日、みをつくしのほどよりいでゝ、なにはづにつきて、河尻にいる。

みな人々女をさなきもの、ひたひに手をあてゝ、よろこぶことふたつなし。かの舟醉のあはぢの島の巨子(おほいこ)、みやこちかくなりぬ、といふをよろこびて、ふなぞこより、かしらをもたげさせて(盛酒)、かくぞいへる。

いつしかといぶせかりつる難波がたあしこぎそけてみふねきにけり」と思ひのほかなる人のいへれば、人々あやしがる。これがなかに、こゝちなやむ舟君ぞいたくめでゝ、舟醉もたまひしみかほには、似ずもあるかなといひけける。

七日、けふは、川尻に舟いりたちて、こぎのぼるに、川の水ひて、なやみわづらふ。舟ののぼるべきとかたし。かゝるあひだに、舟君の病

●みをつくしのもとよりいでゝ云々、眞淵云、みをつくしは、万葉又は澪日本紀にも出たり、延喜式に見ゆるは、尺寸をまろしたる、木を立置きて、水の淺深をまる物なれば、水脈津標の意なるべし、万葉には、遠津淡海引佐細江にもよみたれど、難波津は、水脈深くて、往來つれにさげければ、いつこにはあれど、こゝに名高し、●ひたひに手をあてゝよろこぶ云々、眞淵云、ひたひに手をあつるは、いたく物をよろこぶさきなすわざなり、もろこしの書に、那諭するなどいふに同じ、●舟醉は、和名抄に、苦船を、ふなやもひさといひし人の名にや、又たうめひさりこゝちあしみしてと前にありし故に、かの舟醉とはかくなるべし云々、巨子は、おほいこと讀べし、そは源巨城をもたほきとよめばなり、さて女の名の子のうへ、何々いの字をつくる例あり、古今に典侍あまれいの子、後撰に内侍たいらけいの子、命婦きよいの子などあり、巨子もこのたぐひの名なるべし、●みやこちかくなりぬといふを云々、原本、なりぬるといふをあれど、るの字衍なる事、明らかなれば、定家卿本、拾葉本、類從本などによりてはぶきつ、●いつしかと云々、いぶせかりつるは、心もとなかりしをいへり、古事記に、愚をよみ、万葉に闇をよめり、ともに心もとなき意なり、猶くはしくは、ひらき見てまろべし、あしこぎそけては、あしこぎさけてなり、万葉十四に、久左稚可利曾氣とも同じくて、くされかりさけなり、まて一首の意は、土佐國を舟出せしより、いつしか難波あたりにきだらんと、心もとなかりしを、今は難波江のあしれをもこぎさけて、御舟のこゝまできたりしよなり、●いと思ひの外に、かゝる歌をもよみ、人々あやしがるは、舟君の發華に、よの中こゝちおこりて、なにごともとなく、物ほしほにはにすもあるがなと云々、こは今までは、舟醉したりし人も、川尻にいりたるうれしさに、さみに心よくなりて、思ひの外に歌をもよみ、又ほつきなども、舟醉したりしやうには、あらずとなり、

者、もとよりこちゝ〳〵まさしき人にて、かうやうのこと、さらにまらざりけり。かゝれども、淡路のたうめの歌にめでて、みやこぼこりもやあらん。からくして、あやしき歌、ひねりいだせり。そのうた。

きときては川のぼり江の水をあさみ舟もわがみもなづむけふかな」

これはやまひをすれば、よめるなるべし。ひとうたに、ことのあかねば、今ひとつ。

とくと思ふ舟なやますはわがために水の心のあさきなるべし」こ

のうたは、みやこのちかくなりぬるよろこびに、たへずして、いへるなるべし。淡路のごの歌におとれり。ねたくいはざらましものをと、くやしがるうちに、よるになりてねにけり。

●川の水ひてなやみわづらふ云々、こは川の水ひたれば、舟のゆきなやみわづらふなり、●舟君の病者は、昨日の條に、こゝちなやむ舟君ともありて、紀氏みづからをいへるなるべし、●こゝ〳〵しき人にて云々、こゝ〳〵しきは、季吟の說のごとく、骨をしきなり、無骨にて、歌もよみえぬをいへり、かうやうの事、さらにまらざりけりとは、昨日の條の、淡路の巨子の、歌をうけてさやうの事は、ふつにまらずといへり、●みやこぼこりは、季吟云、みやこぼこりは、京へちかづきしを、よろこびほこる心なり、●ささきては云々、川のほり江、季吟は、川の細江と見、眞淵は、川のほる江と心えべしといはれね、いづれをか、よしとせん、心得がたし、拾葉本に、川のほり堀とあるは、川のぼり路と、音同じことなれば、川のぼり路とあるやまさりたらん、なづむは、古事記に、那豆美さひき、万葉に、泥又は烟をもよめり、こゝは、川の水ひて、舟のすべりがたきをいひ、わかみは病にてなづみわづらふを、開方かけて、舟もわが身も、なづむといへり、さてつゞきの文に、これはやまひをすれば、よめるなるべし、

聞三、よみ人しらず、よしの川水の心ははやくともたきのおとにはたてじとぞおもふ」【正】原本あさきなりけりとあり、今定本、別本、抄本、諸本による、

みやこのちかく　【正】原本みやこちかくとあり、今一本による、

淡路のご　本朝文粹第一、菅贈大相國慰小男女詩云、徒既彈琴者、閭巷稱舜御、注云、俗謂貴女爲御、蓋取貴人之女御之義也云々、○れたく

川のぼり　【正】原本いりてれにけりとあり、今定本、爲本、別本、抄本、黒本、諸本による、

さりかひの御牧　延喜左兵馬式云、凡諸御及行幸應用駒飼御馬者勘盡須數奏聞乃下官符令進唯牧放飼馬者兵移當國國即令牧子率送（但摂津國島養牧贈島牧不移當國兵直放繋）、大和物語云、尊子のみかど、鳥かひの院におはしましにけり云々、大江の玉ぶちむすめ、「あさみどりかひある春にあひぬればかすみならねどたちのぼりけり」、狹衣一下云、大貳どのは、いまさりかひさいふ所わたりまでおはしましぬらん云々、

ほさりにさごまる　【正】定本、抄本さころに一本さまるさまるとあり、

あざらかなる　【正】原本いさゝ、かなるとあり、今諸本、抄本、

しさもいへり、●さくと思ふ云々、いかで、さく京へかへらんと思ふに、その舟をかく漕りなやますは、わが爲に水の心の淺きぞとなり、心の淺きを、水の淺きにかけたり、●あはぢのこの云々、すべて女を稱して、御さいへり、そは大和物語に、伊勢のご、出羽のご、五條のご、伊陳のご、ひがきのご、うつぼあて宮に、小將のご、續世繼に、ちくぜんのご、などあり、これらは、みな女の稱なり、●あはぢのごの歌におきなるぞれたきさありしを、諷れる歟、かく直せば、こゝの文よくきこえたり、異本におとれり、れたくいはさらましものをさあるにても、よしさは思はるれど、猶いさゝかおだやかならず、

八日、なほ川のぼりになづみて、とりかひの御牧といふほとりにとゞまる。こよひ、舟君れいのやまひおこりて、いたくなやむ。ある人あざらかなるものもてきたり、よねしてかへりごとす。をとこども、ひそかにいふなり。いひぼしてかへりごとす。をとこども、ひそかにあり。けふせちみすれば、魚もちゐず。

●さりかひの御牧は、攝津國、島下郡なり、さるを八雲御抄に、山城國とのたひしは誤なり、延喜式に、攝津國島養牧とあるを見てもまるべし、●いさゝかなるものさありしを、拾葉本、類從本などにあざらかなるものゝさありしてもつるさや、さあるをよしとす、いひぼしとは、飯粒をやりたりにて、今いふめしつぶなり、さる證は、古事記に、いひぼしとよみ、書紀安閑紀の人名に、飯粒さあるをも、いひぼしとよめり、播磨國の郡名に揖保（伊比保）さあるも、飯粒の意なるべし、飯粒の意は、あざらけき魚をもてこしに米をやりたれば、飯粒して魚をつりたるやうなりさ、なさごごものひそかに、たはふれいふなり、かの神功皇后の、飯粒して

黒本による、

いひぼしてもつゝるこや　古事記云、當四月之上旬爾坐其河中之磯、抜取御裳之糸、以飯粒爲餌、釣其河之年魚云々、書紀安閑紀云、大伴大連金村從焉、天皇使大伴大連、問其田於縣主飯粒、縣主飯粒慶悦無限云々、　和名抄遊類云、肱目病源論云、肱目(今案肱即統字也、和名以比保又以乎女)手足遊忽生如豆鹿强於肉也云々、　新撰字鏡云、挑酰獣(三形同、有流反、醼也、伊比保)　世説德行篇云、股仲堪既有荊州値水儉、食常五盤盤外無餘肴、飯粒脱落盤席間、輿拾以啗之云々、　季吟云、飯ほして、もつゝるさは、持つるなり、かのあざらかなるといふに、破飯などもありしなるべし、その返報に米をさゝりてかへるな、口さがなき男どもばよめ持參せし飯を乾して、米にして持つるさざれいひたるさにや、さやのやは、やすめ字なるべし、眞淵云、飯糒して乞、米をもて魚をつるさえ、いをの代に米をやりたる故、米にて魚をつりたるほさ、ひそかにいふを、きゝてたはぶれにかける乞、【正】一本こゝろ〳〵さあり、【正】一本もつゝるさや原本もてる一本もつるさあり、今爲本、定本、抄本、黒本による、　○ところ〳〵　○せちみ　【増】原本もちひさあれど、こは和行一段活にしてもちねさかく方正しければ、今改めつ、【正】爲本せちいみさあり、　○こゝろもさなきにあけぬから　契沖云、心もさなきにあけぬから(句)舟をひきつゝのぼれども、さよむべし、またあけぬよりにて、夜をこめて、舟をひきのぼるえ、貫之集に、藤の花咲ぬるをみて、ほさゝぎすまだなかぬからまたるべらなる」入江昌熹云、から舟は、虚舟え、人ものらぬ事なりさ註せられしは、誤え、これまさしく貫之をはじめ、その外の人々も、のれる舟え、次の詞に、かくて舟ひきのぼるに、なぎさのねんさいふ所を見つゝゆくさ、有にて人ある舟なる事しるべし、是句讀の誤え、こゝろもさなきにあけぬから、舟をひきつゝさよむべし、あけぬからのぬはふのぬえ、弁内侍日記云、いまだよはあけぬしのから云々、此のふけぬものからの、ものを略したる詞さ心得べし、

のぼれども　【正】爲本のぼるさすれども一本のぼるさあり、和田のさまり　万葉六「濱清浦愛見神世自千船湊大和太乃濱」夫木廿五、左近中將具氏卿、「おほわだのうらわにこよひふれさめてきよきはまべの月をいざみん」

あがれのさころ　季吟云、あがれの所さは、道ゆく人のゆきわかるるちまたなるべし、一本脱の所さは、あがれ、あがれ、假字の似たるをみまがひて、文字をかけるにや、魚米などあきなふ所さいふにてきこゆ、眞淵云、退散を、まかであがるなどいへば、ゆきわかるゝ所なるべし、

上田秋成云、われ津國に生れたれば、このあたりの地理、大かたはあきらめたれど、此の島養より東北のかたに、今はさるべき所なし、こゝにわだの泊さあれば、澤船の泊する所なるべし、この川筋いにしへのままならねば、考ふる所なし、あがれの所は、別の所え、【正】爲本、附本さころの三字なし、又一本脱の所さあり、

いふ所あり　【正】妙本所の字なし、爲本ありをにに作る、

九日、こゝろもとなきに、あけぬから、舟をひきつゝ、のぼれども、川の水なければ、ねざりにのみぞねざる。このあひだに、和田のとまりの、あがれのところといふ所あり、米魚などこへばおくりつ、かくて舟ひきのぼるに、なぎさの院、といふ所を見つゝゆく。その院、むかしを思ひやりて見れば、おもしろかりけるところなり。しりへなる岡には、松の木どもあり、なかの庭には、うめの花さけり。こゝに人々のいはく、これむかし、名だたかくきこえたる所なり。惟高のみこの御もに、在原業平の中將の「世の中にたえてさくらのさかざらは春の心はのどけからまし、といふ歌よめる所なりけり。いまきようある人、

古今春上
伊勢物語

所に似たる歌よめり。

千世へたる松にはあれど

緩後撰雜上よみ人しらず

「りまたあるひとのよめる。

きみこひて世をふるやどの梅の花むかしの香にぞなほにほひける」

といひてそ、みやこのちかづくを、よろこびつゝのぼる。

●心もさなきに、あけぬから、舟をひきつゝのぼれども云々、季吟の説に、から舟は、虚ふねなり、人ものらぬ舟なりさいはれしは、甚しき誤りなり、こは標注にあげたる、契沖、入江昌熹などの説のごさく、あけぬから舟をひきつゝさ、句をきりてよみて心得べきなり、心もさなきにより、ふねをひきてのぼるさなり、●ねざりにのみぞねざる云々、ねざるさ云ふ詞の事は、正月十五日の條にいへり、●和田の泊は、攝津國西成郡なり、今大和田さいへり、すでに、万葉にも、大和太さよめり、同所なり、又おなじ攝津國のうちに、わたの海、和田の入江、わだの御崎、わだの松原、和田神嗣、和田津、和田笠松などあれど、みな八部郡なるよしなれば、和田の泊さ、同所にあらず、●あがれのさころ云々、この詞、心得がたし、関書には、村の名なりさいへり、季吟の説、眞淵の説、上田秋成の説などは、標注にあぐるがごさし、あがれは、眞淵の説のごさく、退散する意なれば、道ゆく人の、ゆきわかるゝ所を、今も旅路などの、外の道にわかるゝ所を、追分さいへる所さころなるべし、今いふ追分などの事なるべし、こゝにこゝろみにいへるのみ、すべて〳〵心得がたし、●惟高親王の事は、標注にあげたり、●世の中に云々、この歌、古今、伊勢物語などに出たり、さて一首の意は、さかぬほどは、さくさきまち、さくさきは、ちろなをしみ、さかりなるほども、雨をいさひ、風をおそれなど、愛するあまりに、心のいさまなきより、なべて世に、さくらさいふものゝたえてなくば、春の心はなか〳〵、のどかならんさなり、●いま興ある人所に似たる歌よめり云々、興ある人さは、船中の人々の中に、すぐれて興ぜる人をいへり、例の紀氏みづからをいへるなるべし、●千世へたる松にはあれど云々、この歌、しりへなる岡には、松の木どもありさいへる、その松をよめり、千世へたる心なり、むかしを、今さは、物ごさにかはりはてたれども、松風のこゑのみ、かはらずさなり、こゝのさむさは、さびしくすごき意にて、ふりにし所のさ

おくりつ　[正]定本、爲本、抄本、おこなひつとあり、

なぎさの院といふ所　河内志云、交野郡波太院(渚村)[正]爲本、附本といふ所の四字なし、へのさあり、○これむかし四位下名虎女、四位宮内卿、天安二年正月廿三日任太宰權帥、同十一月任帥、貞觀十四年七月出家、十五年二月薨、時年五十四、按紹運錄源氏系圖、共日、貞觀十五年二月薨、二十六歳、然據三代實錄、十六年益封則二書誤、今姑從伊勢物語云々、古今春上、なぎさの院にてさくらを見てよめる、在原業平朝臣、世の中に云々、附本心にさあり、○千世へたるの歌　万葉六、「一松幾代可歷流吹風乃聲之淸者年深香聞」、李白詩集卷廿二云、岸映松色寒、みなせといふ所に宮ありけり、しかごとの櫻の花ざかりには、その宮になんおはしましけり、時世へて久しくなりにければ、その人の名わすれにけり、かりはれんごろにもせで、さけをのみのみつゝ、やまと歌にかゝれり、いまかりするかたのゝなぎさの家、そのゝんのさくらごとにおもしろし、その木のもとにおりゐて枝を折りて、かざしにさして、かみなかしもみなよみけり、うまのかみなりける人のよめる、世の中に云々、となんよみたりける又人のうた、「ちればこそいとゞさくらはめでたけれうきよになにかひさしかるべき」[正]石分浪花碎、歐陽公集卷六云、[正]こゝの爲本、附本、黒本かぜにさあり、○きみこひての歌　續後撰雜上、貫之土佐の任はてゝのぼりける道にて、なぎさの院の梅花を見て、よみ侍りける、よみ人しらす、君こひて云々、○いひてぞ　[正]一本よろこびてさあり、

惟喬の親王のみこの家、そのゝんのさくらごとにおもしろし、その木のもとにて云々、○その院　[正]附本ここのさあり、○惟喬のみこ　[正]爲本これはさあり、○ところなり　古今集目錄云、惟喬親王、文徳天皇第一皇子、母後四位上紀静子、正五位下名虎女、四位宮内卿、天安二年正月廿三日任太宰權帥、同十一月任帥、貞觀十四年七月出家、十五年二月廿日薨、號小野宮云々、大日本史云、貞平九年十六歳、然據三代實錄、十六年益封則二書誤、今姑從伊勢物語云々、古今春上、なぎさの院にてさくらを見てよめる、在原業平朝臣、世の中に云々、附本心にさあり、○千世へたるの歌　万葉六、「一松幾代可歷流吹風乃聲之淸者年深香聞」、李白詩集卷廿二云、岸映松色寒、みなせといふ所に宮ありけり、しかごとの櫻の花ざかりには、その宮になんおはしましけり、時世へて久しくなりにければ、その人の名わすれにけり、かりはれんごろにもせで、さけをのみのみつゝ、やまと歌にかゝれり、いまかりするかたのゝなぎさの家、そのゝんのさくらごとにおもしろし、その木のもとにて云々、○ところなり　古今集目錄云、惟喬親王、文徳天皇第一皇子、母後四位上紀静子、正五位下名虎女、四位宮内卿、天安二年正月廿三日任太宰權帥、同十一月任帥、貞觀十四年七月出家、十五年二月廿日薨、號小野宮云々、大日本史云、貞平九年十六歳、然據三代實錄、十六年益封則二書誤、今姑從伊勢物語云々、古今春上、なぎさの院にてさくらを見てよめる、在原業平朝臣、世の中に云々、附本心にさあり、○千世へたるの歌　万葉六、「一松幾代可歷流吹風乃聲之淸者年深香聞」、李白詩集卷廿二云、岸映松色寒、

惟喬の親王のみこの家、そのゝんのさくらごとにおもしろし、その木のもとにて云々、○その院　[正]附本ここのさあり、○惟喬のみこ　[正]爲本これはさあり、○ところなり　古今集目錄云、惟喬親王、文徳天皇第一皇子、母後四位上紀静子、正五位下名虎女、四位宮内卿、天安二年正月廿三日任太宰權帥、同十一月任帥、貞觀十四年七月出家、十五年二月廿日薨、號小野宮云々、大日本史云、貞平九年十六歳、然據三代實錄、十六年益封則二書誤、今姑從伊勢物語云々、古今春上、なぎさの院にてさくらを見てよめる、在原業平朝臣、世の中に云々、附本心にさあり、○千世へたるの歌　万葉六、「一松幾代可歷流吹風乃聲之淸者年深香聞」、李白詩集卷廿二云、岸映松色寒、

まをいへり、清の院の、あれはてたるさま、思ひやるべし、●きみこひて云々、この歌も、中の庭には、梅の花さけりさ、ある梅をよめり、君こひてゝは、惟喬のみこをさせり、世をふるやどさには、清の院をいへり、さて清の院も、あれはてたれど、梅の花ばかりは、むかしの香にかはらず、なほにほへりさなり、

かくのぼる人々の中に、京より下りし時に、みな人子どもなかりき。いたれりし國にてぞ、子うめるものどもありあへる。みな人、舟のとまる所に、子をいだきつゝ、おりのぼりす。これを見て、むかしのこのはゝ、かなしきにたへずして。

なかりしもありつゝかへる人の子をありしもなくてくるがかなしさ」といひてぞなきける。ちゝも、これをきゝて、いかゞあらん。かうやうのこと、うたのこむとて、あるにしもあらざるべし。もろこしも、おもふことに、たへぬ時のわざとか。こよひ、うち野といふ所にとまる。

●いたれりし國さは、土佐國をいへり、土佐國に、くだりし時までは、みな人、子どもなかりしを、それすら今は、子どもなどもいできて、舟のさまる所にては、子をいだきて、舟におりのりするを見て、かの國にてうせにし子の、事を思ひいだせしなり、●なかりしも云々、みな人子のなかりしも、かの國にていできなどしたるに、われはありし子もなくてかへるが、かなしさなり、●かうやうのこと、うたのむとて、あるにしもあらざるべし云々、眞淵云、歌このむとて、かやうによむにもあらず、思ひに堪ぬ時のわざなりさえ、●もろこしも、こゝも、おもふことに、たへぬときのわざさか云々、和漢ともに、詩歌なぞ詠するは、おもふことに、堪ざる時のわざぞさなり、上田秋成云、宇土野は川の西にて撰津國嶋上郡也、

十日、さはることありてのぼらず。

●のぼらずさは、舟をいださざるなり、

十一日、雨いさゝかふりて、やみぬ。かくてさしのぼるに、東のかたに、山のよこをれるを見て、人にとへば、八幡の宮といふ。これをきゝて、よろこびて、人々をがみたてまつる。山崎の橋は見ゆ。うれしきことかぎりなし。ここに、相應寺のほとりに、まばし舟をとどめて、とかくさ

清水八幡宮略記云、有行教恒時欲奉拜大菩薩、爰以去貞觀元年參拜豐前國宇佐宮、一夏九旬已畢、欲歸本都之間、以七月十五日夜行、教示仰宣吾深慮應、汝修善須近都移坐鎭護國家(中略)仝廿日上京、八月廿二日到山崎離宮邊、同廿五日夜示宣可移坐之趣、石清水男山云峯也(中略)錄上件由參上公卿令奏聞奏、同九月十五日下勅使令實撿點定、次宣下木工僧允瑗基、令造六宇寶牒已了、貞觀五年正月十一日建立大安寺傳燈大法師位行教云々、この外、石清水八幡宮の事は、三代實錄類聚國史其外あまた見えたれどこゝに引ず、よろこびて　[正]定本此の五字なし、

山崎のはし　假日本紀卷三十八云、延暦三年七月癸酉、仰阿波讃岐伊豫三國、令造山崎橋斷材、水鏡云、聖武天皇神龜三年、行基菩薩山崎の橋をつくりて、そのうへに法會をまうけて供養し給ひし云々、此の事、作者部類にもみえたり、○相應寺　三代實錄卷十三云、貞觀八年十月廿日辛卯、勅山城國乙訓郡相應寺者、元是漁商比屋之地也、往年構僧正遍演、泛水觀行橋頭、遣天暑熱、上岸風涼、有一老嫗、避舍隣地、壹演便在其中、聊作壁法、鋌平地中、得舊佛像、因緣相應、隨瑞顯現、太政大臣歎其希有、奏建道場、即發工夫忽備、輸遂定寺名以爲相應、宜賜四履永爲寺堺、東至橋道、南至河岸、西至作山、北至大路云々、○さゝれ波の歌　[正]一本この字なし、又原本ゝげの三字なし、今定本、抄本、證本、一本によりて加へつ、○岸のほとりに柳おほくあり　[正]抄本柳ののもとになし、爲本、一本おほかりとあり、○とゞめん歌　[正]一本歌の字なし　後撰春上、きのとものり「水のおもにあやふきみだる春風やいけのこほりをけさはやまざき　類聚國史卷卅二云、弘仁四年二月己亥、遊獵于交野、以山崎驛、爲行宮云々、同五年二月乙未、遊獵于交野、日暮、御山崎離宮云々、帝王編年記卷五云、仁徳天皇十一年十月、掘難波江、築茨田堤、今山崎河通海是堀江也云々、[正]さゝれり定本、抄本ありとあり、

だむる事あり。この寺の岸のほとりに、柳おほくあり。ある人、この柳のかげの、川のそこにうつれるを見て、よめる歌。

さゞれなみよするあやをばあをやぎのかげのいとしておるかとぞ見る」

●さしのぼるは、舟に棹さしのぼるなり、●山のよこをれるを見て云々、よこをれるは、谷川士清の既に、横折の儀なりと、いへるがごとく、山のかたちのよこたはれるをいへるなるべし、よこをりふせるさやの中山など、あるゝと同語なり、●八幡の宮の事は、標注にあぐるがごとし、山城國久世郡なり、●相應寺のことも、標注にあぐるがごとし、山城國乙訓郡なり、●山崎の橋のことも、標注に見ゆむることあり云々、こは京にちかづくにつけて、何やかやと京にいちん用意など、おきてさだむるをいへるなるべし、●さゞれ波云々、万葉に、小浪をさゞれなみとよみ、和名抄に、泊瀬を、さゞらなみと訓ぜり、皆同下ことにて、いさゝかなる波をいへり、よするあやは、波文をあやに見なしていへり、あやさいふより、陰の糸ともおるかなれば、拾葉本、類從本、異本なさによりてあらたむ、

十一日、やまざきにとまれり。

●山崎も、山城國、乙訓郡なり、いまだ船中なれば、山崎の川にゐしなるべし、

十二日、なほ山崎に。

●なほ山崎にありさいふを、に文字にふくめたるなり、

十四日、雨ふる。けふ車(牽)ねてきたれり。舟のむづかしさに、ふねより人の家に(車)

●車を京へとりにやりたりさなり、こゝより車にて、京へいちん料なり、

十五日、けふ車ねてきたれり。舟のむづかしさに、ふねより人の家にうつる。この人の家、よろこべるやうにて、あるじ(設)(主人)もてなしたり。このあるじの、またあるじのよきを見るに、うたておもほゆ。いろ〳〵にかへりごとす。家の人のいでいり、にくげならず、ゐやゝかなり。

●きのふ、京へとりにやりたる車をけふ率てきたれりさなり、●舟のむづかしさに云云、むづかしは、こゝにては、わづらはしき意なり、標注にあげたる證など、考へあはすべし、六借さかけるは、たゞ借字のみなり、●あるじ主人をいふ、●ある下ものまたあるじのよきを見るに云々、このあるじは、家の主人をいふ、またあるじのよきさは、饗應のよきを云ふ、家のあるじの、心もちひのよきさうへに、また饗應さへよければ、うたて思ふさなり、●うたておもほゆ云々、うたては、標注にくはし、恐はあやしくよのつねならぬをいへるなるべし、●家の人の、いでいりにくげならずゐやゝかは、原本、いやゝかさあれど、中古のくせにて、假名のたがひなること明らかなれば、爲家卿本、拾葉本、新從本などによりてあらたむ、さてゐやゝかの、ゐやは、禮にて、やかは、下へつけたる詞にて、物を形容したる語なり、花やか、あてやか、すみやか、すくやか、おだやか、こまやか、ゆるやか、なごのたぐひのやかなり、いやゝかさあるにつきて、季吟の説もあれば、標注にあぐ、又わがさも長野美波留が新撰字鏡に疎らすさなり、いやゝかさあるを、こゝに引たれど、別の事なれば、引用るにおよばず、

きたれり　[正]抉本、抄本きたりさあり、

むつかしさに　大和物語云、さうそくきよげにし、むつかしきことなどもなくて云々、宇津保藤原君云、あやしくれいのむつかしきものつれにみせ給ふ云々、源氏帚木云、ちゝのさしおいものむつかしげにふさりすぎ云々、夫木八「くもはれぬさ月きぬらしたびごろもむづかしきまであまゝめりして」

うたて　古事記云、侍其大長谷王之御所、人等白、宇多良物云王子放賜偃云々、万葉十二「何時奈王不戀有登者雖不有得田直比來戀之繁毛」古今春上「ちるさみてあるべきものを梅の花うたて匂ひの袖にさまれる」賀之集云、これはこゝにいますなる神のさ給ふならん、さしごろやしろもなく、ふるしもみえねど、うたてある神ごと云々、眞淵云、

うたては、そがうへに物のかさなりたるやうのことにも、思ふにたがひがちなる事をもいふ、こゝは、あまりなるまでの意にて、あるトのときに、その家の人などのよくものおこなふを、かくまでは、いかでかされんくよしさいふ之、次に、家の人のいで入りまでさいふにても云れ、〔增〕うたてはうたいと々、夕云、百官恭敬往來之、狀既如王子之坐所云々、季吟云、いやしくかさは、うやくしく禮儀のたゞしきさまなるべし、妙源院本には、蟲の字なかけり、阿房宮賦に、長直視之、如何、谷川士清云、ねやしか、眞名伊勢物語に、いと儼に實用と見えたり、ねやは、敬禮をいふ、やかは、辭ん、實用は實目の誤にや、まめさよむべし、又ぶちめとも、同書にいやめくさいふは、儼なる意なりさいへり、〔正〕爲本うやしけし一本ねやしげなりさあり、夕つかた　〔正〕一本くれつかた

定本、抄本、別本ようさつかたさあり、

ついでに　〔正〕爲本まゝにさあり、

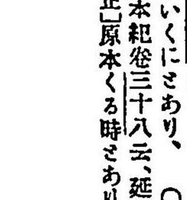
山崎のたなゝる　椎駒古今注云、肆、所以陳貨鬻之物也、店、所以置貨鬻之物也、肆、陳也、店、置也、宇治保藤原君云、むなしきほつみてもてきたり、あづかりごもよみさりて、たなにすゑうる云々、庭訓往來云、市町者通辻子小路令擺見世棚云々、下學集云、見世棚、通歩色葉集卷四云、見世棚、〔正〕たなゝるの四字妙本なし、〔補〕弘庵云、見世棚の圖、參考のため左に載す、

十六日、けふの夕つかた、京へのぼる、ついでに見れば、山崎のたなる小櫃の繪も、まがりのほらのかたも、かはらざりけり。うる人の心をぞ、ふらぬとぞいふなる。かくて、京へゆくに、島坂にて、人あるじしたり。かなずしも、あるまじきわざなり。たちてゆきし時よりは、かへる時ぞ、人はとかくありける。これにも、それにも、かへりごとす。

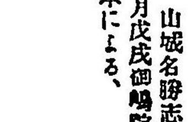
●山崎のたなゝる云々、原本にたなゝるの四字なけれど、脫文なる事明らかなれば、爲家卿本、附注本、異本なそによりておぎなふ、たなは、椎駒古今注に、唐所以置貨鬻之物也さいひ、宇津保物語に、たなにすゑてうるさいへるがごと、物をうる所をいへり、今も、田舍などにては、物をうる所をたなさいへり、こゝは古昔ののこれるなるべし、さて店は、今いふ見世の事なり、中古見世さもいへり、見世店の古圖は、わかもたるかゝみわりさいふ冊卷に見えたり、この圖は、今いふ見世の事なり、岩淵曙が竹葉集に出たれば、ひらき見てあるべし、●小櫃の繪も云々、眞淵の說に、ちひさき櫃に繪をかきて、童のもてあそび物にうるにやさ、いはれしがごと、ちひさき櫃に、繪をかきしなるべし、ひらき見てあるべし、●まがりのほらのかたも云々、まがりに、二つあり、一つは、食物の名なり、一つは器物のかたなるべし、さてその繪餅な、法螺貝のかたちにつくりたるを、まがりの法らさいふ、この圖に、種々の圖を出せるが中に、法螺貝などの形に、似たるもあれば、それらを、ほらのかたさはいへるが、又諸國奇遊談にも見えたれど、こゝにはあげず、猶まがりの事は、標注にくはしくあげたり、既に契沖も、こゝなるまがりは、食物のかたに主たかはれぬ、今一つの器物のまがりは、落久保物語、禁秘御抄、徒然草などに見えたり、これも標注にあげたり、●小櫃の繪もまがりのほらの繪餅のほら貝のかたちも、かたもかはらざりけり、うる人の心をぞふらぬ云々、こは山崎の店にある小櫃の繪も、土佐の國にくだらざりし以前にかはらざりしなるべし、●島坂にて云々、島坂は山城國、乙訓郡なり、櫻日本紀に、世の中の人の心つれなく、かはりやすきものなれば、こゝさらにかくはいはれしなるべし、●人のあるトきたりは、いでむかひなどに、來し人の饗應せしなるべし、●かならずしもあるまじきわざなりさはいへるなり、眞淵の說に、下のたちてゆきし時よりは、くる時ぞ人はとかくありけるさ、いふへつゞく詞と見られしはたがへり、こゝなるまがりは、食物のかたに主たかはれぬ、今一つの器物のまがりは、落久保物語、禁秘御抄、徒然草などに見えたり、これも標注にあげたり、●小櫃の繪もまがりのほらの繪餅のほら貝のかたちも、かたもかはらざりけり、うる人の心をぞふらぬ云々、こは山崎の店にある小櫃の繪も、土佐の國にくだらざりし以前にかはらざりしなるべし、●島坂にて云々、島坂は山城國、乙訓郡なり、櫻日本紀に、世の中の人の心つれなく、かはりやすきものなれば、ここさらにかくはいはれしなるべし、●島坂にて云々、島坂は山城國、乙訓郡なり、櫻日本紀に、島の院さあるもこゝなるべし、●人のあるトきたりは、いでむかひなどに、來し人の饗應せしなるべし、●かならずしもあるまじきわざなり云々、こはあるトせし人の、勞をいたはりて、ふへつゞく詞と見られしはたがへり、眞淵の說に、下のたちてゆきし時よりは、くる時ぞ人はとかくありけるさ、いりけり云々、任國におもむく時は、陳略なる人もありしかど、今歸京のをりには、追從にや、むかへなどに、くる人もおほしさいへるなり、さてそのむかへに來たる人々に、それにも、これにも、返報をなすさなり、

小櫃の繪もまがりのほらのかたも　大安寺資財帳云、合赤檀小櫃壹合云々、和名抄木器類、櫃（和名比都、俗有長櫃韓櫃折櫃小櫃等之名）厨向上開圖器也、

安德天皇御五十日記云、長櫃六十四納繪櫃二合俱馬國獻之云々、季吟云、やまざきの小櫃の繪さは、任國におもむき給ふ時、見證たまへる物さもなるべし、ちひさき櫃ひつに繪をかきし在家の寶物のまろしなるべし、ちひさき櫃に繪をかきたるを、童の玩物に寶るにや、諸國奇遊談云、今は繪櫃さいひて、洛北の村里には、三月節句などには、かならず用ふ予がをさなき時までは、都にても用ひし故に、二月の末には、寶あるさしことなるに、云々、齊樂粗敎（樂音還粗敎見下文）楊氏漢語抄云、樂餅（形如藤葛者也、和名萬加利）拾遺物名、まがり、よみ人しらず、「かすみわけいまかへるものならばあきくるまでにこひやわたらん」契沖云、まがりは、賀茂の神供に今もあり、伊勢國などにて、大觀餅さいふ類之、附注云、まがり餅之、閑夏に餅をまがりさいふ、山崎よりほら貝のなりなる餅を、あぶらあげにして、京都へいだすこ、東寺にて稻荷祭の時、これを供す、庭訓に伏見曲煎餅云々、季吟云、異本に、ほらのかたさは、法螺にや、いまもほら貝のなりほらの字之、水飲器にて興福寺などにも、あるものこ、ほらなどのやうに、形をしたるをいふべし、かやうのものをうる家のまろしなるべし、諸國奇遊談云、八幡宮の北ノ御門のほとりにして神供をそなふ、その神供の御棚に、樂餅をもりたり、この樂餅さいふから菓子、上賀茂下賀茂などの大社には、今もそなふる事なれども、このさころにてはさにいにしへまのばれぬ、さるは、土佐日記に云々さみゆ、むかしはこのさころにて、賣りたるこさ見えたり、さて今は、樂餅、法螺、粗粗さて三品のかたちあるこ、今の世のほらがひ餅、きんさう餅さいふ餅の名あるも、ふるきためしならずや、この御社にては、樂餅をのみ奉るこさなれど、ここのついでにかきつくるこさぞかし、禁秘御抄每日次第云、女房御楊枝二雙指御髮御まがりまゐらせんさいふ云々、落久保物語云、御まがりして、たちはきにいできよげにて、くはせたれば云々、徒然草云、久我相國は、殿上にて水をめしけるに、主殿司土器をたてまつりければ、まがりをまゐらせよさて、まがりしてぞめしける云々、徒然草野槪云、貝チスリテ作レル飲器チマガリト云、云々、〔正〕ほら定本おほぢさあり、〔增〕左の圖は山崎社四月八日頓宮御棚御供物の樂餅（マガリ）の圖なりさて、藤原秀向なるものゝ寫したるものなり、今參考の爲に左に載す、〔補〕弘庵云、樂餅の圖、此の外倭漢三才圖繪、集古圖等にも見えたれど皆大同小異之、按に、本草綱目には環餅に作れり、字典を考ふるに樂、環通字之、されば、圖の如く卷りたる油揚の餅をいふなるべし、尚參考の爲、集古圖所載、大膳職製造の圖を、左に併載す、



頓宮御棚供樂餅圖



大膳職製造ノ圖

集古圖所載

○うる人　〔正〕定本うり人さあり、

六云、鳴坂土人云、向明神南町端石塔寺南有小坂此所也、

宴五位已上、召文人令賦曲水賜祿有差、

○それにも　〔正〕原本くる時さあり、今一本による、

○ゆくに　〔正〕抄本いくにさあり、

○鳴坂　山城名勝志卷

○かへる時ぞ　〔正〕定本、抄本此の四字なし、

夜になして、京にはいらんと思へば、いそぎしもせぬほどに、月いでぬ。かつら川、月のあかきにぞわたる。人々のいはく、この川、飛鳥川にもあられねば、ふちせ、さらにかはらざりけりといひて、ある人のよめるうた。

久かたの月におひたる桂川そこなるかげもかはらざりけり」また

ある人のいへる。

あまぐものはるかなりつる桂川そでをひでゝもわたりぬるかな」

また、ある人よめる。

かつら川わがこゝろにもかよはねどおなじふかさになかるべらなり」京のうれしきあまりに、歌もあまりぞおほかる。夜ふけてくれば

ところ〴〵も見えず。京にいりたちてうれし。

●夜になして、京にはいらんと思へば云々、旅よそほひにて、見ぐるしければ、夜になして、京にいらんと思ひて、いそぎもせざりしかば、むかへの人々などの、かへりごとや、何やと、ひまどりしうちに、皆の日もくれて、よになりて、月もいでぬとなり、●かつら川、月のあかきにぞわたる云々、桂川は、山城國葛野郡なり、●飛鳥川にもあられば、ふちせ、さらにかはらざりけり云々、飛鳥川は、大和國なり、飛鳥川ふちせかはれるよし、ふる〳〵、かつら川は、飛鳥川ならねば、ふち瀬さらにむかしにかはらずとなり、●久かたの云々、かつら川さいはんとて、久かたの月におひたるさはいへり、さて月さいへば、そこなるかげもさは、いへるなり、月におひたるかつら川さは、月中のかつらの事なり、この事は、正月十七日の條にいへり、ひらき見てむべし、●あまぐもの云々、あまぐもは、天雲なり、はるかさいはん枕詞のみ、さて一首の意は、土佐國より舟出せしかづきしをよろこべる意もこもるべし、眞淵云、天雲さあるより、いひ下したれば、はるかなる月のかつらさ名におへる川に、袖をひたしてわたるよさいへるなり、●かつら川云々、眞淵云、ふかさは、京へかへりし、よろこびのふかさなり、わがよろこびのふかさに云々、京へかへりし、うれしさに、歌もあまりなるまでおほしさなり、さて、夜もふけたれば、所々も見えずさなり、●京にいりたちてうれし云々、かへすゞ〳〵よろこべるさまをかけるなり、こゝらのさしをへて、京にかへりたるなれば、うれしさ、さもあるべし、

家にいたりて、門にいるに、月あかければ、いとよくありさま見ゆ。きゝしよりも、まさりていふかひなくぞ、こぼれやぶれたる。家をあづけたりつる人の、心もあれたるなりけり。なか垣こそあれ、ひとついへのやうなれば、のぞみてあづかれるなり。されば、たよりごとに、物もたえずえさせたり。これよひかゝる事と、こわだ（堅）かにものもいはせず、いとはつらく見ゆれど、心ざしはせんとす。さて池めいて、くぼ（高）まりて、水づける所あり。ほとりに、松もありき。五年六年のうちに、千年やすぎにけん、かた枝はなくなりにけり。いまおひたるそまじれる。おほかた、みなあれにたれば、あはれとぞ、人々いふ。思ひいでぬ事なく、思ひ戀しきがうちに、この家にてうまれし、女子のもろともに、か

家にいたりて　長明無名抄云、或人云、貫之がさしごろすみける家のあさには、かての小路よりはきたり、さみの小路よりはひんがしのすみなり、

まさりて　【正】原本ましてさあり、今爲本による、

やぶれたる　【正】爲本やぶれの三字なし、

家をあづけたりつる云々　眞淵云、受領にゆくには、みなあてゆけば、もとの家には、一人もさゝめず、隣のかたの人に、あづけおきてゆくなど、いさゝかそぎたる事と、受領のえもの、おほしさいへども、さるほどのこともなきにや、【正】心もあれたる一本あれにたるさあり、

やうなればのぞみて云々　【正】爲本ごさくさあり、あづかれるなり爲本なりけり又されば定本、抄本さるはさあり、

えさせたり　【正】原本えさせた

へらねば、いかゞはかなしき。舟人も、みな子いだきて、のゝしる。かゝるうちに、なほかなしみにたへずして、ひそかに心しれる人と、いへりけるうた。

うまれしもかへらぬものをわがやどに小松のあるを見るがかなしさ」とぞいへる。なほあかずやあらん、またかくなん。

見し人を松のちとせにみましかばとほくかなしきわかれせましや」わすれがたく、くちをしきことおほかれど、えつくさず。とまれかくまれ、とくやりてむ。

●家にいたりて云々、紀氏の家の邪は、長明無名抄にいでたり、標注にあぐるがごとし、五年の任國のあひだに、家もあれたるよしかれて聞しかど、きゝしよりも、まさりて、あれはてしさなり、●いへなあづけたりつる人の、心のあれたる邪をいひて、さてかくあれたるは、家をあづけたりし人の、心のあれば、くさ垣こそあれ、ひとつ家のやうなれば、のぞみてあづかれるなり云々、なか垣は、中をへだてたる垣をいふ、この家をあづけたりし人はさなりにて、中垣はあれども、一つ家のやうなれば、みづからわれあづからんさ、のぞみてあづかりしさなり、されはたえずたよりあることに、家を修復せん料も、おくりたりしを、かくあらしはてたる邪よさなり、●こよひかゝることさ、こわだかに、物もいはせず云々、こわだかは、整高なり、さてこゝの意は、かくのごさく、家をあづけたりし人の、疎略なりし故に、かく家もあれはてたれば、從者どもの、日々にいへるを、さすがに、さしごろ家をあづけたりしものなれば、こよひはかゝる邪さ、口々にいはせずさなり、●いさはつらく見ゆれど云々、いさはの、はもト心得がたし、衍字なるべし、異本に、はもトなきもあれど、眾本によりてけづりはぶけば、人のうたがひあらん邪をおもひて、もさのまゝにておきつ、さてこゝの意は、かく家をも、あらしはてたれば、いさつらしと思へど、されど、さすがに、久しく家をあづけしものなれば、そのかへりごさをばせんさなり、●さて池めいてくぼまり、水づける所あり、ほさりに松もありき云々、

ろさあり、今爲本、群本、抄本、黒本による、

こわだかに云々　竹取物語云、かぐや姫いはく、こわだかになのたまひそ、やのうへになる、人どものきくに、いさまさなし云々、宇津保藏開上云、かゝるほどに、さらの時ばかりに、うまれ給ひてこわだかに、なきたまふ云々、菜花つぼみ花云、御ものがたりをこわだかにせさせたまひてうちみ〳〵せさせ給へば云々、眞淵云、かくあれたる邪など、こわだかにいはせぬ也、さなりの人のきけば也、つらくみゆれどは、さなりの家をあづかりし人の、心つらくみゆれど、さすがに五六年も家をあづけたれば、心ざしなばせんさなるべし、[正]いさは一本、黒本はもトなし、心ざしは爲本をはさあり、

くぼまりて水づける所云々　[正]原本てもトなし、又所あり爲本ありきさあり、

かた枝は松もさあり、[正]爲本おほかた　取らず、[正]定本おほかたのさあり、

思ひ戀しき　[正]定本、抄本思ひの二字なし、

かなしき　[正]爲本、抄本かなしきにさあり、

舟人も云々　眞淵云、舟人は、舟にのりてきたりし人なるべし、

上田秋成云、舟人は、舟にのりて來りし人なるべし、さいふ注猶きこえがたし、かく舟人さいひては、一わたり舟士等の事に、きゝなさるれど、舟よりのぼりこし人さいふ義にや、此の記の文勢あまりに、言をはぶきたるやうなるが、さころごころに多ければ、こゝもしかこゝろえてあらん歟、[正]いだきて定本、抄本たかりてさあり、[增]黒川眞頼云、舟人は、楫取をいふにあらず、官之の從者等にして、舟におなじくのりて、來れりし人等をいふ、即ち其人等の土佐任國中、子をまうけて、これを抱きて、のゝしる之、女子を失ひたる心には、特に目立て見ゆるなり、

かなしみ　[正]定本、抄本かなしきさあり、

うまれさあり、　[正]原本かくの二字なし、今抄本、別本、黒本、證本によりて加へつ、

のやりすてたる文を見るに、　○さくやりてん　後撰雜二、もさよしのみこ、「やれば

ばあげず、[增]弘恭云、此日記は、日記さいふ日記の中にも、になく妙なる雅づかひなることは、既におのれが文話また證本のうちにいへる如く、行文は悉く洒落なれども、その法いさ嚴之、まづ冒頭に「こゝろみんさてするなり」さ伏案をおきて、結尾に「さくやりてん」さ結べるは、もさより世の人に見せんさてにはあらず、たゞ、こゝろみにものしたるなれば、さくやりすてよさの意之、なほ冒頭、首尾、抑揚、波瀾、對句、照應などの悉しきことは、おのれ既に證本にいへれば、こゝには洩しつ、

むかしは、池なりし所なれど、あらしはてたれば、みくさおひたるが、池めいてくぼまり　水づけるやうに見ゆさなり、こはあれはてしままを、つよくいはんさて　かくはかけるなり、●五年六年のうちに、千年やすきにけん云々、延長八年、土佐國にくだりて、いま承平五年なれば、前後六年なり、されば五させ六させのうちさはいへり、十二月廿一日の條に、四させ五させはてゝと、ある邪を見ても思ふべし、さて池のほさりにありし松も、五六年のあひだに、かたえはかれなどして、千させもすぎしやうに思はるゝなり、●いまおひたるぞまじれる云々、松の木に、いまおひたる小松も、まじれりさなり、こは下に、うせにし子の邪をいはんさて、まづこまつのあるこさをここさらに、かくはかけるなり、●思ひいでぬ事なく思ひこひしきがうちに云々、むかしのこさゝも何こさゝなく思ひいでゝ、思ひ戀しきなかにも、わけてこの家にてうまれし女子の、もろさもにかへらぬが、かなしさなり、●舟人も、みな子いだきてのゝしる云々、季吟云、ふなびさゝは、楫さりにあらず、舟にのりてきたりし人なるべし云々、上田秋成が說もあれば、標注にしるす、●うまれしも云々、まへの詞に、いまおひたるぞまじれるさ、うまれし子も、かへらぬものを、むかしはなかりし小松も、今はおひたるなどを、見るにつけても、むかしの子のこさを、思ひいでゝかなしさなり、●見し人を云々、見し人は、うせにし子をいへり、さてその子の、松の千年のごさくに、ながくあらんを見ましかば、かく、さほくかなしきわかれは、すまじきをさなり、●わすれがたく、くちをしきこさ、おほかれどえつくさず云々、なほむかしのこさや、うせにし子の事など、わすれがたく戀しきこさゝも、おほけれどもさのみはさて、えかきつくさずさなり、●さまれ、かくまれ、さくやりてん云々、さまれ、かくもあれ、すべて、物を破るか、やるさいへり、後撰に、やればなしさもいひ、枕草子に、やりすてたるさも、又狹衣に、やりほぐさもある、やりは破りなり、さてこの意は、かやうのいたづらなる邪は、外の人に見えんも、わづらはしければ、さく破りすてんさなり、こは紀氏みつからを、謙退していはれし詞なり、

○さぞいへる　[正]扶本、此の五字なし、

○見し人を　[正]定本、抄本人のさあり、

○さくやりてん　[正]扶本人々さあり、

○かくまれ　[正]扶本かくなすまされり」　○またかくな　[正]抄本か　枕草子云、人

訂正增補 土佐日記考證下 終

訂正増補　土佐日記地理辨

この土佐日記地理辨のなれりしことのよしを、ひとわたりきこえ待るべし。そも〳〵この日記は、記行のおやにしあれば、昔よりこれかれ、注釋どもおほかれど、かの朝臣の住たまひし國府のあと、かつは日記中に出たる地理などを、さだかにとけるものなし、そは吾土佐の國は、むかしより他國の人の、みだりに入來ることを、かたく禁めらるゝことにて、くはしき事のしらるゝよしなければなるべし。おのれ幸に、この國に生れたれば、これらのことをたゞしてんとおもへるからに、この日記の注釋の書どもをあつめ、また此國の古老の傳說等をも、もらさずかきあつめしてもたりながらも、せはしく過し來つるを、さきつとし、大人よりおこせたまへりし御ふみの中に、橘守部が土佐日記舟の直路の圖は、いとくみだりなることのみにて、いたくたがへる所多ければ、いでこたびこそ、年頃の本意をもはたしてめと、ふ

たゝび思ひおこしぬれど、公私のいとまなき身にして、とみにかきつゞりがたければ、鹿持雅澄にかう〳〵とかたりぬるに、そはいとよきことなり、取集められたる注釋のものども、おこせたまひなば、おのれかきつゞりてむといへば、いとうれしくて、其のかうかへになるべきものは、みながらおくりおきぬるが、日をへず草稿なりぬ。猶よみあはせなどすべきよしいひおこせたるを、何くれとさはらふ事ありて、えものせざりしまに、雅澄俄に病て、つひになき人のかずに入ぬるこそ、かなしとも、くちをしとも、いはむかたなかりけれ。されど其まゝに、うちすてておくべきにあらぬものから、何となくたゆまれてのみありしを、こたび學の友なる松本弘蔭と、かの草稿をよくよみかうがへ正し、圖は弟なる益壽に、かきあらためさせて、おくりまゐらするになん。あなかしこ。

紀の海の深き心の有てよにいまもとはるゝ土佐のうらさと。

彌生初八日

早崎　益

中島廣足大人御もとに

此せうそこは、此辨の一巻にそへて、早崎ぬしよりおこせられしなるを、其地理の事、おのれが問につかはしゝは、今は十年にもおほくあまりぬべし。こたびこの辨書を得て見れば、かの地理のこと、いともかならずもたるべき書なれば、いかで世にひろくせまほしくて、早崎ぬしに、其事かたらひしに、さばかりめでたき日記に、書きたるふるき所々なれば、これはかりはとて、國の御ゆるしも有しよし、いひおこせられしかば、やがて龍章堂のあるじにことはかりて、板にゑらすることゝはなりぬ。かくておのれ一首をとありしを、此せうそこにて、其よしはつばらなれば、今ことさらにやはとて、さながら巻のはしめに、うつし出つるになむ。

文久元年八月の望はかり

中島廣足

土佐日記地理辨

この書の注釋は、これかれ多かる中に、土佐日記抄は、北村季吟の作にして、世にあまれく人の見る所なれば、いふまでもなし、岸本由豆流がいへるやう、土佐日記聞書は、誰人の作をしらず、元和寛永の頃の人のかけるものとおぼえし、土佐日記打聞は、小野山隱士槃栄記とありて、その年月をのせず、土佐日記附注は、人見卜幽といふ人、万治四年に著したるよしなり、土佐日記注は、契沖と、岡部衛との説を、藤原宇万伎がしるせるものなりとかや、土佐日記打聞は、これも岡部衛の説に、楫取魚彦が自らの説をも加へ、抄の説をもとりて、記せるものなりといへり、其後近き頃に至りては、かの由豆流が文化年中に、土佐日記考證を著し其後には、香川景樹の土佐日記創見あり、橘守部が土佐日記舟の直路あり、かくあまたの注釋を取わつめ考へ見れば、今は餘蘊すくなかるべし、中にも、後にいでたる注書は、先に出たる考證の是非を取捨して、其の得たりと思へるにより、勝れること有べきはさらなり、然れども此日記には、土佐國の地名を多く記されたるが、右の種々の注書ども、何れもみな、本國人の手になれるものならねば、其地理のことをいへるに至りては、かたぶかるゝことの許多あるによりて、此書をとり見る人の、なほいぶかるもうべなる事なり、げに地理をさだかに辨へずば、あやまりては、前後の文味に、打あひがたきこともあればなり、こゝに長崎なる中島廣足翁、この日記に出たる、土佐の國の地理をたゞして示されたきよし、此度早崎益の主に、懇ろにこひおこされたるに、香かに答へやらまほし、いかでくとかの主のそゝのかさるゝことしばくなり、辞譲もさより、土佐日記の事は、深く考へたる事もなく、年頃たゞ諸注にゆづりてのみ、過しきたれるものから、しかすがに、かの日記に載られたる地理の事は、みづからに生れし國のことなれば、まのあたり見及び、古く聞おけることもあり、然りさいへども、千年に近き昔の事にて、そのかみうみたりしが、あながちに定めてはいひ難きこともあれど、そは容易からざるわざにて、ふかく考へ精くくしくなれるもあれば、つばらなることは、後の俤にゆづりて、姑らく大方の圖を、吾嬬松本弘臣にかきあらはさしめ、こしかた見聞したるまゝをかきつけたるになむ、

館 日記十二月廿一日條 すむたちよりいでゝ、舟にのるべき所へわたる云々。

たちは、國府の館なり、和名抄に、土佐國、國府在長岡郡と見ゆ、こは長岡郡日吉村にあり、其日吉村は、古へは江村郷に屬したるなるべし、和名抄長岡郡、江村(衣牟良)さあり、土佐郡、今の高知城を東に距ること、今道二里餘あり、國府のありし跡を、里俗内裏屋敷と稱へり、又そこに内裏ぐろと云ひ傳ふる所あり、紀子爵跡の碑そこに建てり、此の内裏ぐろの西を、瓦畑と云ふ、昔古瓦多く出けるによりてかくいへり、今に瓦の小片まゝ出づることありて、其中に菊紋の瓦甚稀なり、いづれも布目ありて、今の製に異なり、そこより東一丁餘に、御門前と云ふ所ありて、當昔國府の門、そこにありしといふ、又其所より、西南の方一里餘に大津あり、又中西の方、十町ばかり

に國分寺あり、日記に十二月廿四日、讃師うまのはなむけしにいでませりとある讃師は、即ち當國の國尼の長にて、これ國分寺の住職なり、又其所の東南をめぐり、西になが れて海に入る川を、國府邊と云ふ、石清川とも云ふ、其水を曳て田地にかくる溝を、國府堰と云ふ、すなはち府跡の南にあり、又南の方、四丁ばかり野地村の内に、冝之主の觀月松と云ふあり、そこの地名を月の木といふ、其西北を松の妻と云ひ、東南を松の裡といふ、中秋の頃、この松の梢より月の出登るを、府館より紀氏見て愛翫せられしと云ふ、はやくの年古の松は枯失けるを、今ある松は、里人これを植繼けるなりといふ、當國總社、昔は、國府の西にありけるを、中古國府寺の境内にうつせりといへり、かくて國府の跡は後に一望の田となりて、たゞその名のみ存れるを後世までも、里人たゞ紀氏のみを知りて墓へるは、延歟の巧に劣れしのみにはあらす、其治教も又こよなかりしによりて、其榮名の朽ざる故にぞあらむ、かゝるを天明の年間、尾池春水と云ふ人、日吉村なる高村自安高村朝海等とはかりて、國君に告げて碑文を誌てむことを乞ふ、すなはち國君筆とりて、紀子孟跡碑の五字を篆文にてかきてあたへたまはる、碑陰に、侍從藤原惟孝卿の歌をきざめり、其歌は、つく、これ國君第九世、靖獻院殿寛公なり、篆額の下に、楠大納言藤原資枝卿の歌をきざめり、其歌は、

あふく世にやさりしところ未遠くつたへむためのこすいしふみ、とあり、

碑の裏に、正二位清原宣條卿の文をあり、尾池氏の功もまた大かたならすて不朽に傳はれり、尚委しき事は、やがてこの人のかける紀氏蓋跡記にいへり、

大津　同廿七日條　國府より一里餘　大津より、浦戸をさしてこきいづ云々。

大津は、和名抄に、土佐國、長岡郡、大角(於保都)さあるこれなり、國府より四南の方、今道一里餘にあり、今は大津村さて、江村の商なる一村の名さなれいど、當昔は南葆原、大曾等の郷まで、北は宗部江村等の郷まで、東は香美郡までをさかひて、廣く大津郷と呼びしが、縮まりて一村の名さなれるなるべし、さて昔は此郷のあたり、浦戸より北、入海廣く曳きておおなべたる海岸なりしが、より〳〵に潮汐あせて、處々に堤を築き、田地さなしける島なと名を負へる村々のあるも、もさ海際になりしに據れるを思ふべきなり、かくて日記に、船にのるべき所へわたるさあるは、今の大津村の中なる、鹿兒が崎の東北にあたりて、船戸と稱ふ地あり、これいにしへ國府より出て乘船せられし所なりさいへり、かくて因にいはむ、和名抄に、大角と書きて、於保都と注したるを、世にいおかる人のなきは、角を略訓して、津の假字に用ひしものなりと思へるなるべけれど、訓れなく角を略きて、津に用ひむはおぼつかなきことなり、放れ按ふに、もさは、大津野なりけむを、彼の和銅の制にて、二字に大角さつづめ書き て、當昔は於保都奴と、呼りし郷の名なりしなるべし、さるはもはら、曠野の多かりしよりの名ならむ、今の大津村の東北に、野地と云ふ村ある、其處古の大津の郷に屬きたりしはさらなるに、其地を墾きもはら田畑させるは、近世のことにて、もさは曠野かちなりしさ聞けり、さてこそ、野の稱を負はせて呼べるにても、往昔のさまを思ひやるべきなれ、かくて海津あるに付ては、其津をもさより大津と呼び、曠野あるに付ては、郷名には大津野と云ひしが、源順朝臣の頃には、既く郷名にも、野を省きて、大津と呼ふことゝなれるを、なほ蓋のまゝに、書て、世に通用せしによりて、和名抄にも、大角さかゝれしなるべし、上毛野下毛野さ云ふ、毛の字を省きて、上野、下野さかき、それを又後には、かみつけ、ともつけさ略きて呼ぶことゝなれど、猶もとのまゝに、野の字をかくも似たることなり、こゝはこの辨には、さのみ用なきことなれど、因みに露しおくなり、

鹿兒崎　同條　鹿兒の崎といふ所に、守のはらから、またこと人、これかれ酒などもておひきて、磯におりゐて、わかれがたきことを云ふ、云々。

鹿兒崎は、大津村の西端にあり、今は潮汐退て、こゝより二三十町ばかり西の方、葛島と云ふ所に、堤を築きておおなべたる田地さなれり、誠にこのあたり、入海なりし時には、往來の船の磯邊に泊りて、船かゝりすべく、磯に下り居て遊ぶべき所なり、

浦戸　同條大津より三里　こよひ浦戸にとまる。藤原の言實、橘の季衡、こと人々おひきたり云々。

浦戸は、吾川郡の東畔にて、大津より牛末の方三里にあり、大船出入の港口なり、此所より入海曳きて、土佐郡今の高知城下に通る、此の入海北の方にては、今は五臺山の西北の下より、葛島の堤までに築きめて、大津の方へ潮汐の通をたちたり、

大湊　同廿八日廿九日條　浦戸より二里　浦戸より出て、大みなとをおふ云々。大みなとにとまれり。

大湊は、こし方長岡郡、十市の濱のあたりにありしさせしと見えて、元祿年間、桂井素庵が、望大湊詩文を見るに、大湊は、長岡郡、十市、蚊居田村の東畔にありしよし云ふ、其後、享保年間、安養寺禾麿といふ人、土佐幽考を著はして、それも猶大湊長岡郡、十市ノ濱與池濱之界有稱古港所益是也中古爲葛浜所沒さまるせり、然れども十市の濱は、浦戸よりわづか一里ばかりあれば、浦戸より出し船の更に泊りしさせむこさ、おほつかなきことなり、され

ば其後、野見嶺南といふ者、香美郡下島村と云ふ所に住めりしが、曲さに地を見定め、熟ら考へて、我廬の直南前濱と云へる地、古の大港の跡なりと云ひて、安永年中其圖説を著したりしが、猶いぶかる人も有し趣なるを、果して古へ文化十二年乙亥の洪水に、かの嶺南が云ひし港の礎の砂石を、海に流し盡く大きなる凹の地になりて、鹹に港のさまはあらはれたりしか、其後お〻づからに沙入りて、又本の如く潰れしとぞ、然れば大港は、嶺南が既によるべし、かくて岡本信古が云ひしは、大港の所在は、嶺南がいへりしに聊か違ふことなし、但し香美郡物部川の川末の地、それなるよしにいへれども、もとは今の物部川の外、四の方に別に川ありて、前の濱、久枝村の間を流れて海に入りしかば、其流れの弘くなりし所、すなはち大港にて、今の物部川にはあらず、能くせずば粉らひぬべし、さるは其川すぢを、寛永年中に、當國の執政野中兼山埋めて、其水を今の物部川に落し、一と派の流さなし、跡を田地とせしより、大港は自らに潰れしなるべし、さるによりて、其所を古港と稱ひ、沙地凹になりてありしを、寛永四年丁亥の高潮に、右凹の所の砂打流され、海と一つになり、港の如くなりてありしが、やう〳〵砂入りて、本の如くなりしを、又しも文化の洪水に、砂流れ港の如くなりたりしを、又やう〳〵潰れしなり、されば大港は、今の物部川筋よりは、四の方に在りしなりと云へり、さて又稻毛の實かいへるは、大港は嶺南が定めいへる地なること、さらに疑ひなきを、近き頃破屋平道と云ふものに、香美郡夜須村、カドノ口古港口とあるうさの口といへるは、宇多の口にて、かの宇多の松原のこと、古港口とあるは、大港の跡なり、其故は嶺南がいへる前の濱は、浦戸より二里ばかりなれば、淡あるべきにあらず、夜須へは浦戸より六里許あれば、泊るべき路程なり、それより安中の泊りへ七里ばかり、安中より室津へ六里ばかりあれば、すべての路程も、いさふさはしきことなりといへり、實案に承平年より、天正の年まで、中間六百數十年を經たれば、紀氏臨京の後、夜須に新港をほりしが、其後潰れしも知るべからず、たゞへ承平のころ、かしこに港ありしにもせよ、船路なれば、風波の起止によりて、港をかぞへて泊られざりしは、云ふもさらなり、そはさまれ大港に泊りて居られしほど、國師のもとより酒肴のおくり物有りしよし、日記に見え、其國師は、國府に隣き國分寺の住職なり、大港を前の濱と見るときは、國分寺より一里許南にありて、程遠からればさもありぬべくおぼゆ、若し大港夜須ならんには、國分寺よりは、里數も三里に餘るべく、又路次に物部の大河あり、岸本の崎嶇もありて、物おくらむには容易からねば、似つかはしからぬことなり、又同港に居られし程、池といふ所より稻々の物を、長櫃に荷ひつゞけて、おこせたるよしも見ゆ、池の里より前の濱へは、程さほからねばさも有べきことなり、稻々の物長櫃に荷ひつゞけて辛うじて、三里に餘れる夜須へ贈りけむとは思はれず、其他にも、大港は國府に近き所ならでは、ふさはしからぬこと、日記をよく見て知るべきなり、返す〳〵も、平道が非説にまどふべからずといへり。

池　七月七日條　七日になりぬ。同じみなとにあり云々。かゝるあひだに、人の家の池と名ある所より、鯉はなくて、ふなよりはじめて、川のも、海のも、こと物も、長櫃にになひつゞけておこせたり。わかなこにいれてきじなど花につけたり。わかなぞ、けふをはしらせたる。哥あり、そのうた。あさぢふの野へにしあれば水もなきいけにつみつる若菜なりけり。いとをかし。この池といふは、所の名なり、よき人の男につきて、くだりてすみけるなり云々。

池は、長岡郡十市村の四に、池村とてあり、小湖あるよりおへる地名なり、其小湖は、今も存せりて人のよく知る所なり、人の家の池と名ある所よりと云ひ、又この池と云ふは、所の名なりなどことわりたるは、たゞ池といへば、人家の庭わたりの池と聞ゆるによりて、池と云ふはたしかに地名なるよし、知らせていへるなり、前に水もなき池につみつるといへれど、地名におへるはいへども、實に小湖あるより名につきたるにて、水なき池にはあらず、池と地名を居ながら、已が家の庭わたりの池にて、たやすく摘みたりとなおぼしそ、勞きを思はせて、且つをかしくいへるが、古き歌のならひなり、

宇陀ノ松原　同九日條大港より一里　九日つとめて、大みなとよりなはのとまりをおはんとて、漕出けり云々。かくて、宇陀の松原をゆきすぐ。其松のかず、いくそばく幾ちとせへたりともしらず。もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴とびかかふ云々。

宇陀ノ松原は、香美郡赤岡の北に、兎田村あり、其兎田を、もとはウタと呼りしことしるし、大和の國の宇陀を、古き書に、兎田とかけるを思ふべきなり、かくて今の兎田村より、南須留田、王子、赤岡、岸本などの村々なべて廣く兎田と呼りしが、後に縮まりて一村の名となり、又兎田をウサイダと呼ふことになれるなるべし、即ち今赤岡の濱より、二里ばかり船を出して、沖の方より望み見るには、赤岡の濱より、たゞちに兎田山へ一目に見付らるゝよしなり、さて赤岡より、今の兎田へは一里ばかりも有るに、其間多く田地にて、下り居り飛上りする鷗を沖より見れば、列松の梢に見えつ隱れつ、飛かふさまなるよりて數株の松の本ごとに浪うちよせ、枝ごとに鷗飛かふさま

にいひ、又松の枝ごさに結のすむよし、歌にもよめるなるべし、又一說にはこゝにいへる鶴は、常の鶴にはあらず、鳩なるべし、漢土にても、鳩鶴混じいへることあり、昔古へもしかなりけんと、思ひ合せらるゝことあり、鶴は松上により棲くふものなりと云へり、そはさまれ、こゝは赤岡より岸本かけて、浪邊に列び立てる松を兎田の松原といへるなり、安養寺氏土佐幽考に、宇多松原は、香美郡手結浦之戰名宇土之處豈是乎又稱坂留宇土昔有列松今亡云ふといへり、安養寺氏は享保の頃の人なり、かの頃、未た赤岡、岸本の松原なることの知れざりし故、しか考へたるなるべし、

奈半泊 同十日條　大湊より十里　けふは、このなはのとまりにとまりぬ。

奈半ノ泊は、安藝郡、奈半利河の下にあり、田野浦の東、野根山に上る坂路の麓の地なり、和名抄に、土佐國安藝郡、奈半とあり、大湊より此泊まで、十二里ばかり此所今は港なし、古港といひて其跡あるのみなり、按に万葉卷三に、羈乃浦廻漕燒火氣夕去者行過不得而山邊棚引よしいへるは、此奈半にやと思はるゝよしあり、此地南は海を帶ひ北東に山を負ひたれば、漕燒煙の山に棚引よしいへるに、所のさま能くかなへり、此事はなほ識者が、万葉集名所考に云ひたれば、そを擔き見るときは其趣き知らるゝなり、

羽根 同十一日條　奈半より二里　あかつきに舟をいだして、室津をおふ云々。いましはねといふ所にきぬ。若きわらは、此所の名をきゝて、はねといふ所は、鳥のはねのやうにやあると云ふ。まだをさなきわらはの事なれば、人々わらふにありける。女のわらはなん、この歌をよめる。まことにや名にきく所はねならばとぶがことくにみやこへもがな。

羽根は、安藝郡、吉良川村の西にあり、門入南部の農男がいへりしは、羽根と云ふ名の由緣はしられど、鷲峰山智泉寺と云ふあり、此羽根の支村に、尾儀といふ所ありて、其の地に鷲峰山智泉寺と云ふあれは、鷲によりて負へる名にもや有らん、いかさまにも因みありげなる事なりといひたりき、

奈良志津 羽根より二里

室津 奈良志津より二里　同十二日條　ならしつより、むろ津につきぬ。

奈良志津は、安藝郡、元村の東端、浮津村の西端にあり、同郡なる金剛頂寺を、俗に四寺といへるが、其寺に藏むる所の、康永三年閏二月五日、公文僧賢覺が注進狀に、二和御二町二段一所云々、一所一段十五代、奈良志津一所云々とあり、又浮津八王子社の鰐口の銘に、奈良志津八王子宮奉施入鰐口一鉦、應永三十一年九月九日、藤原恒信敬白とあり、即ち今も元村と浮津との間に、少しの家村ある所を、里民奈良志と呼ぶといへり、是古名のなごりなること疑なし、斯くて古へは、浮津の里民もはら奈良志津に住みて、磯際に船の出入するさるべき所もありしかば、さすがに地のさまも饒はひて有けんを、今の室津の港ほられてよりこのかた、里民みな便によりて今の地にうつりしといへり、

室津は、和名抄に、土佐國、安藝郡、室津(幸呂津)とあり、延喜式、神名帳に、土佐國、安藝郡室津神社と見ゆ、此室津と云へるは、今の室津浦より津呂浦かけての間に、港たつ所ありて船の出入せしなるへし、當皆紀氏の船泊られしと云ふ舊跡の所、さたかに知れたりといへども、蓋し今の津呂浦のあたりならんか、今の津呂浦の港は、寛文元年辛丑國君の命に應して、當國の執政野中氏大く勞き、深口をすべき所にありし三大巖を穿ち除きて、遂に南海往來の船どものやすらかに泊るべき潮港となしたるなり、此を室戸の港、又室津の港ともいへりしを、今の室津浦の港をさし縮めて堀られしより、以來もはの室津の港をは、津呂の港とわかち呼ふことにはなれるなり、斯くて室戶と云へるも、なほ同所の一名にてはあれど、元は城御崎寺の山内のあたりを云ひしならんとぞ思はるゝ、續日本後紀卷四に、承和二年丙寅大僧都傳燈大法師位空海終于紀伊國禮居法師常眞岐國多度郡人俗姓佐伯直云々燒跡阿波國大瀧山之嶽勤念土佐國室戶之崎幽谷應聖明星來影とあり三教指歸にも勤念土州室戶崎云々とあり元享釋書に釋空海云々、往土州室戶崎誦修至于更明星明星飛入口已得非唱添地突瞳、抄空海受學の一ことへいへる條に土州室戶の崎に入求聞持の法を修し給ひ、明星口の中に飛入て、佛力の奇異を示し給ふ云々とあり、弘法大師略頌と云ふものに、神仙記を引て、土佐國室生戶山とあるはいかゞなり、新勅撰集卷十釋教部に、弘法大師、土佐國室戶といふ所にて、

法性の室戶といへど我すめは有爲の浪風よせぬ日ぞなき

現存六帖に、土佐國室戶、

御崎 同十六日條室津より一里　風浪やまねば、なほおなし所にとまれり。たゞむろとより南のきしにつたひける人のあとゝふ浪のうへかな、

などあり、世に名高き所なり、

海に浪なくして、いつしかみさきといふ所に、わたらんとのみ思ふ

云々。

御崎は、これ古に所謂室戸崎なり、絶頂にある寺々、室戸山明星院最御崎寺と唱ふ、俗に東寺といへり、

附考

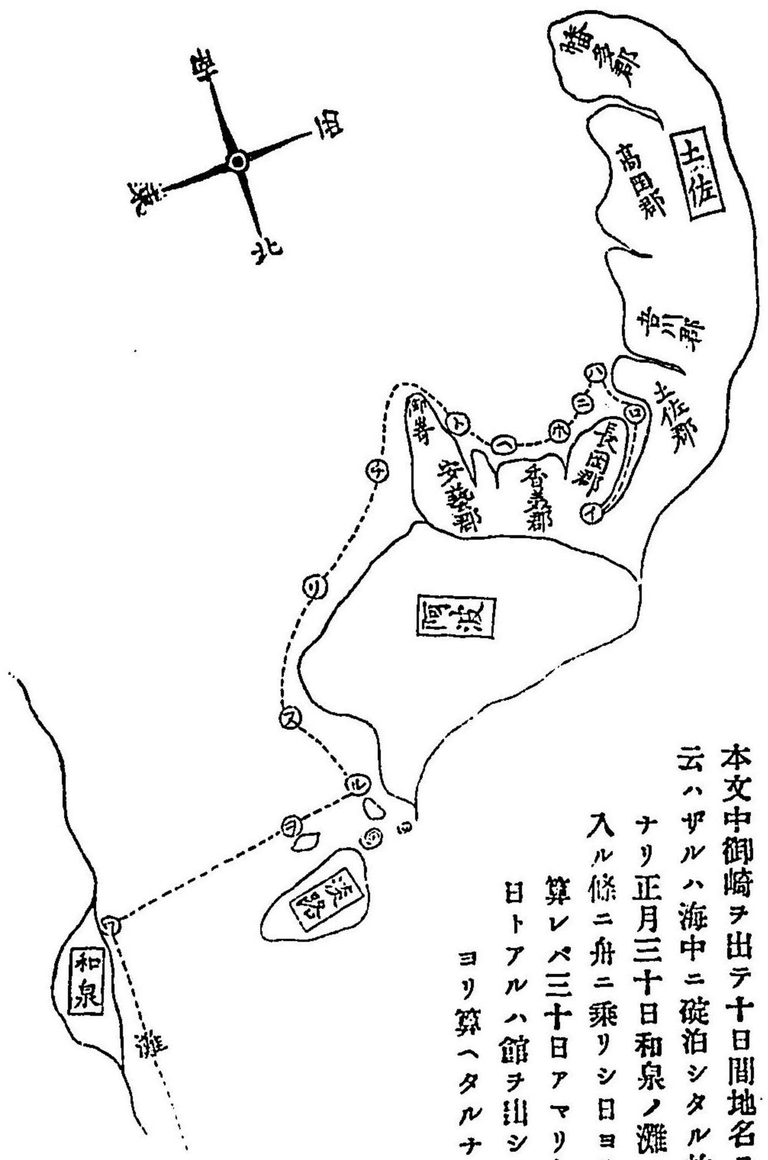
十二日條 廿三日、やきの康敎といふ人あり。此ひと國にかなずしも、いひつかふべきものにもあらずなり云々。

此人は、當國に於ては勿から輕からぬ人にて、かりそめの課役などに召出して、仕ふべき列の人にもあらず、さるに因て錢のさまも、さすがに禮を遣して、昨日などの打さけてあざれし類には、あらずとのよしなり、然るにやきな、やまと作る本も有りて、山と云ふ氏は、姓氏錄に山ノ公、山ノ直、山ノ首などいふか見ゆ、八木と云ふ氏は、同書に、八木連さいふがあれば、いづれもさることなるべく思はるゝによりて、一方に決したることもなく、背來諸注二つながら助け用ひ來れりともものこれおほえたり、然れども是はやきとある方、正しかるべく思ふよしあり、やまとあるは、やきとありしを見遁へて、寫し誤りたる者ならん、やきなるべく思ふは、當國長岡郡新改村長久寺地藏菩薩座の銘に、地藏菩薩修覆、永德二年壬戌正月檀那、伊豆守八木康綱さあり、永德の年より安政の年まで、凡四百七十年にあまれり、苦しきことなり、かくて新改蛟居田村熊線守熊野權現社は、右伊豆守康綱紀伊國より勸請せしよし今八木出雲康道さいふものありて、祖先より代々右權現を祠き仕へまつり來れるが、すなはち康道は康綱より三十五六世の裔にして、これやがて八木康敎の末孫なりさ云ひ傳へたり、

安政四年丁巳二月廿日　古義居士識

弘恭云、貫之朝臣の土佐より京へ歸り上らるゝ海路の次第は、右に揭けたる地理辨によりて、大略は會得せらるべけれど、又曩にものせる、參考標註土佐日記讀本に載せたる航海略圖を添へて參考に供す。

土佐日記航路略圖



本文中御崎ヲ出テ十日間地名ヲ云ハザルハ海中ニ碇泊シタル故ナリ正月三十日和泉ノ灘ニ入ル條ニ舟ニ乘リシ日ヨリ算レバ三十日アマリ九日トアルハ館ヲ出シ日ヨリ算ヘタルナリ

⑴國府　貫之ノ居タル所ナリ
⑵大津一泊　十二月廿一日出發　舟ニ乘所ヨリ此邊ヘ五ル間ニ六泊セリ
⑶浦戸一泊　十二月廿七日ナリ
⑷大湊十泊　十二月廿八日ヨリ正月八日マデ
⑸那波一泊　正月九日ナリ
⑹鳴津二泊　正月十日十一日
⑺室津九泊　正月十二日ヨリ同二十日マデ
⑻海中一泊　正月廿一日
⑼海中四泊　正月廿二日ヨリ同廿五日マデ
⑽海中三泊　正月廿六日ヨリ同廿八日マデ
⑾土佐泊二泊　正月廿九日三十日
⑿野島　今モ此島アリ
⒀田奈川　今田川ト云

跋

土佐の船路の道しるべせし書は。むかし今何くれとれほかれど。ことにたよりよきは。椎園翁が考證になむありける。志かはあれども。なほ宇陀の松原うたがはしく。山崎のまがりのまがれるもあなるは。いとあかぬことなりとて。わが十八公舎の大人が世にいましゝころ。青山堂のあるじと計りて。よなくのいとまに。またの本どもを考へくらべて。かくはものしたまひしにぞありける。さるをこたびれほやけにせむとて。たのれにろの挍合をこはる。こはしたがきのまゝにしあれば。あるは字のわちたる所。あるはかきあやまれる所などのなきにしもあらず。弘隆をちなき身にして聊か挍正はしつれど。なほ見洩したるもれほかるべし。

見む人ろをもて翁を咎むることなかれ。かくて此書世に出なば。
土佐の海路に船出せむ初學のためには。こよなき樶取ところい
ふべけれ。とほてうちてよろこびつゝ。

明治三十一年七月

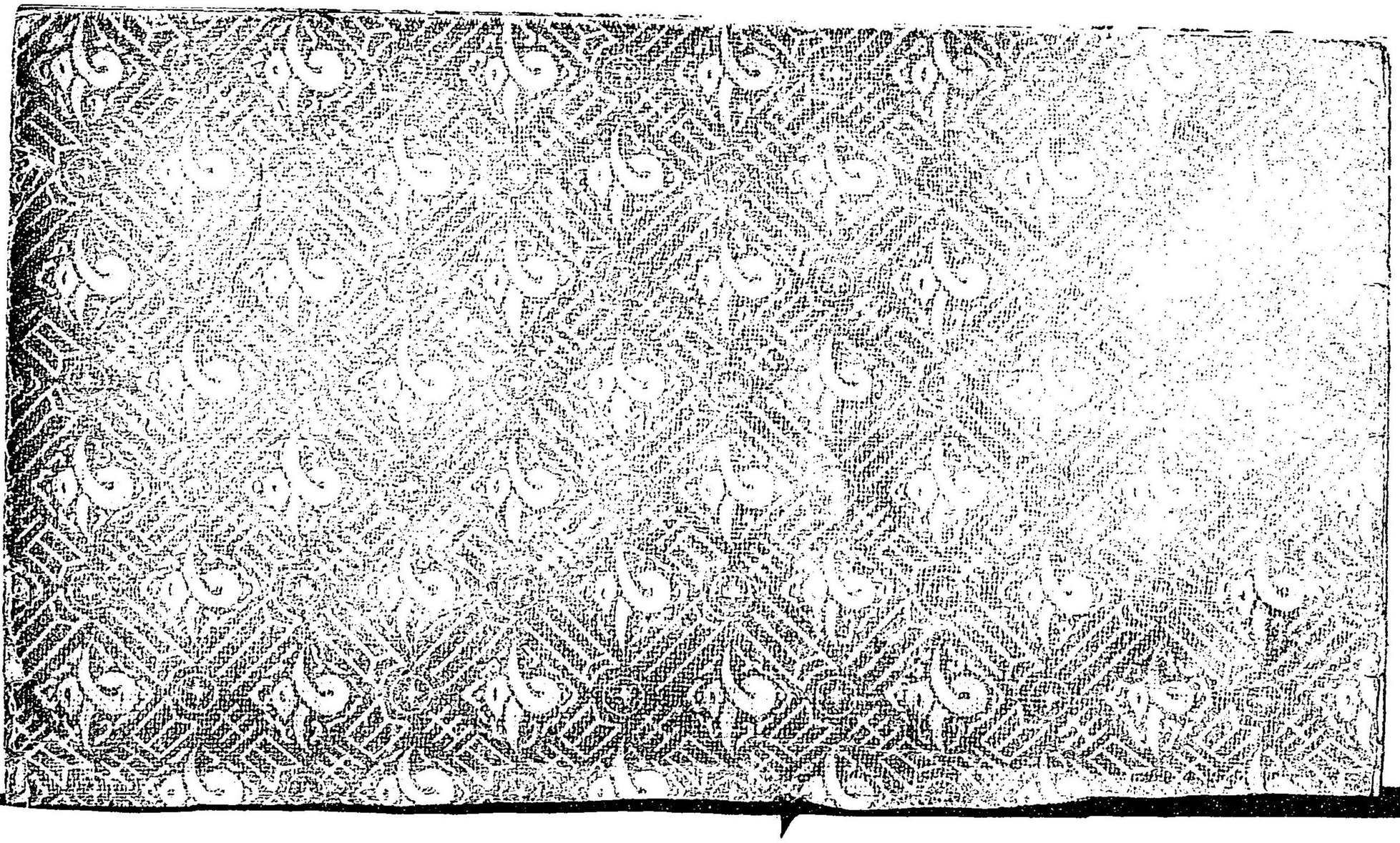
吉野弘隆識

126
119

明治三十一年十月十二日印刷
明治三十一年十月十八日發行

著者 故人鈴木弘恭相續者
版權所有
發行者 東京市小石川區竹早町十三番地 鈴木弘道
印刷者 同小石川區大門町二十五番地 青山清吉
印刷所 同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 島保藏
同牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍工場
同京橋區南傳馬町二丁目十三番地
關東大賣捌所 吉川半七
同日本橋區通三丁目
同 林平次郎
大阪市南區心齋橋南一丁目
關西大賣捌所 松村九兵衛

版權所有

定價二拾錢

青山堂藏版